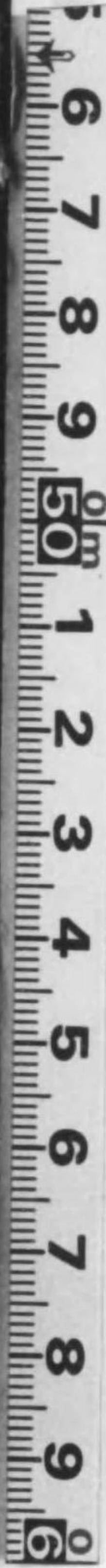


續國譯漢文大成

文學部 四十九

309
65

收
入



始



續國譯漢文大成



吉田待郎氏



文學部 第四十九冊（第十三帙の二）
蘇東坡詩集一の一



蘇東坡詩集第一卷目次

總說

古今體詩

郭綸	一
初發嘉州	一
韙爲王氏書樓	三
過宜賓見夷牢亂山	四
泊南井口期任遼聖長官到晚不及見復來	五
過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符	二首
渝州寄王道矩	六
入峽	七
江上看山	八
涪州得山胡次子由韻	九
留題仙都觀	三
仙都山鹿	四
舟中聽大人彈琴	五
戎州	七
牛口見月	九
夜泊牛口	七
牛口見月	九
戎州	三
舟中聽大人彈琴	三

古今體詩

江上值雪效歐陽體次子由韻	六	過巴東縣不泊聞頗有萊公遺蹟	
嚴顏碑	一	昭君村	六二
屈原塔	三	新灘	六四
望夫臺	三	黃牛廟	六五
竹枝歌	三	新灘阻風	六七
八陣磧	三	黃牛廟	六七
諸葛鹽井	三	蝦墓培	六八
白帝廟	三	出峽	六九
永安宮	三	遊三遊洞	七三
過木樞觀	三	遊洞之日有亭吏乞詩	七四
巫山	三	寄題清溪寺	七六
巫山廟上下數十里有烏鵲無數取食於行舟之上	五	留題峽州甘泉寺	七八
巫山廟	五	夷陵縣歐陽永叔至喜堂	八〇
神女廟	五		
息壤詩	三		
荊州十首	三		
渚宮	三		
荊門惠泉	三		
次韻答荊門張都官維見和惠泉詩	三		
潤陽早發	三		
夜行觀星	三		
漢水	三		
襄陽古樂府三首	三		
野鷺來	三		
上堵吟	三		
襄陽樂	三		
峴山	三		
阮籍嘯臺	三		
許州西湖	三		
大雪獨留尉氏有客入驛呼與飲至醉	三		
黃河	三		
朱亥墓	三		

次韻水官詩

三六

卷三

古今體詩

辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門外	一四三	雙池	一六
和子由澠池懷舊	一四六	荷花	一五
次韻劉京兆石林亭之作	一四七	魚	一五九
和劉長安題薛周逸老亭	一五〇	牡丹	一四〇
驪山三絕句	一五二	桃花	一六〇
次韻子由岐下詩并序	一五四	李	一六一
北亭	一五五	杏	一六二
橫池	一五六	梨	一六三
短橋	一五七	棗	一六四
軒窗	一五八	櫻桃	一六五
曲檻	一五九	石榴	一六六

桺

槐

松

榆

柳

次韻子由除日見寄

壬寅二月有詔減決囚禁記所經歷寄子由

太白山下早行至橫渠鎮書崇壽院壁

留題延生觀後山上小堂

石鼻城

礦溪石

郿塢

樓觀

題寶鶴縣斯飛閣

壬寅重九不預會獨遊普門寺僧閣有懷子由

客位假寐

九月二十日微雪懷子由弟

病中聞子由得告不赴商州

三首

病中大雪數日未嘗起觀號令趙薦以詩相屬

一九九歲晚三詩寄子由

債歲

別歲

守歲

讀開元天寶遺事

三首

古今體詩

和子由踏青	二二
和子由蠶市	二二三
次韻子由論書	二二五
記所見開元寺吳道子畫佛滅度以答子由	二二八
和子由寒食	二三一
次韻和子由欲得驪山澄泥硯	二三三
次韻和子由聞子善射	三四四
次韻子由彈琴	三四五
中隱堂詩	五六首
鳳翔八觀并序	三三
石鼓	三四
詛楚文	三四四
王維吳道子畫	三四五
是日自礧溪將往陽平憩於翠麓亭	二七
二十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺	二七六
維摩像唐楊惠之塑在天柱寺	二四七
東湖	二五〇
真興寺閣	二五二
李氏園	二五四
秦穆公墓	二五六
和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書	二五四
將往終南和子由見寄	二六七
讀道藏	二七〇
真興寺閣禱雨	二七一
七月二十四日以久不雨出禱礧溪	二七三
二十六日五更起行至礧溪天未明	二七五
是日自礧溪將往陽平憩於翠麓亭	二七六
二十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺	二七六

卷五

古今體詩

和子由記園中草木	十首
紀夢	二九三
次韻子由種菜久旱不生	三〇五
大老寺竹間閣子	三〇六
周公廟	三〇七
戲作賈梁道詩	三〇八
南溪之南竹林中新構一茆堂名之曰避世堂	三〇九
重遊終南子由以詩見寄次韻	三一〇
自清平鎮往返四日得十一詩	三一五
和子由記園中草木	十首
紀夢	三〇五
次韻子由種菜久旱不生	三〇六
大老寺竹間閣子	三〇七
周公廟	三〇八
戲作賈梁道詩	三〇九
南溪之南竹林中新構一茆堂名之曰避世堂	三一〇
重遊終南子由以詩見寄次韻	三一〇
自清平鎮往返四日得十一詩	三一五
和子由記園中草木	十首
紀夢	三〇五
次韻子由種菜久旱不生	三〇六
大老寺竹間閣子	三〇七
周公廟	三〇八
戲作賈梁道詩	三〇九
南溪之南竹林中新構一茆堂名之曰避世堂	三一〇
重遊終南子由以詩見寄次韻	三一〇
自清平鎮往返四日得十一詩	三一五
和子由記園中草木	十首
紀夢	三〇五
次韻子由種菜久旱不生	三〇六
大老寺竹間閣子	三〇七
周公廟	三〇八
戲作賈梁道詩	三〇九
南溪之南竹林中新構一茆堂名之曰避世堂	三一〇
重遊終南子由以詩見寄次韻	三一〇
自清平鎮往返四日得十一詩	三一五

愛玉女洞中水	三四	
自僊游同至黑水	三五	
南溪有會景亭	三七	
凌虛臺	三九	
竹籬	三一	
漢陂魚	三二	
十二月十四日夜微雪	三三	
九月中曾題二小詩於南溪竹上	三五	
司竹監燒葦圖	三六	
和子由木山引水	二首	三四
和子由苦寒見寄	四五	
寄題興州晁太守新開古東池	四七	
華陰寄子由	四八	
和董傳留別	四九	
西蜀楊耆二十年前見之甚貧今見之亦貧	五一	
夜直祕閣呈王敏甫	五三	
謝蘇自之惠酒	五四	

卷六

古今體詩

次韻柳子玉見寄	三九	
送曾子固倅越得燕字	三〇	
王頤赴建州錢監求詩及草書	三一	
秀州僧本望靜照堂	三五	
石蒼舒醉墨堂	五六	
送安惇秀才失解西歸	三六九	
和子由木山引水	二首	三四
和子由苦寒見寄	四五	
寄題興州晁太守新開古東池	四七	
華陰寄子由	四八	
和董傳留別	四九	
西蜀楊耆二十年前見之甚貧今見之亦貧	五一	
夜直祕閣呈王敏甫	五三	
謝蘇自之惠酒	五四	

送任伋通判黃州兼寄其兄孜	三一	
次韻子由初到陳州	二首	三七
次韻子由綠筠堂	三六	
送劉攽倅海陵	三七	
送錢藻出守婺州得英字	三九	
送呂希道知和州	三八	
次韻王晦夜坐	三八四	
送文與可出守陵州	三八五	
送劉道原歸觀南康	三八七	
出都來陳所乘船上題小詩八首和之	三九一	
次韻張安道讀杜詩	三九六	
送張安道赴南都留臺	四〇一	
傅堯俞濟源草堂	四〇五	
陸龍圖詵挽詞	四〇六	
胡完夫母周夫人挽詞	四〇八	
次韻柳子玉湯陳絕糧	二首	四一〇
潁州初別子由	二首	四三
歐陽少師令賦所蓄石屏	四七	
陪歐陽公燕西湖	四九	
十月二日將至渦口五里所遇風留宿	四三	
出颍口初見淮山是日至壽州	四五	
濠州七絕	四七	
壽州李定少卿出餞城東龍潭上	四九	
塗山	四八	
彭祖廟	四九	
逍遙臺	四九	
觀魚臺	四九	
虞姬墓	四一〇	
四望亭	四二	
浮山洞	四三	

發洪澤中途遇大風復還 ······ 四三四
十月十六日記所見 ······ 四三六
廣陵會三同舍各以其字爲韻仍邀同賦 ······ 四三八

劉貢父 ······ 四三八
孫巨源 ······ 四四一
劉莘老 ······ 四四二

卷七

古今體詩

遊金山寺 ······ 四四七
自金山放船至焦山 ······ 四五〇
甘露寺 ······ 四五三
次韻子由柳湖感物 ······ 四六〇
次韻楊寢早春 ······ 四六三
初到杭州寄子由二絕 ······ 四六五
次韻柳子玉 二首 ······ 四六七
地爐 ······ 四六七
紙帳 ······ 四六八

曬日遊孤山訪惠勤惠思二僧 ······ 四七〇
李杞寺丞見和前篇復用元韻答之 ······ 四七一
再和 ······ 四七六
遊靈隱寺得來詩復用前韻 ······ 四七九
戲子由 ······ 四八二
送蔡冠卿知饒州 ······ 四八六
嘲子由 ······ 四九〇
越州張中舍壽樂堂 ······ 四九一
桃屯田挽詞 ······ 四九四

送岑著作 ······ 四九五

雨中明慶賞牡丹 ······ 四九七
吉祥寺賞牡丹 ······ 四九八
吉祥寺僧求閣名 ······ 四九九
和劉道原見寄 ······ 五〇〇
和劉道原咏史 ······ 五〇一
和劉道原寄張師民 ······ 五〇三
送張職方吉甫赴閩漕六和寺中作 ······ 五〇五
和子由柳湖久涸忽有水 二首 ······ 五〇六
雨中遊天竺靈感觀音院 ······ 五〇九
贈上天竺辯才師 ······ 五一〇

和蔡準郎中見邀遊西湖 三首 ······ 五一一

六月二十七日望湖樓醉書五絕 ······ 五六一
七月一日出城舟中苦熱 ······ 五二九
宿餘杭法喜寺後綠野堂 ······ 五二一
宿臨安淨土寺 ······ 五二三
自淨土寺步至功臣寺 ······ 五二六
遊徑山 ······ 五二九
自徑山回得呂察推詩 ······ 五三四
宿望湖樓再和 ······ 五三六
夜泛西湖五絕 ······ 五三七

焦千之求惠山泉詩 ······ 五三三

答任師中次韻 ······ 五四六

卷八

古今體詩

- 沈諫議召遊湖不赴明日得雙蓮於北山下 西七
 和歐陽少師會老堂次韻 西九
 題永叔會老堂 西一
 和歐陽少師寄趙少師次韻 西二
 監試呈諸試官 西三
 望海樓晚景五絕 西四
 試院煎茶 西五
 孫莘老求墨妙亭詩 西六
 李公擇求黃鶴樓詩 西七
 八月十日夜看月有懷子由并崔度賢良 西八
 催試官考較戲作 西九
 八月十七日復登望海樓自和前篇 五首 西一
 秋懷 二首 西二
 哭歐陽公孤山僧惠思示小詩次韻 西三
 梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛次韻 西四
 和沈立之留別 二首 西五
 和陳述古拒霜花 西六
 次韻孔文仲推官見贈 西七
 朱壽昌郎中少不知母所在求之五十年 西八
 湯村開運鹽河雨中督役 西九
 是日宿水陸寺寄北山清順僧 二首 西一
 鹽官部役戲呈同事兼寄述古 西二
 鹽官絕句 四首 西三
 南寺千佛閣 西四
 北寺悟空禪師塔 西五
 塔前古檜 西六
 僧爽白雞 西七
 六和寺冲師闢山溪爲水軒 西八
 冬至日獨遊吉祥寺 西九
 後十餘日復至 西一
 和邵同年戲贈賈收秀才 三首 西二
 遊道場山何山 西三
 贈孫莘老七絕 西四
 莘老葺天慶觀小園有亭北向 西五
 至秀州贈錢端公安道並寄其弟惠山老 西六
 秀州報本禪院鄉僧文長老方丈 西七
 王復秀才所居雙檜 二首 西八
 宋叔達家聽琵琶 西九
 吳中田婦歎 西一

卷 九

古今體詩

- 元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作 六五七
 正月九日有美堂飲醉歸徑睡 六五九
 次韻答章傳道見贈 六六一

- 法惠寺橫翠閣 六六七
 祥符寺九曲觀燈 六七〇
 上元過祥符僧可久房蕭然無燈火 六七一

正月二十一日病後述古邀往城外尋春	六七三	贈別	一四
有以官法酒見餉者	六七四	次韻代留別	七〇六
飲湖上初晴後雨	二首	六夫茶	七〇七
往富陽新城李節推先行	六七八	薄命佳人	七〇八
風水洞二首和李節推	六九一	吉祥寺花將落而述古不至	七一
獨遊富陽普照寺	六九四	述古聞之明日卽至坐上復用前韻同賦	七一
自普照遊二庵	六九五	李鈴轎坐上分題戴花	七二
富陽妙庭觀董雙成故宅發地得丹鼎	二首	於潛令刁同年野翁亭	七三
新城道中	六九七	於潛女	七四
山邨五絕	六九八	自昌化雙谿館下步尋溪源	二首
癸丑春分後雪	六九九	於潛僧綠筠軒	七五
湖上夜歸	七〇一	與臨安令宗人同年劇飲	七六
曾元恕游龍山呂穆仲不至	七〇二	寶山畫睡	七七
寒食未明至湖上太守未來兩縣令先在	七〇三	僧清順新作垂雲亭	七八
次韻孫莘老見贈時莘老移廬州因以別之	七〇四	五月十日與呂仲甫等同泛湖游北山	二首

會客有美堂周邠長官與數僧同泛湖	二首	七三	追和子由去歲試舉人洛下所寄	五首	七〇
席上代人贈別	三首	七三五	過廣愛寺見三學演師	三首	七五
留題徐氏花園	二首	七三六	韓子華石淙莊	七四八	七四八
唐道人言天目山上俯視雷雨	七三九				

蘇東坡詩集總說

唐賢の詩は、率ね溫柔敦厚であつて、所謂古詩三百篇の遺意が存して居る。降つて唐季五代になると、詩風が鐵佻薄弱に流れた。宋興つて詩壇に西崑體（略して崑體ともいふ。）が行はる。西崑體といふのは、楊億、劉筠、錢惟演の徒が、唐の李商隱の詩に倣つて、故事を用ひ、専ら鮮麗ならんことを力めたもので、其の弊は、ただ好看な文字のみを剪裁して、商隱に擬し得たりと爲すに至つたのである。

嗣いで蘇舜欽は、豪放を以て自ら異にし、筆を下すこと縱横である。梅堯臣は、高淡を以て宗となし、思を運らすことが精微である。何れも新意を出して一時に振ひ、相共に崑體一派の詩弊を矯めやうとしたが、惜しいかな、其の力足らざるの憾があつた。

蘇東坡出づるに及んで、其の天才の宏放なる、其の學問の淵博なる、其の識見の高絶なる、波瀾を卷いて小詩に入れ、一世を風靡した觀がある。東坡の詩壇に於ける地位は、獨り當時の第一人者たるものならず、有宋三百年、其の右に出づるものを見ない。其門人黃庭堅、秦觀、秦觀、陳師道の徒、東西に木鐸し、宋の詩風がここに一變した。

宋人の詩に於ける縱横自在、意の到る所の筆隨ふの一境を拓いて、其の用墨を新にしたが、東坡の詩は、其の最も至れるものである。東坡の文章は、縱横意の如くに運んで、筆端の到る所、自ら天下

の至文を成すと言はれて居るが、其の詩も亦、飄逸清廓である。天分が既に古今得易からざる奇才である上に、其の身世も亦波瀾の盡くるなきに遭つた。幽囚の苦、遷謫の厄、驚くべきもの、哀しむべきもの、怒罵すべきもの、冷笑すべきものがあると共に、江山風月、塵埃の外に逍遙し、忽にして莊語、忽にして諧謔、議論となり、譬喻となり、直敍し、側寫し、行く雲の如く、流るる水の如く、千言萬語、實に天下の偉觀である。

東坡の詩、既に飄逸清廓である。詩は飄逸清廓でなければ、韻が高くなない。東坡の波瀾多き生涯を通じての豊功偉節は、其の忠厚正大の意が外に發したものである。詩に忠厚正大の意がなければ、風雅の旨でない。東坡の卓然として一家を成し、有宋に冠絶せる所以のもの、決して偶然でない。

唐宋詩醇に、

試の器識學問は、政事に見はれ、文章に發す。史に稱す、言は以て其の猷あるを達するに足り、行は以て其の爲するあるを遂ぐるに足り、節義は以て其の守あるを固むるに足る。皆、志と氣と之を爲すなり、惟詩も亦然り、地負海涵、一體を名けずして、其の旨要の在る所を核ぬ。我詩雖云拙、心平聲韻和といへるが如きは、此れ試が自ら其詩を評せるものなり。作詩熟讀毛詩・國風・離騷、曲折盡在是とは、此れ試が自ら其の人を教ふる所以を謂へるものなり。

且夫れ精深華妙とは、則ち蘇轍之を稱せるなり。公如大國楚、吞五湖三江とは、則ち黃庭堅之

を稱せるなり。天才宏放、宜與日月爭光とは、則ち蔡條（字は約之、百衲居士と號す）之を稱

せるなり。屈注天潢、倒連滄海、變眩奇怪、終歸潭雅とは、敖陶孫（字は器之、曠庵と號す）之を稱せるなり。之を前にしては、曹劉陶謝、之を後にしては、李杜韓白、學ばざる所なし。亦工ならざる所なし。同時の歐陽王黃、猶ほ俱に遜謝す。洵なるかな、千古に獨立して、一代一人の詩にあらざるなり。

と。清の趙雲松が東坡の詩を評する二三の例をいふと、

坡詩の人に絶する處は、議論英爽、筆鋒精銳にして、重きを擧ぐること輕きが若きに在り。之を讀むに、甚しくは力を用ひざるに似て、而も力は已に十分に透る。此れ天才なり。

坡詩は鍛錬を以て工となさず。其の妙處は、心地空明、自然に流出し、一に全く力を著げざるに似て、而して自然に心脾に沁入するに在り。此れ其の獨絶なり。

坡公は莊列諸子及び漢魏晉唐諸史に熟す。故に遇ふ所に隨つて、輒ち典故あり、以て其の援引に供ふ。此れ臨時檢書者の能く辨する所にあらざるなり。

詩人、成語佳對に遇へば、必ず肯て放過せず。坡公は尤も剪裁に妙なり。工巧と雖も、而も纖佻に落ちず。其の才分の大なるに由るなり。

東坡は大氣旋轉、句法字法の中に屑屑たらずと雖、而も筆力の到る所、自ら創格を成す。

心地空明、自然に流出すといひ、自然に心脾に沁入すといふのは、よく坡詩の特長を説いて居る。

沈德潛も評して、

蘇子瞻は胸に洪爐あり、金銀鉛錫皆鎔鑄に歸す。其筆の超曠天馬の轡を脱するに等しく、飛遷遊戲、窮極變幻而して意中の出さんと欲する所に適如たり。韓文公の後、又一境界を開闢せり。と。坡詩は長篇短章筆が暢びて心持がよい。筆勢の赴く處は、まことに大空を破つて來た天馬の轡繩すべからざるが如きものがある。而して其の比喩に工なる、たとひ陳腐の言でも、一たび坡公の洪爐に入れば、忽ち清新の文字と化し去る。

褰衣歩月踏花影。爛如流水涵青蘋。

我行西北隅。如渡月半弓。

永嘯來天風。千山動鱗甲。萬谷酣笙鐘。

風過如呼吸。雲生似吐含。

夢雲忽變色。笑電亦改容。

青山偃蹇如高人。當時不肯入官府。

治生不求富。讀書不求官。譬如飲不醉。陶然有餘歡。

欲知垂盡歲。有似赴壑蛇。修鱗半已沒。去意誰能遮。

一方、漫に坡詩を評論した人の中で、張舜民の如きは、

仔細檢點不無利鈍。

と言ひ、楊時も、風雅の意を知らないと言つた。即ち龜山語錄に、

文を爲る、溫柔敦厚の氣あるを要す。人主に對する語言及び章疏は、文字溫柔敦厚、尤も無かるべ

からず。子瞻が詩の如きは、譏玩する所多くして、殊に憚君を愛するの意なし。

凡そ詩は必ず之を言ふものは罪なく、之を聞くものは、以て戒しむるに足らしむ。此れ諭諫を尙ぶ所以なり。東坡の詩の如きは、則ち之を言つて安んぞ罪なきを得ん。而して之を聞いて、豈以て戒しむるに足らんや、

とある。恐らくは皆、篤論ではなからう。

東坡は既に譬喻に工である。又能く諧謔嘲笑に長じ、幾んど一種の天才である。爲に語言を以て禡を賣ひ、仕宦に浮沈した。又禪を好み、往往禪を借りて談語をなす。故に瀟洒の詩、雋逸の詩に富んで居る。

然れども坡老の本色は、窮通利達を見ること、雲煙の如く、人生を渺視し、萬世を大觀する所にある。

久知世界一泡影。大小眞偽何足評。

形骸一塵垢。貴賤兩草木。

我生涉世本爲口。一官久已輕草履。

天倫の至情、亦、坡詩に於て之を見る。

百川日夜逝。物我相隨去。惟有宿昔志。依然守故處。近別不改容。遠別涕霑胸。咫尺不相見。實與千里同。

人生無二離別。誰知二恩愛重。

與君今世爲兄弟。又結來生未了因。

杜少陵を詩聖と稱する所以は、其詩の萬有を包涵して、神力が之に加はつて居るからである。併し、其の沈痛悲壯の辭は、時艱に遭遇し、道途に倥偬し、皇皇として席の暖まるに暇がなかつた爲であらう。故に其の詩は、益々苦んで益々工となつたものである。

東坡も亦然りで、其の沈鬱豪邁の音は、皆、窮詠艱難の際に發したものである。東坡の詩に於ける才力は、決して少陵に減じない。故に窮して益々巧みとなる。鳳翔に筮仕してより、語言を以て禍を賣ひ、仕途に浮沈があつて、風霜塵土の中に顛躪した。かくて開封府の推官を以て杭州に通判となり、而して密州、而して徐州、而して湖州、而して黃州、而して登州、頴州、揚州、定州、惠州、儋州と轉轄したのである。其の間、再び朝命を被り、殿廷に召されたが、其多くは外に出でて不遇の境に在つた。是が其の詩の神境に進んで、其詩をして不朽ならしめた所以である。少陵と東坡とは、世を興にして顔頷する兩詩聖である。

鳳閣を鷁閣となし、龍門を虬戸となした所から起つたさうである。坡詩を讀むもの、李杜の詩と合せて之を讀み、其の菁を挹み其の華を抜いて、諷誦し、世の唐詩を學ぶもの、宋詩を學ぶものの弊風を一掃せば、ここに眞詩を得るに庶いであらう。

と言つた。五年、福昌主簿に調せらる。復、制策に對して三等に入る。宋より以來、制策三等に入るは、ただ吳育（卒して正肅と謚す、集五十卷あり。）と軾とあるのみ。

大理評事簽書鳳翔府の判官に除せらる。英宗の治平二年（皇紀一七二五年、西暦一〇六五年）、入りて登聞鼓院に判となつた。

殿公、梅聖
翁に與ふる

英宗は、藩邸に在る比より其の名を聞き、唐の故事を以て、召し入れて翰林知制誥となさうとした。韓魏公、言を知る。

宰相韓琦曰く、
軾は遠大の器なり。他日自ら當に天下の用を爲すべし。朝廷に在りて之を培養するを要す。今驟に之を用ひなば、則ち天下の士は、未だ必しも以て然りとなさじ。適以て之を累はすに足る。と。且つ請うて軾を召し、試二論に及んだが、復、三等に入り、直史館を得た。軾は琦の前言を聞いて、

韓公は人を愛するに徳を以てす、

と喜んださうである。父の喪が除いたので、朝に還る。

適王安石政を執る。素より軾の己に異なるを惡み、以て官告院（宋史職官志に、官告院、主管官一員、掌吏兵・勳封・官告ニ云々）に判たらしめた。既にして、安石は科舉を變じて學校を興さうとした。兩制三館（史館・昭文館・集賢院を三館といふ。皆、崇文院に寓す）に詔があつて之を議せしむ。軾が議を上ると、神宗は即日召對された。軾曰く、

陛下天縱文武、明かならざるを患へず、勤めざるを患へず、斷せざるを患へず。但患ふる所は、治を求むる太だ急に、言を聽く太だ廣く、人を進むる太だ銳きことなり。願くは鎮むるに安靜を以てし、物の來るを待ちて、然して後、之に應じたまへ、

と。帝は悚然として、

神宗を諱む

朕當に之を熟思すべし、

と宣ふ。安石はもとより悦ばない。命じて軾を開封府推官に權たらしめ、將に事を以て之を困しめやうとした。然るに、軾は決断精敏であるから、聲聞がますます遠きに及んだ。安石が新法を創めると、軾は上書して之を論じた。軾は安石の帝を賛けるに獨斷を以てし、帝専ら之に信任したまゝを見、開封府の試官と爲つたので、因りて進士を試するに、

晉武の吳を平ぐるや、獨、斷じて克ち、苻堅の晉を伐つや、獨、斷じて亡ぶ。齊桓は、専ら管仲に任じて霸となり、燕喩は、専ら子之に任じて敗る。事同うして功異なる、

といふ策問を發した。安石はますます怒り、御史謝景溫（字は師直、王安石と善し）をして其の過を論奏せしめ、窮治して見たが、得る所がなかつた。
軾は遂に外を請ひ、杭州に通判となり、徙つて密州に知となり、又、徐州に徙る。河水が曹村に決れて泛溢し、城下を漚り、漲ると思ふ間もなく洩れて、城が將に敗れやうとした。軾は武衛營に至り、卒長を呼んで、爲に力を盡くしたのである。卒長は、

太守も猶ほ塗潦を避けない。吾が儕小人は、當に命を效すべきである、
と言つて、其の徒を率ゐ畚鍤（畚はモツコ、土を盛る器。鍤はスキ、土を起す農具）を持ちて出で、遂に東南に長堤を築いた。けれども雨が日夜止まないで、城が沈まないこと三版。（高さ一尺を版となす）復、朝に請ひて故城を増築して、木岸を爲つた。水の再び至るを慮つて、其の備へをなし

たのである。徙つて湖州に知となる。
御史李定・舒亶・何正言等は、軾の謝表の語を摭め、諷詩に託して謗をなすと媒蘖し、逮へて臺獄に赴かしめ、之を死に寧かうとした。

帝は、獨り之を憐みたまひ、黃州團練副使として其州に安置された。(黃州は今之湖北黃州府) 軾は幅巾芒屨、田父野老と谿谷の間に從ひ、室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す。

帝、嘗て宰相王珪、蔡確に語り、蘇軾に命じて國史を成さしむ。珪に難色があつたので、帝は軾を不可といふのであれば、姑く曾鞏を用ひよと仰せられた。そこで鞏は太祖總論を進めたが、帝は意に允さなかつた。手札して軾を汝州に移す。軾は未だ汝に至らないで、上書して自ら言ふ、一家二十口、饑寒の憂迫る。常州に薄田あれば、之に居らんことを願ふと。

王安石を見
る

王安石曰く、
朝に奏して、夕には可を報せらる。道中、金陵を過り、王安石を見て、

大兵大獄は、漢唐滅亡の兆なり。

今、西方は連年兵を用ひ、東南は數々大獄を起す。公、獨一言

以て救ふなきか、

と言つた。安石曰く、

二事は皆、惠卿が之を啓いたもの。安石は外に在り、何ぞ敢て言はん、

と。又曰く、

人は須らく是れ一の不義を行ひ、一の不事を殺して、天下を得るとも、爲ざるを知つて、乃ち

と。軾は戯れて、

可なるべし、

り、始て分れて二となる。唐の中葉に及び、府兵を變じて長征の卒となす。是より農は穀帛を出して、以て兵を養ひ、兵は性命を出して、以て農を衛る。聖人復起ると雖、易ふる能はざるなり。

今、免役は實に大に此に類せり。公、驥に免役を罷め、差役を行はんと欲す。正に長征を罷め、民兵を復するが如し。蓋し未だ易からざるなり、

と。光は以て然りと言はない。軾又政事堂で陳べると、光は忿然とした。軾曰く、昔韓魏公、陝西の義勇を刺す。公、諫官となつて、争ふこと甚だ努め、韓公は樂しまない。公も亦顧みなかつた。豈、今日相となつて、軾の盡言を許さざるか、

と。尋で翰林學士に除せられ、二年には、侍讀をも兼ねた。嘗て祖宗の寶訓を読み、因りて時事に及ぶ。軾歎言すらく、

今、賞罰明かならざれば、善惡勸沮する所なし。又、黃河の勢、方に北流し、而して之を彊ひて東せしめ、夏人入りて鎮戎に寇し、數萬人を殺掠せしも、帥臣掩蔽し、以て聞せず。毎事此の如くんば、恐くは寝く裏亂の漸をなさん、

と。軾嘗て禁中に鎖宿し、便殿に召對す。宣仁后（宣仁聖烈皇后、神宗の母）曰く、卿の官（左近に）此に至るは、乃ち先帝の御意である。先帝、卿の文章を誦する毎に、必ず歎じて、奇才奇才と仰せられた。但、未だ卿を進用するに及ばなかつたまであると。軾は覺えず哭して聲を失した。宣仁后も哲宗も泣き、左右も皆感涕した。已にして坐を命じ茶を賜ふ。御前の金運燭（天子の御殿にて金運燭を微して置る）

もす燈（提灯）を徹し、送つて院に歸へらしむ。

四年、軾は當軸のものに容れられないのを度り、遂に外を請ひ、龍圖閣學士に拜されて杭州に知なる。未だ行かざるに、諫官に論せられて嶺南に遷さる。軾密に疏す、朝廷宜しく深く罪すべからず、仁政の累をなさんと。

宣仁后は、心に其の言を善いとせられたが、用ひることは出來なかつた。既にして軾は杭に至る。大旱であつて、饑疫が並に作る。軾は本路の上供米を減せんことを請ひ、又、價を減じて常平米（常平倉の米）を糶し、多く餌粥藥劑を作つたので、活きるものが多かつた。

杭は本、江海の地、水泉が鹹苦で、居民は稀少。唐の刺史李泌、始て西湖の水を引いて、六井を作り、民、水に足る。白居易に及んで、又、西湖の淤水を浚ひて、漕河に入れ、河より田に溉ぐ千頃、民以て殷富であつた。湖水に葑が多いので、宋では廢てて治めなかつたが、葑積んで田となり、水が幾もなくなつた。漕河は湖水の利を失ひ、給を江湖に取る。六井も亦、幾んど廢した。

軾は茅山の一河、専ら江湖を受け、鹽橋の一河、専ら湖水を受くるを見、遂に二河を渡つて、漕に通じた。後、堰暉を造つて、湖水蓄洩の限となし、餘力を以て復、六井を完うした。又、葑田を取つて湖中に積むこと、南北徑三十里、長堤を爲り、以て行く人を通せしめた。堤が成つて、芙蓉楊柳を其の上に植う。之を望むに畫圖のやうで、杭人は之を蘇公堤と名けた。

浙江の潮は、海門より東來して、勢、雷霆の如くである。而して浮山が江中に峙ち、漁浦諸山と大

牙の如く相交はり、洞底激射し、年公私船を敗ることが計へきれない。軾は江の上流地、石門と名くる處より漕河を鑿ち、慈浦より北折し、小嶺に抵り、古河を渡ひて浮山の險を避けしめやうとした。

軾は復、言ふ、

三吳の水、瀦して太湖の水となり、溢れて松江となり、以て海に入る。慶曆以來、松江に挽路を築いて扼塞す。故に今、三吳に水が多い。挽路を鑿ちて十橋となし、以て江勢を汛がんと欲す、と。俱に用ひるを果さないので、世人は以て恨となした。軾は再び杭に莅み、民に徳があつたので、家毎に畫像がある。飲食には必ず祝し、生祠を作つた。

六年召して吏部尚書となしたが、未だ至らず。弟轍を右丞に除し、翰林承旨に改む。數月、復、謫を以て外を請うたから、龍圖閣學士を以て潁州に知たり。七年には、揚州に徙る。未だ歳を閏しないに、召して兵部尚書兼侍讀となし、郊祀には鹵簿使たらしむ。

皇后及び大長公主が積車に乗り、儀仗を避けなかつたから、軾は之を効奏した。駕が廻り、皇后に詔して迎謁するながらしめた。

禮部尚書に遷り、端明殿翰林侍讀兩學士を兼ぬ。

高麗、使を遣はして書を請うたから、朝廷は故事を以て之を許した。軾曰く、

より甚しきあり。其れ予ふべけんや、

と。それは聽かれなかつた。

八年、宣仁后が崩れて、哲宗政を親らしたので、軾は外に補せんことを乞うた。兩學士を以て定州に知たらしむ。時に國事將に變せんとし、軾は入りて辭することが出來ないから、既に行いて上書した。定州の軍政は壞弛して居つたから、春に會して大に閱す。軾、命じて舊典を擧げしに、帥は常服して張中を出で、將吏は戎服して事を執り、敢て慢するものもなかつた。定人は言ふ、韓琦より後、此禮を見ないで、今に至ると。

初、宣仁后在しし時、侍御史賈易・監察御史董敦逸・黃慶基等、先後して軾及び弟轍の作つた文詞が先朝を譏斥すと論す。三人のもの皆、坐して黜けらる。紹聖(哲宗の年號)の初に及び、御史復言をなし、軾を謫して英州に知たらしむ。未だ至らずして寧遠軍節度副使に貶せられ、惠州に安置された。居ること三年、又、瓊州別駕に貶せられて、昌化に居る。昌化は故の儋耳の地で、人の居る所ではない。食飯具はらず、藥餌も得られない。

初、官屋を僦ふ、有司なほ不可といふ。軾は遂に地を買ひて室を築く。僧人は甃を運び、土を畚して之を助く。屋を爲る三間、人は其の憂に堪へない。軾は獨り幼子と菜を食ひ水を飲み、書を著はして樂んで居た。

徽宗の時、連に永州に徙り、三大赦を更て還る。玉局觀に提舉(管理)となり、朝奉郎に復す。

地を買ひて

室を築く

軾は元祐より以來、未だ嘗て歳課を以て乞はない。故官を遷して此に止まる。未だ幾ならぬで、常州に卒す、年六十六。

軾、轍と文章を爲る、俱に其の父を師とする。弱冠、父子兄弟、京師に至る。一日にして聲名赫然として四方に動く。軾嘗て自ら謂ふ、
文を作る、行雲流水の如し。初より定質なし、但、常に當に行くべき所に行き、止らざるべからざる所に止る。嬉笑怒罵の辭と雖、皆書して之を誦すべし。
と。其の體は、渾涵光芒、百代に雄視し、文章ありて以來、蓋し亦鮮い。洵は晩にして易傳を作り、未だ究めなかつたので、軾に命じて其の志を述べしめた。軾は易傳を成し、復、論語說を作る。
後、海南に居つて書傳を作る。又、東坡集・奏議内外制・和陶詩等がある。一時の文人、黃庭堅・晁補之・秦觀・張耒・陳師道の如き、舉世未だ之を識らなかつたが、軾は之を待つこと朋儕の如く、未だ嘗て師資を以て自ら與へなかつた。舉子となつてから、侍從に出入するに至るまで、必ず君を愛するを以て本となして居る。挺挺たる大節は、毎に小人の爲に忌惡せらる。身後にも、猶ほ名を元祐黨に編せられ、文集の刊行するものを毀たる。

御製序を賜ふ
高宗即位し、資政殿學士を贈り、其の孫符を以て禮部尚書となし、又、其の文を左右に眞き、之を讀んで倦むことを忘る。親ら集の贊を製して、曾孫嶠に賜ひ、遂に太師を崇贈し、文忠と謚す。三子邁・迨・過、俱に善く文を爲る。

詩人は窮して益巧なりとせば、坡公が窮謫艱難の際に於ける吟咏は、其の順境の日に成つた諸篇に優ること萬萬であらう。坡公が生平の豊功亮節と、夫の兄弟朋友過從離合の跡及び一時新法の廢興、時事の變遷とは、悉く詩集に見はれて居る。而して其の正言諷議、時に合はなくとも世に阿らず、禍を買つても權に諛びない、夷險一節といふ態度は、まことに士君子の儀表と仰ぐに足るものがある。坡詩を諷誦するもの、諷誦しないもの、共に之を思はなければならない。

昭和三年七月

岩垂憲德識

蘇東坡詩集卷一

岩垂憲德譯解

古今體詩 四十二首

漢士の詩は、上古は概ね四言であつたが、中古は、五言若くは七言で、句に定つた數がない。五言とは、言ふまでもなく、五字一句のものをいひ、七言とは、七字一句のものをいふ。五言でも、七言でも、一首四句なるものを絶句といひ、八句なるものを律詩といふ。律詩や絶句は、之を今體又は近體といひ、今體に對して、字數や句法の定まらないのを古體、古詩、又は古風と稱する。

郭綸

郭綸

河西猛士無人識。
河西の猛士人の識るなし、
日暮津亭閑過船。
日暮津亭に過船を閑す。
路人但覺驄馬瘦。
路人は但覺ゆ驄馬の瘦するを、

【字解】
〔一〕猛士 強く勇ましい士、史記高祖紀に、安得猛士守四方。
〔二〕津亭 わたしば、津は行旅の往還の渡し場。亭は驛亭の意。陸上のうまづきに比していつたのである。
〔三〕驄馬 青馬、後

不知鐵梨大如椽。

知らず鐵梨大さ様の如きを。

因言西方久不戰。

因て言ふ西方久しく戦はず、

截髮願作萬騎先。

截髮願くは萬騎の先とならんと。

我當憑軾與寓目。

我當に軾に憑つて與に寓目すべく、

看君飛矢集蠻虧。

君が飛矢の蠻虧に集るを看む。

傳、城濮の戦の條に、君馳レ軸而觀之、得臣與寓目焉とある。君(晉侯)を指す)は軸に壓つて見物されよ、拙者得臣に於ても相伴仕り、

目を寓して一見物致したい。軸は車前の横木。車上に立つて、胸下に當るから、手を掛けるに便利である。

【七】蠻虧 えびすで製した毛布。桂海虞衡志に、蠻虧出西南諸蕃。蠻人寳披夜臥、無貴賤一人有一虧。

【題義】郭綸の功あるも賞されず、憔悴して他郷にあるに同情して寄せた作である。東坡の自註に、

郭綸、本河西弓箭手、屢戰有功不賞、自黎州都監、官滿貧不能歸、今權嘉州監稅」とある。黎

州は、今の四川清溪縣。都監、官名。宋は兵馬都監を置く。嘉州は、今の四川樂山縣。

【詩意】河西の勇士郭綸は、志を得ないで、一小官吏となつて、渡し場に、往來船を檢べて居る。

(此の二句は、英雄の失路を寫し出したのである。)人はただ仕途に窮する彼を見て、其の武勇の彼を見ない。彼は言ふ、西方今や風雲惡し、(仁宗の康定元年九月、西賊入寇し、郭綸固守す)髪を斷つて信となし、萬騎の先驅をなさんと。我も兵車に上つて一見物仕らうぞ。そして君の飛ばした矢のえ

びす軍に達する御手竝を拜見致さう。

【餘論】五句の處、力が少いといふ批評もある。

初發嘉州

初めて嘉州を發す

朝發鼓鬪闖。西風獵畫旃。

朝に發して鼓鬪闖、西風畫旃を獵かす。

故鄉飄已遠。往意浩無邊。

故郷飄として已に遠く、往意浩として無邊。

錦水細不見。蠻江清可憐。

錦水は細にして見えず、蠻江は清うして憐むべし。

奔騰過佛腳。曠蕩造平川。

奔騰して佛脚を過ぎ、曠蕩して平川に造る。

野市有禪客。釣臺尋暮煙。

野市禪客あり、釣臺暮煙を尋ね、

相期定先到。久立水潺潺。

相期す定す先づ到るを、久しく立つ水の潺潺たるに。

【字解】〔一〕聞聞 鼓の聲、詩、小雅に、伐鼓淵淵、振旅聞聞。

〔二〕鑄 鐵梨。〔三〕獵 震かす。〔四〕錦水 錦江、又、蜀江と名く。

〔五〕蠻江 青衣江。〔六〕佛腳 開元中、僧海通は、石に鑿して彌勒大像を爲る。〔七〕造 平川 造は進みいたる意。杜詩に、秦川對酒平如掌。〔八〕定 かららずと期する辭。杜詩に、定トニ瀼西居とある。〔九〕潺潺 水の流れれる貌。白居易の詩に、有石臼鑿、有水激瀨とある。

【詩意】朝に四川の嘉州を出發したときは、太鼓の聲が圓闌と音たて、西風は燕の尾のやうな旗を動かした。故郷は遠く隔て、行く先は遙かである。蜀江の水も見えなくなり、(嘉州は成都を距る三百餘里、故にいふ。)蜀江の流れも面白く、奔流して佛脚の處を過ぎ、ひろびろと進んで平川に至る。禪僧が暮煙を罩める比、魚釣臺を尋ねて、到るといふ堅い約束をしたので、私は暫く水の潺潺と流れの處に佇んで居た。(問レ我今何適、天台訪石橋の意である。自註に是日期ニ鄉僧宗一會ニ別釣魚臺下。)

【餘論】氣韻洒脱、格律謹嚴、東坡の少年未練筆時の作だと評されて居る。

健爲王氏書樓

健爲王氏の書樓

樹林幽翠滿山谷。
樓觀突兀起江濱。
云是昔人藏書處。
磊落萬卷今生塵。
江邊日出紅霧散。
江邊日出紅霧散。
綺窗畫閣青氣氤。
山猿悲嘯谷泉響。

樹林幽翠山谷に満ち、
樓觀突兀として江濱に起つ。
云ふ是れ昔人藏書の處と、
磊落萬卷今生塵。
江邊日出紅霧散す、
江邊日出でて紅霧散す、
綺窗畫閣青くして氣氤。
山猿悲嘯し谷泉響く、

【字解】〔一〕樓觀 高樓門觀、觀は遠方を望む意から起つたのである。〔二〕突兀 高くぬきんでて立つ、韓愈の詩に、突兀便高三百尺。〔三〕磊落 多い貌。後漢書に、達衡者、方印磊落。文心雕龍に、磊落如環之圓。〔四〕氣氤 氣の盛なる貌。白樂天の詩、桑麻青氣氤。〔五〕雲裏 鳥の鳴く處。〔六〕借問 試に問ふ意。〔七〕先登、斬級 故の首を斬ること。樊噲傳に、先登斬首二十三級。〔八〕三墳 古書の名。

野鳥嚙夏巖花春。
借問主人今何在。
被甲遠戍長苦辛。
先登搏戰事斬級。
區區何者爲三墳。
書生古亦有戰陣。
古人不見悲世俗。
回首蒼山空白雲。

野鳥嚙夏巖花の春。
借問す主人は今何くに在る、
被甲遠く成りて長く辛苦す。
先登搏戰斬級を事とす、
區區何ぞ三墳を爲むる。
書生古亦戰陣あり、
葛衣羽扇揮三軍。
古人は見ず世俗を悲しむを、
首を回せば蒼山空しく白雲。

【題義】健爲郡にある王齊萬の書樓を詠じたのである。齊萬は蜀の人、時に武昌縣に寓居す、即ち書樓の主人である。【詩意】樹林や修竹が山谷に満ち、奥深くて青い。(王昌齡の詩に、深篁引幽翠とあるも思ひ合さる。)高く聳える高樓門觀も江上に見える。ここに昔の人の文庫があつて、澤山な書物も塵に埋もれて居る。既にして江邊に朝日が上つて霧も消え、美しい窓や、畫いた閣は、如何にも心地よい。猿悲み、泉響いて、野鳥囁づる谷間の花、書見には尤も適つて居る。試に問ふ、主人は今、何處に、それは武

裝して戰地に在り、先登や搏戦や斬級を事として居る。こせこせ古書と首引して居る時ではない。書生でも亦、戰陣に臨んで、葛衣羽扇で大軍に指揮すべきである。併し、古人は此の末世の悲しみを見ない。首を回せば、蒼山空しく白雲の棚曳くを見、浮世の塵が厭はれる。

過宜賓見夷牢亂山

宜賓を過ぎ夷牢の亂山を見る

江寒晴不知遠見山上日。
朦朧含高峯。晃蕩射峭壁。
橫雲忽飄散。翠樹分歷歷。
行人挹孤光。飛鳥投遠碧。
蠻荒誰復愛。穠秀安可適。
豈無避世士。高隱鍊精魄。

誰能從之遊。路有豺虎迹。
行人孤光を挹む、飛鳥遠碧に投す。
蠻荒誰か復愛せん、穠秀安んぞ適くべけん。
豈世を避くるの士なからんや、高隱精魄を鍊る。
誰か能く之に從つて遊ばん、路に豺虎の迹あり。

【字解】〔一〕夷牢 唐宋詩醇には夷中に作る。夷牢山は、戎州に在り、州内に四縣あり、宜賓は其の一である。(今、四川、永寧道に屬す)一説にいふ、夷牢とするは誤。〔二〕朦朧 わぼろなる貌、旭が高峯に含まれたさまをいふ。〔三〕晃蕩 光の定まらない貌、朝日の山上に見はれたさまをいふ。〔四〕峭壁 断崖。〔五〕歷歷 分明に見ゆる。〔六〕孤光 日光。〔七〕蠻荒 宜賓を指す。

【題義】年譜を按するに、東坡は二十一で、進士に擧げられ、蜀から京師に入り、仁宗の嘉祐二年(皇紀一七一七年、西暦一〇五七年)禮部に赴き、進士に及第し、其の年の四月、成國太夫人(東坡の北堂)が亡くなつて、訃至る。東坡は服喪蜀に歸る。四年、東坡は年二十四、服を除き、冬、南の方楚に適く、此詩は其の時の作である。

【詩意】四川の宜賓の地は、江水の邊にあるので、水蒸氣のために常に陰霾(つちぐもり)であつて、晴れるといふことを知らない。遠く見える山上の日も峯に含まれて、兎角おぼろがちである。併し、日が漸く上ると、光が斷崖を射る。かくて横雲も拂はれ、翠の樹も分明に見える。旅行く我は、ただ前進して恰も日光を挹むやうなさまであり、飛ぶ鳥も、高く遠く、青空に其の影を失つてしまふ。宜賓は、かかる穂秀とて、こまやかに秀でたる絶勝の地であるが、蠻荒の地であるから、誰も行いて愛するやうなものはない。だが、景勝の山中のことであるから、世を避ける高隱の士があつて、觀法や養生などして、只管、精魄を鍊つて居るものがあるであらう。一體、誰が此の人々に從つて遊ぶであらう。殊に此邊には恐ろしい豺や虎の足跡さへある。容易に往き從ふことが出来ようぞ。

【餘論】起六句、寫景自好、結の處、字句勁健、極めて力がある言ひ表し方である。

夜泊牛口

夜牛口に泊す

日落江霧生。繫舟宿牛口。

日落ちて江霧生す、舟を繫ぎ牛口に宿す。

居民偶相聚。三四依古柳。
負薪出深谷。見客喜相售。
煮蔬爲夜殮。安識肉與酒。
朔風吹茅屋。破壁見星斗。
兒女自咿嚦。亦足樂且久。

人生本無事。苦爲世味誘。
富貴耀吾前。貧賤獨難守。
誰知深山子。甘與麋鹿友。
置身落蠻荒。生意不自陋。

今予獨何者。汲汲強奔走。
誰知深山子。甘與麋鹿友。
置身落蠻荒。生意不自陋。

今予獨何者。汲汲強奔走。
身置蠻荒落。生意自陋。
富貴吾前に耀く。貧賤獨守り難し。

人生本事無し。世味の爲に誘はるるを苦しむ。
富貴吾前に耀く。貧賤獨守り難し。

誰か知らん深山の子。麋鹿と與に友たるを甘んず。
身を置きて蠻荒に落つ。生意自陋ならず。

今予獨何する者ぞ。汲汲強ひて奔走す。

誰か知らん深山の子。麋鹿と與に友たるを甘んず。
身を置きて蠻荒に落つ。生意自陋ならず。

今予獨何する者ぞ。汲汲強ひて奔走す。

【字解】 〔一〕 朔風 北風、朔は北方をいふ。〔二〕 呶啜 唾者の辭定まらない貌。ここは幼児の聲を狀したもの、字面は、東方

朝の傳に見ゆ。〔三〕 樂庭 樂は洞庭、庭の大なるもの。

【通義】 此詩も前の詩と同じやうに、仁宗の嘉祐四年、東坡が嘉州から宣賀を過ぎ、其の途中で、牛口に泊つた時の作である。

【詩意】 日暮れて、霧が江上を籠めたので、舟を繋いで牛口村落に泊つた。たまたま村民三四人、古柳の下に相聚る。山の奥から薪木を負うて出て來たので、客を見て喜んで之を賣る。食事は野菜を煮て、夕食とする。肉も味はないし、酒も飲めない。(村民生活のさまが略窺はれる) 家屋は茅葺で、烈しい北風に吹かれ、壁の破れから空の星が見える。併し兒女のなく聲は、樂しく聞えて居る。人生は、本來何事もない。然るに世味とて、富貴の爲に誘はれ、汲汲として功名に奔走して居る。富貴が吾前に輝いて來れば、兎角、貧賤に安んじては居られないやうである。此村民、深山の子等は、これと異なる。身を蠻荒の地に落し居るも、其の生意は自然に陋くはない。我等は此村民にも劣つて居る。心が名利の爲に使はれて、わざわざ蜀の郷里を立ち出で、かかる淺ましいことに奔走して居るのは歎はしい。

【餘論】 全篇を四段に分つて見ると、起十二句を一段とする。其中、日落云云の四句は、牛口村落をいひ、負薪云云は、村民の生活を寫し、朔風云云は、村民の屋内をいふ。人生四句を二段とする。誰知四句を三段とする、今予二句を四段とする。二段三段四段の十句は、東坡自ら感慨を興したものである。人生を達觀した處、僅僅二十四歳の青年の口占とは見えない。

牛口見月

牛口に月を見る

掩窗寂已睡。月脚垂孤光。

掩窗寂として已に睡る、月脚孤光を垂る。

披衣起周覽。飛露灑我裳。

衣を披て起つて周覽すれば、飛露我が裳に灑ぐ。

山川同一色。浩若涉大荒。

山川同一色、浩として大荒を涉るが若し。

幽懷耿不寐。四顧獨彷徨。

幽懷耿として寐ねず、四顧獨彷徨。

忽憶丙申年。京邑大雨霧。

忽ち憶ふ丙申の年、京邑大に雨霧。

蔡河中夜決。橫浸國南方。

蔡河中夜に決し、國の南方に横浸す。

車馬無復見。紛紛操柵郎。

車馬復見るなく、紛紛たり操柵郎。

新秋忽已晴。九陌尙汪洋。

新秋忽ち已に晴れ、九陌尙は汪洋。

龍津觀夜市。燈火亦煌煌。

龍津に夜市を觀る、燈火亦煌煌たり。

新月皎如晝。疎星弄寒芒。

新月皎として晝の如く、疎星寒芒を弄す。

不知京國喧。謂是江湖鄉。

知らず京國の喧しきを、謂ふ是れ江湖の郷。

今來牛口渚。見月重淒涼。

今牛口渚に來る、月を見て重ねて淒涼。

却思舊遊處。滿陌沙塵黃。

却つて舊遊の處を思へば、滿陌沙塵黃なり。

【字解】
〔一〕掩窗：閉ぢた窗、掩は閉づる意。
〔二〕月脚：月光の下射すること。
〔三〕大荒：大空、韓愈の時に、翻然下ニ大荒。

〔四〕丙申年：仁宗の嘉祐元年を指す。
〔五〕傍榜：傍徨と同じ、さまよふ。
〔六〕丙申年：仁宗の嘉祐元年を指す。
〔七〕水：同じ、水の流れる聲。
〔八〕蔡河：頴河の別支。
〔九〕操柵郎：水夫。柵は筏に同じ。大を柵といひ、小を桴といふ。

都城の大道、楊巨源の詩に、九陌華軒爭道路。
〔一〕汪洋：大にして廣い貌。陸機の賦に肆志汪洋。
〔二〕龍津：渡し場、高遠の詩に、猶言日尚早、更向九龍津。
〔三〕寒芒：さむげなる星の光、芒は光也。晏子春秋に、變星有芒。

〔題義〕仁宗の嘉祐元年（皇紀一七一六年、西暦一〇五六年）東坡、進士に擧げられ、扶風を過ぐ、明年成國太夫人の憂に丁り、蜀に歸る。四年冬、老蘇公に侍して再び京に入る。此詩は其の時の作。

〔詩意〕窗を閉ぢて寂として已に眠に就いたが、月の光が芽えて居るので、衣を披て起つて見渡すと、夜露は落ちて我が裳を霑はす。山も川も一つ色に白く、大空を涉るやうである。心の底の思ひは、遺る瀬がなくて寐られない。あたりを見廻してさまよひ歩く。忽ち憶ひ出すのは、仁宗皇帝の嘉祐元年である。亡き母を追慕して堪へられない。又、あの年は、京邑に大雨があつて、蔡河は夜半に決れて、國都の南方に横浸した。地上は一面に河となつて、車も馬も見えなく、無數の筏が縱横するのみである。秋に入つて空も晴れたが、都の大路は、水が尚ほ退かない。水郷に夜店が開かれて、燈光は煌いて居る。新月は晝のやうに明るく、星は光を奪はれてまばらに寒げな色である。京師の喧しさを餘所にして、是れ江湖の郷といふ。（忽憶丙申年の句より此に至る、皆、京中の事を追憶する。）今、牛口渚に來つて、月を見て重ねてすさまじく感せらるる。却て舊遊の處を思ふと、滿都も沙塵で黃色になつて居る。

【餘論】起八句佳佳、以下殊乏鎔鍊と評した人もある。

戎州

戎州

亂石圍古郡市易帶羣蠻。

亂石古郡を囲み、市易羣蠻を帶ぶ。

瘦嶺春耕少孤城夜漏間。

瘦嶺春耕少く、孤城夜漏の間。

往時邊有警征馬去無還。

往時邊に警あり、征馬去つて還るなし。

自頃方從化年來亦款關。

自頃方に化に從ふ、年來亦關を款き、

頗能貪漢布但未脫金鑊。

頗る能く漢布を貪る、但未だ金鑊を脱せず。

何足爭強弱吾民盡玉顏。

何ぞ強弱を争ふに足らん、吾が民は盡く玉顔。

【字解】
 〔一〕 戎州 今の四川敍州の地。
 〔二〕 夜漏 漏は漏刻。
 〔三〕 征馬 馬に乗つて旅する。江海の別賦に、驥ニ征馬・而不
 諸。〔四〕 款關 關門を叩く。
 〔五〕 漢布 布は錢のこと、分布流行の義から言つたのであらう。
 〔六〕 金鑊 金の指環、ここは耳飾。

【題義】 宋の政和四年に、戎州を改めて敍州とす。犍爲縣より敍州に至る百五十里。此詩は、其の風俗を述べたのである。

【詩意】 戎州の地は、四方亂石で圍まれ、其の民は羣蠻と市易して居る。瘦嶺のあたり、春耕するもの少く、孤城も夜半に聳えて居る。昔は國境も物騒で、征馬も還らないこともある。此頃は方に教化され、數年このかた、關門を叩いて交易を求める、頻に漢製の布を欲しがる。併しまだ金の耳飾などに目を付けない。かかる蠻人と強弱を争ふべきではない。吾が中國の民は、ことごとく玉の如き顔である。

るぞ。(猿(西南の夷)人の猝陋(容貌凶惡)に對して玉顔の二字を下したのである。)

舟中聽大人彈琴

舟中に大人の彈琴を聽く

彈琴江浦夜漏永。
 琴を江浦に彈じて夜漏永し、

斂衽竊聽獨激昂。
 衽を斂めて竊に聽いて獨激昂。

風松瀑布已清絕。
 風松瀑布已に清絶。

更愛玉珮聲琅璫。
 更に愛す玉珮聲琅璫。

自從鄭衛亂雅樂。
 鄭衛の雅樂を亂せしより、

古器殘缺世已忘。
 古器残缺し世已に忘る。

千年寥落獨琴在。
 千年寥落獨琴在り、

有如老仙不死聞。
 老仙の死せずして興亡を聞する如きあ

興亡。

世人不容獨反古。

世人は容さず獨古に反るを、

強以新曲求鏗鏘。
 強ひて新曲を以て鏗鏘を求む。

【字解】
 〔一〕 大人 子、父を稱して大人といふ。始て家語に見ゆ。

〔二〕 激昂 ふるひ立ちて氣をはる。潤漫昂、或はいふ、三字、不似韓琴。且與下文不眞。古の秦琴、酒後耳熟歌呼するもの、即ち激昂。

〔三〕 琅璫 佩びた玉の聲。〔四〕 鄭衛亂雅樂 鄭や衛の音聲は淫穢で、人の耳を憚せしめ、正しい音楽を亂る。論語陽貨篇に、惡々鄭聲之亂雅樂。〔五〕 瑞籍 琴の聲。禮記に、君子之聽音、非瑞其聲者而已也。

〔六〕 窠簧 窠のふえの舌。〔七〕 涩花 ひろくばるか、草莊の詩に、扶桑已在渺茫中。〔八〕 夜闌 夜の半すぎ。〔九〕 文王 文王操、琴曲の名。琴操に、材爲無道、諸侯皆歸文王。

其後有風凰樹書於郊、文王乃作此歌。

微音淡弄忽變轉。
數聲浮脆如笙簧。

無情枯木今尙爾。

何況古意墮渺茫。

微音淡く弄して忽ち變轉、數聲浮脆笙簧の如し。無情の枯木今尙は爾り、何ぞ況んや古意の渺茫に墮つるを。

江空月出人響絕。

江空しく月出でて人響絶え、夜闌にして更に請うて文王を彈ず。

夜闌更請彈文王。

【題義】此詩は嘉祐四年の作、古樂知るべからずと雖も、古聲は終に變することが出來ない意。
【詩意】夜深けて、江浦に響く琴の音には、思はず祇を斂め耳を澄して、いたく感じた。音色は、風をうけたる松の聲、落ち下る瀑の音のやうで、清絕といふべきである。又、佩びた玉の聲の如き琴の音は、更に愛すべきである。一體、鄭衛の淫風が正樂を亂してから、古への樂器も殘缺して千年も久しう世に忘れられたのに、琴だけが昔ながらに行はれて居るのは、恰も年老いたる仙人が死なないで、世の興亡を聞するがやうである。世の人は古に反るを喜まない、強ひて新曲をなしては、古樂に代へる。微音は淡く傳へて忽ち變轉、聲は脆く流れて笙の笛の舌のやうに響く。無情の枯木朽株である琴でも、斯の如くである。何ぞ況んや古道の渺茫に墮ちるのを思ふときは、まことに感慨に堪へない。江空しく月出でて人聲も絶え、夜も半ば過ぎたが、更に請うて、一層高尙なる文王操の一曲を

彈じてもらつた。

泊南井口期任遼聖長官到晚不及見復來

南井口に泊し、任遼聖長官に期し晚に到る、見るに及ばずして復来る

江上有微徑深榛煙雨埋。

江上に微徑あり、深榛煙雨に埋む。

崎嶇欲取別不見又重來。

崎嶇別を取らんと欲す、見ずして又重ねて来る。

下馬未及語固已慰長懷。

馬を下りて未だ語るに及ばず、固より已に長懷を慰む。

江湖涉浩渺安得與之偕。

江湖浩渺を涉る、安んぞ之と偕にするを得む。

【字解】二 任政 字は遼聖、眉山の人、文學氣節を以て郷里に推重される。累官、光祿大夫に至る。遼聖は曾て平原の令となる、故に長官といふ。或はいふ、平原當に平泉に作るべしと。三 深榛煙雨 草庵物の詩に、一郡荆榛寒雨中。四 崎嶇 山路のけはしきこと。五 欲取別 杜詩に、取別何草草。六 長懷 錦照の詩に、長懷無終極。

【題義】宋は、南渡の後、江安縣の東北に、南井監を置く。東坡、南井口に泊したとき、任遼と面會

を約して行違ひとなつたので此の作がある。

【詩意】江の畔に、草木や煙雨に埋れた小徑がある。路のけはしきをも厭はないで、行いて別を敍べようとしたが、逢へなかつた。又重ねて來り、馬を下りてまだ言葉を交へないが、思を晴らした。長官は遠く江湖を涉るので、何處までも伴ふ譯にはならない。名残が惜まれるのである。

過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符云此山

乃張道陵所寓 二首

安樂山を過ぎ、山上の木葉に文、道士の篆符の如きあるを聞く。云ふ、此山は乃ち張道陵の寓せし所と、二首あり。

天師化去知何在。 天師化し去る知る何在る、(在の字、裏の字)
 玉印相傳世共珍。 玉印相傳へて世共に珍とす。
 故國子孫今尚死。 故國の子孫今尚ほ死す。
 滿山秋葉豈能神。 满山秋葉豈能く神ならんや。

【題義】葛洪の神仙傳に據るに、張道陵は、沛國の人。本、大學の書生で、博く五經に通じたが、歎じて曰く、此れ年命に益なしと、遂に長生の道を學んだ。蜀人教化し易く、蜀地に名山が多いと聞いて弟子と蜀に入る。後、天に冲して去るといひ傳ふ。

【詩意】張真人は化し去つて何處に在る。其の遺した玉印は、相傳へて珍として居る。不老不死の仙術を傳へた筈であるのに、故國の子孫は、神通を得ないで、今尚ほ死する。満山の秋葉は、神力がない。

【字解】〔一〕安樂山。瀘州合江縣に在る。(今之四川永寧道内) 〔二〕玉印相傳。蓋真人、名は道陵、張良孫世々之を守る。

眞人已不死。外慕墮空虛。 真人已に死せず、外慕空虚に墮つ。
 猶餘好名意。滿樹寫天書。 猶ほ餘す好名の意、滿樹天書を寫す。
 【字解】〔一〕眞人。莊子大宗師に、古之眞人不知而說く生、不知而滅く死。史記封禪書に、李少君病死、天子以爲化去不^レ死。
 【詩意】眞人は已に死なないが、外を慕うて虚空に墮ちた。猶ほ名を好むの心持があつて、滿樹に天書を寫して居る。(宋史に據るに、眞宗の大中祥符元年(皇紀一六六八年、西暦一〇〇八年)春正月、黃帛が承天門の南に曳く。有司以聞す。上、羣臣を召して朝元殿に拜迎し、天書と號したことが見え
 て居る。)

渝州寄王道矩 渝州にて王道矩に寄す

曾聞五月到渝州。 曾て聞く五月渝州に到る、
 水拍長亭砌下流。 水は長亭を拍つて砌下に流ると。
 唯有夢魂長繚繞。 惟夢魂の長く繚繞たるあり、
 共論唐史更綢繆。 共に唐史を論じて更に綢繆。
 舟經故國歲時改。 舟は故國を経て歲時改まり、
 霜落寒江波浪收。 霜は寒江に落ちて波浪收まる。

歸夢不成冬夜永。歸夢成らずして冬夜永く、

厭聞船上報更籌。厭ひ聞く船上更籌を報す。

【題義】渝州は、渝水に因つて名く。吳船錄に所謂恭州は即ち渝州。懷を王君に寄せた詩である。
【詩意】曾て五月の比、渝州に到ると、水は長亭を拍つて階下の砌を流れる所聞く。ただ夢魂のみは長くまつはり繞り、共に唐史を論じては更に縋れあふ。今、船は故國を經て、四季改まり、霜は寒江に下りて波も起たない。ながながしい冬の夜、歸夢も成らないをりには、船上の時を報らせる時計の音まで氣になつて堪まらない。

入峽

自昔懷幽賞。今茲得縱探。
長江連楚蜀。萬派瀉東南。
合水來如電。黔波綠似藍。
餘流細不數。遠勢競相參。
入峽初無路。連山忽似龕。
繫紓收浩渺。蹙縮作淵潭。

峽に入る

昔より幽賞を懷ひ、今茲縱に探るを得。
長江に楚蜀に連り、萬派東南に瀉ぐ。
合水來つて電の如く、黔波綠にして藍に似たり。
餘流細にして數へられず、遠勢競うて相參る。
峽に入れば初路なく、連山忽ち龕に似たり。
繫紓して浩渺を收め、蹙縮して淵潭をなす。

風過如呼吸。雲生似吐含。
墜崖鳴翠窣。垂蔓綠毵毵。
冷翠多崖竹。孤生有石楠。
飛泉飄亂雪。怪石走驚驂。
絕澗知深淺。樵童忽兩三。
人煙偶逢郭。沙岸可乘籃。
野成荒州縣。邦君古子男。
放衙鳴晚鼓。留客薦霜柑。
聞道黃精草。叢生綠玉參。
盡應充食飲。不見有彭聃。
氣候冬猶煖。星河夜半涵。
遺民悲祖衍。舊俗接魚蠶。
伐薪常冒險。得米不盈甌。
板屋漫無瓦。巖居窄似菴。

風過ぎて呼吸するが如く、雲生じて吐含するに似たり。
崖より落ちて鳴いて翠窣、蔓を垂れて綠毵毵。
冷翠多崖竹。孤生有石楠。
飛泉飄乱雪を飄へし、怪石驚驂を走らす。
絶澗深淺を知り、樵童忽ち兩三。
人煙偶に逢ふ、沙岸籃に乗すべし。
野成州縣荒れ、邦君は古の子男。
放衙を放つて晚鼓を鳴らし、客を留めて霜柑を薦む。
氣候冬猶ほ煖に、星河夜半ば涵す。
遺民祖衍を悲しみ、舊俗魚蠶を接ふ。
薪を伐りて常に險を冒し、米を得て甌に盈たず。
板屋漫にして瓦なく、巖居窄くして菴に似たり。

歎息生何陋。劬勞不自慚。
葉舟輕遠汎。大浪固嘗諳。
巒巒空相視。嘔啞莫與談。
蠻荒安可住。幽邃信難厭。
獨愛孤棲鶴。高超百尺嵐。
橫飛應自得。遠颺似無貪。
振翮游霄漢。無心顧雀鵠。
塵勞世方病。局促我何堪。
盡解林泉好。多爲富貴酣。
試看飛鳥樂。高遁此心甘。

歎息す生何ぞ陋く、劬勞自ら慚ちざるを。
葉舟輕うして遠く汎る、大浪固より嘗て諳んず。
巒巒空しく相視て、嘔啞與に談することなけん。
蠻荒安んぞ住まるべけん、幽邃信に厭み難し。
獨愛孤棲の鶴、高く百尺の嵐に超え、
横飛應に自得すべく、遠く颺りて貪ることなきに似て、
翮を振ひて霄漢に遊び、雀鵠を顧るに心なきを。
塵勞世方に病む、局促我何ぞ堪へん。
盡く林泉の好きを解するも、多くは富貴の酣を爲す。
試に看よ飛鳥の樂、高く遁れて此心甘んするを。

【字解】
 〔一〕缺 山隙として水を夾むを缺といふ。
 〔二〕幽賞 しづかにほめ味ふ、李白の春夜宴桃李園序に、幽賞未足日、
 高談轉清。一本に清賞に作る。
 〔三〕合水來如電 李白の望瀛布水詩に、歛如飛電來。
 〔四〕黔波 黔水ないふ。
 〔五〕龜寺の塔。
 〔六〕豪傑 めぐりまつはる、班固西都賦に歩禹道以豪傑。
 〔七〕風過如呼吸 莊子刻意篇に、吹噓呼吸吐故納新。
 〔八〕翠葉 樹の枝などの細長く垂れる貌。
 〔九〕石楠 西陽雜俎に、石榴花有紫碧白三色、大
 如牡丹。
 〔十〕邦君古子男 刑楚及び雙子は、昔古の子男の國。
 〔十一〕聞道 聞説と同じ、きくならくと訓む、きくなるの延音。
 〔十二〕周促 器量の小さい貌、白居易の詩に、器略常
 許君、周促應笑予。
 〔十三〕林泉 山林泉石。

【詩意】
 余は昔から静に山水を清賞したいと懷つて居たが、今年、十分に探ることが出来た。大江は
 源を蜀の岷山から發し、東漢口と合し、萬派爭ひ流れて東南に瀉いで居る。江水は又、東北して
 巴郡に至る。合水は滔滔として、飛電の來るかと疑はる。黔水の波は綠で藍に似、餘流は數へられない。其の遠い流は競うて相參はる。峽に入れば初は路がなく、兩岸の連山は、佛龕のやうである。流
 は、めぐりまつはつて水の浩渺を收め、蹙まつて淵となり潭となる。風の行くは、呼吸するやうであ
 り、雲は吐いたり含んだりする。崖より墜ちて悲鳴をあげることもある。細長く蔓草は垂れ、崖には
 青い竹が多く、石楠などもある。瀑の落ちるは亂雲のやうであり、怪石の立てるは馬の驚くやうであ
 る。深山の谷間にも、人の住むなるべく、樵の小供兩三見ゆ。山村の郭に逢うたのである。沙の岸は
 蓬輿に乗ることも出来る。蜀より楚に至る、郡を過ぐる十一、縣は二十六。州縣も荒廢に歸した。楚

の地も夢の地も、古の子男の國であつた。役所も晩の鼓を鳴らし客を留めて蜜柑を饗應する。聞き及ぶ所では、黃精草之を食へば、年を延ばすことが出来る。綠玉簾も同じ效能、之も叢生した。盡く飲食に充てても、古の彭祖や老聃のやうに長壽でない。氣候は冬なほ暖かに、天の河も夜半涵して居る。遺民は今尙ほ昔の孟昶や王衍を悲しむ。孟昶は此地から入観し、王衍も蜀の君である。土地の習はしは、蜀の先祖と傳へて居る魚鳧氏や蠶叢氏を忘れない。板屋で瓦もなく、巖居は菴のやうである。險を冒して薪を伐り、米を得ても小覧には満たない。如何にも生活は陋く、勞作しても愧ぢない。一葉の舟に棹さして遠く泝る。大浪の打つは、固より諳じて居る。老いて勇健なるも、與に談ずることが出来ない。かかる蠻荒の地には留まられないし、かかる里離れた處では樂しみを得られない。ただ愛することは、朝鳴き鳥の高く百尺の空に躍り、雲間に飛び遊び、雀や鶉を顧る心がないのである。浮世の塵にこせつくことは、どうしても堪へられない。皆人は山林泉石の樂を解するも、多くの樂を知れば、則ち高遜の甘きを知る。詩醇の評に、一篇章法明鑑、如觀遠岫列秀青青」とある。

江上看山

江上山を見る

船上看山如走馬。
候忽過去數百羣。
前山槎牙忽變態。
後嶺雜沓如驚奔。
仰看微逕斜縹繞。
上有行人高縹渺。
舟中舉手欲與言。
孤帆南去如飛鳥。

船上山を見れば走馬の如く、
候忽として過ぎ去る數百羣。
前山は槎牙として忽ち態を變じ、
後嶺は雜沓して驚奔する如し。
仰いで微逕を看れば斜に縹繞し、
上に行人あり高うして縹渺。
舟中手を擧げて與に言はんと欲すれば、
孤帆南に去つて飛鳥の如し。

【字解】〔一〕候忽　すみやか、

莊子應帝王篇に、南海之帝爲鷗、北海之帝爲鯤、鯤は鷗と同じ。〔二〕槎牙　木の枝のかどだち入りくむ。

〔三〕雜沓　こたごたこみ合ふ、雜遝と同じ。〔四〕縹渺　まつはりめぐる。〔五〕縹渺　高く遠い、杜詩に山風吹游子縹渺。

【詩意】船上から山を見ると、走馬のやうで、見る間に數百羣も過ぎ去る。前なる山山は、木の枝のかどだちて入りくるやうであり、後なる嶺もごたごたこみ合ふ。仰いで山上の小徑を看ると、斜にまつぱりめぐり、上に行く人は高くして遙かである。舟中、手を擧げて、與に言はうとすれば、生憎や、孤帆は南を指して飛鳥の如くである。

【餘論】此詩の起句は、杜少陵の隔河見胡騎、候忽數百羣の二語を用ひて居り、結句は、獨孤及の

詩、風帆若鳥飛から來る。

涪州得山胡次子由韻

涪州に山胡を得、子由の韻に次す
終日鎖筠籠。回頭惜翠茸。終日筠籠に鎖され、頭を回して翠茸を惜む。
誰知聲嘯嘯亦自意重重。誰か知らん聲嘯嘯亦自意重重。

夜宿煙生浦。朝鳴日上峯。夜宿煙浦に生じ、朝鳴日峯に上る。

故巢何足戀。鷹隼豈能容。故巢何ぞ戀ふに足らん、鷹隼豈能く容れんや。

【字解】 〔一〕涪州 古の巴國、漢の涪陵（今の重慶）。〔二〕筠籠 たけかご。杜甫の詩に、野人相贈滿筠籠。〔三〕翠茸 翠羽。蘇軾の蜀鳥賦に、閉以羣篠、翦其翅羽。〔四〕喧嘩 叫び呼ばはる。〔五〕重重 深く心に思ふ貌。隋の楊帝の詩に、遠意更重重。

【題義】 舟が涪州を過ぎて得たのであるから、涪州得山胡と題したのである。山胡は、鸕鷀をいふ。東坡の自註に、善鳴出黔中とあるが、涪州といふも、黔中といふも同じである。元和郡縣志に、巴之南鄙、秦黔中也。

【詩意】 一日中、竹籠に閉ぢ込められ、美しい翠羽も、そこなはれるやうである。併し、呼び叫ぶ聲のうちにも、亦自ら深く心に思ふ所がある。煙が浦邊に生ずる比の夕暮となると、宿を求め、日が峯に上る朝は、聲朗らかに鳴く。故い巢など、決して戀しくはない。鷹や隼は、容れないのである。

留題仙都觀

仙都觀に留題す

【字解】 〔一〕仙都 鄭都縣平

都山に在り（今之四川東川道）〔二〕

流浩浩 屈原懷沙賦に、浩浩沅湘兮

分流汨兮とある。〔三〕崢嶸 山峻

しき臨。〔四〕王遠 列仙傳に、王

方平、名瓊、知天下盛衰之期、九州吉

凶之事。〔五〕陰長生 新野人、漢

皇后之親屬、不喜好榮貴、後入青城

山中、白日昇天。〔六〕飛符 續况

の詩に、飛符超羽翼。〔七〕黃庭

黃庭經、道家の書。〔八〕龍車虎駕

茅君傳に、班龍與素虎駕。列仙傳に、

漢宮高樓入紫清。張祜の笛詩に、紫

清人一管、吹在月堂中。〔九〕厭世

莊子天地篇に、千歲厭世去而上仙、

學仙度世豈無人。

真人厭世不回顧。

世人生死如朝暮。

世人是世を厭ひて回顧せず、

世人生死如朝暮。

世人を學び世を度る豈人なからんや、

世人の生死朝暮の如し。

真人は世を厭ひて回顧せず、

世人生死如朝暮。

世人を學び世を度る豈人なからんや、

世人の生死朝暮の如し。

餐霞絕粒長苦辛。

安得獨從逍遙君。

泠然乘風駕浮雲。

超世無有我獨存。

超世無有晉書阮修傳に、超世高遜莫知其情。

超世無有晉書阮修傳に、超世高遜莫知其情。

霞を餐ひ粒を絶ち長く辛苦。

安んぞ獨逍遙君に從うて、

泠然風に乗りて浮雲に駕し、

超世無有我獨存することを得ん。

超世無有我獨存することを得ん。

天台山賦に、總歎茹芝者云云。莊子逍遙遊篇に、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣御飛龍而達乎四海之外。【三】泠然乘風、泠然是風。

然と同じ、輕妙の貌。莊子逍遙遊篇に、列子御風而行、泠然善也。【二】

【題義】東坡は英宗の治平三年（皇紀一七二六年、西暦一〇六六年）喪を載せて蜀に歸り、四年四月、家に到る。其の再び仙都觀を過ぎたのは、同じく四年のことである。仙都觀は唐の時代に建てたもので、宋には景德觀と改め、又、白鶴觀と名く。

【詩意】見渡せば、山前の江水は浩浩として流れ、山上の大きな松柏は青青として居る。併し舟中の旅客は紛々として去つてしまひ、古今の移り行くも秋草のやうである。空山の樓觀は、高く聳えて居り、王方平だの陰長生などいふ真人は此山に在つて道を學び仙を得たものである。符を飛ばし氣に御して百靈を朝せしめる。大道を悟つて、また黃庭經など道家の書を誦しない。龍が下り迎へ、毎に之に乗つて往來する。其の去ることの速かるは、旋風の大空を搏つがやうである。真人は人世を厭ひて回顧しない。人間の生死するは、朝暮の代謝するやうに思つて居る。仙術を學び、人世を渡らうと欲する私は、霞を餐ひ、粒食を絶ちて長く辛苦する。どうか、飄然として風に御し、雲に駕し、絕對的廣漠の世界に逍遙したいものである。

仙都山鹿

仙都の山鹿

日月何促促。

日月何ぞ促促、

塵世苦局束。

塵世局束を苦しむ。

仙子去無蹤。

仙子去つて蹤なく、

故山遺白鹿。

故山白鹿を遣す。

仙人已去鹿無家。

仙人已に去つて鹿に家なく、

孤棲悵望層城霞。

孤棲悵望す層城の霞。

長松千樹風蕭瑟。

長松千樹風蕭瑟、

至今聞有遊洞客。

今に至り遊洞の客あるを聞く、

夜來江市叫平沙。

夜江市に來り平沙に叫ぶ。

長松千樹風蕭瑟。

長松千樹風蕭瑟、

仙宮去人無咫尺。

仙宮人を去つて咫尺なし。

夜鳴白鹿安在哉。

夜鳴の白鹿安くにあるや、

【字解】〔一〕促促 あくせくする、魏文帝の蒼舒諱に、促促百年。

〔二〕白鹿 任昉の述異記に、鹿千年化^{アカシ}、又五百年化爲白。明皇別錄に、芙蓉園得一白鹿、山人王晏曰、

此漢時鹿也。果於角際雪毛中、得一銅牌、刻曰、宜春苑中白鹿、上目之曰、仙客、命園人、養蓄之。

〔三〕悵望 なげきのぞむ。

【四】層城霞 球絆の遊天台山賦に、荷苔巖之可攀、亦何凌^リ於層城、また、赤城霞起而建標。

【五】蕭瑟 ものさびしき貌。宋玉の賦に、秋之爲氣也蕭瑟兮、草木搖落而變衰。

【六】行迹 袁應物の詩に、落葉滿空山、何處尋行迹。

滿山秋草無行迹。

滿山の秋草行迹なし。

【題義】老泉の詩敍によると、鄆都縣に至り、將に仙都觀に遊ばんとし、知縣李長官を見る。云々、固より君の將に至らんとするを知る。それは此山に老鹿があるが、猛獸も獵人も、之をどうすることも出来ない。客が來遊すると、鹿が輒ち夜鳴く、常に此を以て、之を候して、未だ嘗て失敗がなかつたと。此異聞によつて東坡も此詩を作つたのである。

【詩意】日月何ぞ促促として過ぎ行く。浮世の塵に局束されるのが嫌である。仙人去つて其の友として居つた白鹿だけが山に遣つて居る。仙人が居ないと、鹿に家がない。孤で層城の霞を望んで悽いて居る。今でも遊洞の客があると、鹿は鳴いて江市にも平沙にも聞える。長松千樹、風もものさびしく、仙人の家には人も居ない。さて夜鳴いた白鹿は何處にある。満山これ秋草で尋ぬるに由がない。

江上值雪效歐陽體限不以鹽玉鶴鷺絮蝶飛舞之類爲比。仍不使皓白潔素等字。次子由韻

江上雪に値ひ、歐陽の體に效ひ、限るに鹽玉鶴鷺絮蝶飛舞の類を以て比をなさず、仍ほ皓白潔素等の字を使はず、子由の韻に次す

縮頸夜眠如凍龜。頭を縮めて夜眠る凍龜の如く。

—【字解】—
縮頸 史記龜策

雪來惟有客先知。

雪來つて惟客の先づ知るあり。

江邊曉起皓無際。

江邊曉に起れば皓として際なく、

樹杪風多寒更吹。

樹杪風多くして寒更に吹く。

青山有似少年子。

青山は少年子に似たるあり、

一夕變盡滄浪髭。

一夕變じ盡す滄浪の髭。

方知陽氣在流水。

方に知る陽氣流水に在り、

沙上盈尺江無澌。

沙上尺に盈ち江澌くるなし。

隨風顛倒紛不擇。

風に隨つて顛倒紛として擇ばず、

下滿坑谷高陵危。

下坑谷に満ちて高陵危し。

江空野闊落不見。

江空しく野闊く落ちて見えず、

入戶但覺輕絲絲。

裳を沾して細に看れば刻鏤の若く、

豈有一一天工爲。

豈有一天工の爲あらんや。

霍然一揮徧九野。

霍然一揮九野に徧し、

傳に、神龜縮頸而郤。皓無際。列子力命篇に、窮然無所際。

〔三〕 滄浪泉。
〔三〕 盈尺。左傳隱公八年に、平地盈尺爲三大害。謝惠連の雪賦に、盈尺則呈瑞於豐年。後漢書王霸傳に、河水澌澌無船不可濟。

〔四〕 若刻鏤。世說に、羣公對雪、尚隆之曰、駢推金井、誰訓湯餅。吳永素曰、玉滿天山、難刻佩環。坐間服其韻精。

〔五〕 霍然一揮。

霍然一揮は、にわかに消え失せる貌。司馬相如の大賦に、霍然雲消。ここは、にわかに雪をまさか散らす意。

吁此權柄誰執持。
世間苦樂知有幾。

今我幸免沾膚肌。
山夫只見壓樵擔。

豈知帶酒飄歌兒。
天王臨軒喜有麥。

宰相獻壽嘉及時。
凍吟書生筆欲折。

夜織貧女寒無幃。
高人著屐踏冷冽。

飄拂巾帽真仙姿。
野僧斫路出門去。

寒液滿鼻清淋漓。
灑袍入袖溼靴底。

亦有執板趨堦墀。
舟中行客何所愛。

願得獵騎當風披。
草中咻咻有寒兔。

孤隼下繫千夫馳。
敲冰煮鹿最可樂。

我雖不飲強倒卮。
楚人自古好弋獵。

誰能往者我欲隨。
紛紛旋轉從滿面。

馬上操筆爲賦之。

【題義】歐陽修が嘗て客を會して詩を賦したとき、玉月梨梅練絮白舞鶴鶴銀等の字を用ひることを禁じたといふ話がある。歐陽公の原作は、聚星堂雪詩の後に載せてある。東坡の此詩は、歐陽公の原作に效ひ、弟子由の韻に次したものである。

古今體詩 江上值雪效歐陽發次子由韻

吁此の權柄誰か執持する。

世間苦樂知る幾がある。

今我幸に膚肌を沾すを免る。

山夫只見る樵擔を壓するを、

豈知らんや酒を帶び歌兒を飄すを。

天王軒に臨んで麥あるを喜び、

宰相壽を獻じて時に及ぶを嘉す。

夜織の貧女寒うして幃なし。

高人屐を著けて冷冽を踏み、

巾帽を飄拂して真に仙姿。

野僧路を研りて門を出でて去り、

寒液鼻に満ちて清うして淋漓。

袍に灑ぎ袖に入り靴底を溼す、

亦板を執りて堦墀に趨くあり。

舟中の行客何の愛する所、

願くは獵騎を得て風に當つて披かん。

草中咻咻寒兔あり、

孤隼下に繫け千夫馳す。

敲冰煮鹿を煮て最も樂しむべし、

我飲まずと雖も強ひて卮を倒す。

楚人は古より弋獵を好む、

誰か能く往くものぞ、我隨はんと欲す。

紛紛旋轉從て面に満つ、

馬上筆を操つて爲に之を賦す。

【七】帶酒 李羲山の詩に、帶酒玉鳬巣。

【八】宰相壽 宋の大明中、元日雪花降る。右衛將軍謝莊殿を下り、雲が衣に集つて還り白す、上以て瑞見三白。

【九】高人著屐 齊の東郭先生は貧困飢寒、衣は敝れ、履は完からずとなし時を賦す。

【十】真仙姿 晉の王恭嘗て鶴氅姿を披て雪中を行く。孟起、之を見て曰く、眞に神仙中の人と。

【十一】淋漓 したたる貌。

【十二】見孫權常親迎、執板文拜。

【十三】堦墀 塔は階に同じ、墀は階上の地。

【十四】咻咻 呼吸する聲。

【詩意】寒いので頭を縮めて眠る形は、凍えた龜のやうである。雪が降つても、内に在つては氣付かない。外から來た客が先づ知る。そこで早起して江上を見ると、浩として際がなく、梢は風で、寒さが一層加はる。見渡せば青い山も、一夕にして滄浪の氷となる。少年の忽ち老い易きに似て居る。陽氣は、流れる水にも見れる。さて、平地の尺に盈つるは大雪で、爲に江水も澌けない。雪は風のまにまに紛々として散る。それが積り積つて坑谷に満ち、高陵も危い。江もかくれて見えなく、野も廣くなつたのは雪のためである。戸に入りて、雪は軽く飛んで居る。裳を沾すも構はないで、細に看ると、雪の形は六出であつて、刻刀を用ひたやうである。天工と雖も、一一雕琢を加へる譯にはゆかない。霍然雪を撒き散らすと世界に徧し。ああ誰が此の權柄を掌る。人間に苦樂は多いが、今、我是幸に肌を沾すを免れた。降る雪は樵夫の肩に積るを見るも、簾を垂れて美酒に寒を忘れ、筵を掃うて巧に妬む回鶻の袖を知らない。正月元日雪花を見る、天王は豐年を喜び、宰相は瑞兆と賀し奉る。苦學の書生は、筆の凍るを歎き、貧しい織女に幘はない。昔、東郭先生は、飢寒に迫り、衣は敝れ履は完からずして雪中を行き、雪中弊裘を披た晉の王恭は孟昶に神仙中の人と褒められた。野僧は門を出で雪に路つけ、寒液が鼻に満つ。朝士の袍も袖も靴も雪に溼はされ、笏を執つて階陛に趨く。舟中の行客が頗る所は何ぞ、獵騎を驅つて雪中を披かん、草中に寒兔の聲がするから、じつとしては居られない隼を繋けて千夫は獵場に馳せる。獲物は多い。氷を敲き、鹿を料理して、酒を飲む。楚人の弋獵は昔から名高い。ああ獵に行く人があれば、我も隨はん。雪は紛々、風が加はつて旋轉し、顔に一杯になつた。馬上筆を操つて之を賦したのである。

嚴顔碑

嚴顔の碑

先主反劉璋。兵意頗不義。
孔明古豪傑。何乃爲此事。
劉璋固庸主。誰爲死不二。
嚴子獨何賢。談笑傲碩儿。
國亡君已執。嗟子死誰爲。
何人刻山石。使我空涕淚。
吁嗟斷頭將。千古爲病悸。

先主劉璋に反く、兵意頗る不義なり。

孔明は古の豪傑、何ぞ乃ち此事を爲す。

劉璋は固より庸主、誰か爲に死して二かざらん。

嚴子獨何ぞ賢なる、談笑して碩儿に傲る。

國亡びて君已に執へらる、嗟子死して誰が爲にする。

何人か山石に刻する、我をして空しく涕涙せしむ。

吁嗟斷頭將、千古病悸となる。

【字解】〔一〕嚴顔。劉璋の爲に巴郡を守つて居つたが、張飛に擒にせらる。飛呵して曰く、何ぞ降らざると、顔曰く、我州、ただ斷頭將軍あつて降將軍なしと。〔二〕先主。蜀漢の劉備。〔三〕劉璋。曹操、璋を擬威將軍となす。張松、璋に説いて先主を迎へしむ。先主、成都を圍み、璋出で降る。璋を南郡に遷す。〔四〕不二。二心なきないふ。〔五〕碩儿。楷鏡の意、古の刑具。

【題義】東坡の自註によるに、嚴顔の碑は忠州（今の四川東川道）に在る。巴郡の太守嚴顔の節義を詠じたのである。

【詩意】蜀の劉備が劉璋に反いたのは、德義に於て宜しくない。諸葛孔明が居つてなせ此事をする。劉璋の凡庸であるのは、言ふまでもないから、之が爲には命を棄てるものもなからう。ただ嚴顥は賢で、張飛に擒にされても屈しない。檍鎮の上に立ちてびくともしない。其國が亡び、其君が執へられたのに、嚴將軍は誰が爲に死する。之を山石に刻したのは何人である。我をして涕淚を覚えざらしめる。ああ斷頭將軍は、千古、人をして憐かしめる。

屈原塔

屈原の塔

楚人悲屈原。千載意未歇。

楚人屈原を悲しむ、千載意未だ歇ます。

精魂飄何處。父老空哽咽。

精魂飄として何れの處、父老空しく哽咽。

至今滄江上。投飯救饑渴。

今に至るまで滄江の上、飯を投じて饑渴を救ふ。

遺風成競渡。哀叫楚山裂。

遺風競渡を成し、哀叫楚山裂く。

屈原古壯士。就死意甚烈。

屈原は古の壯士、死に就く意甚だ烈。

世俗安得知。眷眷不忍決。

世俗安んぞ知るを得ん、眷眷として決するに忍びず。

南賓舊屬楚。山上有遺塔。

南賓は舊楚に屬す、山上に遺塔あり。

應是奉佛人。恐子就淪滅。

應に是れ佛を奉するの人、子の淪滅に就くを恐れてなる』

此事雖無憑。此意固已切。

此事は憑るなしと雖も、此意は固より已に切なり。

古人誰不死。何必較考折。

古人誰か死せざらん、何ぞ必しも考折を較せん。

名聲實無窮。富貴亦暫熱。

名聲實に窮りなく、富貴亦暫く熱す。

大夫知此理。所以持死節。

大夫は此理を知る、死節を持する所以なり。

【字解】
〔一〕屈原。名は平、楚懷王の左徒たり。懷沙の賦を作り、汨羅に投じて死す。

〔二〕精魂。たましひ、李華の弔古戰場文に、弔祭不至、精魂何依。

〔三〕哽咽。涙にむせぶ、古樂府、焦仲卿妻詩に、哽咽不能語。

〔四〕滄江。江水は蒼色、故にいふ。

〔五〕競渡。舟で先を争ひて渡る遊戯。荆楚歲時記に、五月五日競渡。續齊諧記に、屈原五月五日投汨羅水、楚人哀之、至此日以

竹筒子に米を投げ水祭之。

〔六〕古壯士。戰國策に、壯士一去兮不復還。

〔七〕眷眷。れんごろに思ふ、詩小雅に、眷眷懷顧。

〔八〕大夫。屈原は三閨大夫。

〔九〕忠州。古の巴子國、即ち忠州。

〔一〇〕考折。長壽と短折、尚書洪範に、五福、考終命、六極、凶短折。

〔一一〕大。屈原は三閨大夫。

〔一二〕夫。屈原は被髮行吟し、江濱に

至り、汨羅に投じて死んだ。楚の人は之を悲しみ、千載の今日も忘れない。屈原のたましひは何れの處に迷へる、父老は空しく涙に咽ぶのみ。今日、尙ほ五月五日には江水の上、竹筒子を水に投じて祭をする。又、舟で先を争ふ競技もする。哀しみの叫は、楚山を裂く。さて屈原は古の壯士、死に就く意も烈である。眷眷として楚王を棄て去るに忍びなかつた心持は、世俗の人にはとても解らない。忠

の塔を見て、屈原其の人を弔つたのである。

【詩意】上官大夫が屈原を頃襄王に短つたので、王は怒つて之を遷した。屈原は被髮行吟し、江濱に至り、汨羅に投じて死んだ。楚の人は之を悲しみ、千載の今日も忘れない。屈原のたましひは何れの處に迷へる、父老は空しく涙に咽ぶのみ。今日、尙ほ五月五日には江水の上、竹筒子を水に投じて祭をする。又、舟で先を争ふ競技もする。哀しみの叫は、楚山を裂く。さて屈原は古の壯士、死に就く意も烈である。眷眷として楚王を棄て去るに忍びなかつた心持は、世俗の人にはとても解らない。忠

州は、もと楚の地、山の上に塔がある。これは佛教信者が屈原の淪滅することを恐れて建てたものであらう。此の事は憑り處がなくとも、此の意は至つて切なるを覺ゆ。人間は一度は死ぬのである。長生と短命とを比べるにも及ぶまい。名聲は窮りがなく、富貴も暫しの間のみ。屈原は此の道理を悟つて居るから死節を失はないのである。

望夫臺

望夫臺

山頭孤石遠亭亭。
江轉船回石似屏。
可憐千古長如昨。
船去船來自不停。
浩浩長江赴滄海。
紛紛過客似浮萍。
誰能坐待山月出。
照見寒影高伶傳。
【題義】昔人あり楚に往き、歲を累ねて還られなかつたので、其の妻が山に登り、之を望むこと久しく、乃ち化して石となつた。此の故事を賦したのである。

【詩意】山上の孤石は、高く聳えて屏風のやうであるより翠屏山といふ。江水も流を轉じ、行く船も廻る。憐むべし千古は長きが如きも昨日の心地し、船は來往して暫くも停らない。浩浩たる長江は、やがて滄海に入るも、紛紛たる過客は、浮草のやうである。ああ入る日を惜しむなく、出づる月を待つて、寒影のおちぶれたるを照らし見たいものである。

竹枝歌

竹枝歌

【訓讀】竹枝歌は、本楚聲、幽怨惻怛。若有所深悲者。豈亦往者之所見。有足怨者與。夫傷二妃而哀屈原。思懷王而憐項羽。此亦楚人之意。相傳而然者。且其山川風俗。鄙野勤苦之態。固已見於前人之作。與今子由之詩。故特緣楚人疇昔之意。爲一篇九章。以補其所未道者。

【字解】 〔一〕 竹枝はやり歌、其の聲もと巴渝より出づ。唐の貞元中、劉禹錫、阮湘に在り、俚歌部附なるを以て、乃ち殷人の九歌によりて、竹枝新詞を作り、里中の小兒をして之を歌はしむ。〔二〕 潘隱 心の底にひめたるうらみ、李白の詩に、獨陶盤以沈

者。〔三〕 例但 いたみかなしむ、體記問喪に、惆悵之心、痛疾之意。

蒼梧山高湘水深

蒼梧山高く湘水深し、

中原北望度千岑

中原北に望めば千岑を度る。

帝子南游飄不返

帝子南に游んで飄として返らず、

惟有蒼蒼楓桂林

惟有蒼蒼たる楓桂林あり。

楓葉蕭蕭桂葉碧

楓葉蕭蕭桂葉は碧。

萬里遠來超莫及

万里遠く來るも超にして及ぶなし。

乘龍上天去無蹤

龍に乗つて天に上り去つて蹤なし、

草木無情空寄泣

草木の無情なるに空しく泣を寄す。

水濱擊鼓何喧闐

水濱に鼓を擊つて何ぞ喧闐たる、

相將扣水求屈原

相將ぬて水を扣き屈原を求む。

屈原已死今千載

屈原已に死して今千載、

滿船哀唱似當年

滿船哀唱して當年に似たり。

海濱長鯨徑千尺

海濱の長鯨徑千尺、

食人爲糧安可入

人を食うて糧となす安んぞ入るべけ

招君不歸海水深

君を招くも歸らず海水深し、

海魚豈解哀忠直

海魚は豈忠直を哀しむを解せんや。

吁嗟忠直死無人

吁嗟忠直死して人なし、

可憐懷王西入秦

憐むべし懷王の西秦に入るを。

秦關已閉無歸日

秦關は已に閉ぢて歸る日なし、

章華不復見車輪

章華復車輪を見ず。

君王去時簫鼓咽

君王去る時簫鼓咽び、

父老送君車軸折

父老君を送りて車軸折る。

千里逃歸迷故鄉

千里を逃れ歸つて故郷に迷ふ、

南公哀痛彈長鋏

南公哀痛して長鋏を弾す。

三戶亡秦信不虛

三戶秦を亡す信に虚ならず、

【字解】 〔一〕 蒼梧禹貢荊州の域、漢は蒼梧郡を置く、地は百粵を總べ、山は五嶺を連む。〔二〕 湘水 岳はミネ、張衡の詩に、江外歷千岑。〔三〕 千岑 岑の二紀。舜南に巡狩し、蒼梧に死す。二紀之に從ひ、及ばずして沅湘の間に崩死す。〔四〕 乘龍上天 黃帝龍に乗りて天に上る。羣臣後宮從ふもの七十餘人、小臣は上のを得ず。〔五〕 空寄泣 博物志に、舜崩、二妃啼以涕揮竹竹盡斑。〔六〕 噴闐 高陽樂人歌相將入酒家。〔七〕 噴闐

唱 舜の夏號、小海唱を希き、子胥、屈平立吾左右矣といつた。小海唱といふのは、昔、伍子胥、忠を以て海に投す、國人爲に、この唱を作る。〔八〕 長鯨 雄を鯨といひ、雌を鯢といふ。〔九〕 懷王西入秦 楚昭王、懷王と會せんと欲す。屈平曰く、行くなきに如かすと。懷王の稚子子胥、王に勧めて行かしむ。秦乃ち懷王を留む。懷王秦に客死す。〔十〕 章華 臺名、左傳昭公七年に、楚子成章華之臺。今之湖北監利縣西北に在り。〔十一〕 車軸折 漢書臨江王榮傳に、上徵榮、榮既上車、軸折車廢。江陵父老流涕嘆言曰、吾項羽本紀に、自懷王入秦不反、楚人憐之至。今、故楚南公曰、楚雖三戶、亡秦必楚也。〔十二〕 長鋏 錄は劍のツカ。〔十三〕 項羽年最少

一朝兵起盡謹呼。

當時項羽年最少。

提劍本是耕田夫。

橫行天下竟何事。

棄馬烏江馬垂涕。

項王已死無故人。

首入漢庭身委地。

富貴榮華豈足多。

至今惟有冢嵯峨。

故國淒涼人事改。

楚鄉千古爲悲歌。

【題義】竹枝詞は唐人に起る、竹枝を打つて神を賽するより創まる。屈原も九歌を作り、楚人をして神を迎送せしめた。其の聲によつて此の竹枝を作つたのである。

【詩意】蒼梧の山は高く、湘江の水は深い。遙に中原を望めば、山又山である。昔、舜帝は南に巡狩

して蒼梧の野に崩じ江南の九疑山（湖南寧遠縣南六十里）に葬る。ただ楓樹桂林があるのみ。楓葉は物さびしく、桂葉は碧である。萬里遠く來るも、超かにして及ばない。帝は龍に乗つて天に上る。湘君の涙は空しく竹を班ならしめる。水濱に鼓を擊ち水を叩いて屈原を求む。屈原亡してここに千年なれども、浦船の哀唱は、其の昔に變らない。海濱の長鯨は、人を食うて糧とするから、入ることが出来ない。海水も深いので、君を招いても歸らない。無情の海魚は、忠直の屈原を哀しむことを知らない。屈原死して、また忠直の人を見ない。懷王の秦に入つて歸らないのは、誠に憐むべきである。ああ章華臺には楚王在す、王の此世を去らるる時、簫鼓の聲咽び、父老は流涕して吾王は反らずと。楚王の幽魂は故山に迷うて居るのである。懷王が秦に入つて反らなかつたから、楚人は之を憐み、楚の南公はいふ、他日、楚はたとひ三戸になつても、秦を亡ぼすものは、必ず楚であると。それで一朝、秦を攻める兵が起ると、齊しく謹呼したのである。當時、項羽は僅に二十四の青年で、劍を提ぐるも、本是耕田の夫、天下に横行するも、何事も成就しなかつた。烏江を渡ると、涕を垂れて愛馬に別れ、身死して首は漢庭に入る。して見ると、世の富貴榮華は尊ぶに足らない。ただ塚の嵯峨として今に存するのみ。故國は寂寥として人事改まるも、楚郷の人は、いつまでも悲歌慷慨して已まないであらう。（要するに第九章は全篇を總括したのである。）

【餘論】紀曉嵐曰く、毎段八句、過接處、若断若連、章法甚妙、と。

八陣磧

八陣磧

平沙何茫茫，髣髴見石蘿。

平沙何ぞ茫茫、髣髴として石蘿を見る。

縱橫滿江上，歲歲沙水齧。

縱横江上に満ち、歲歲沙水齧む。

孔明死已久，誰復辨行列。

孔明死する已に久しう、誰か復行列を辨せん。

神兵非學到，自古不留訣。

神兵は學んで到るにあらず、古より訣を留めず。

至人已心悟，後世徒妄說。

至人は已に心に悟る、後世徒に妄說す。

自從漢道衰，蠻起盡姦傑。

漢道の衰へしより、蠻起盡く姦傑。

英雄不相下，禍難久連結。

英雄相下らず、禍難久しく連結。

驅民市無煙，戰野江流血。

民を驅りて市に煙なく、野に戦つて江に血を流す。

萬人賭一擲，殺盡如沃雪。

萬人一擲を賭し、殺し盡す雪に沃ぐが如し。

不爲久遠計，草草常無法。

孔明最後に起り、意羣孽を掃はんと欲す。

崎嶇事節制，隱忍久不決。

崎嶇節制を事とし、隱忍久しく決せず。

志大遂成迂，歲月去如晫。

志大に遂に迂を成す、歲月は去つて晫の如し。

六師紛未整，一旦英氣折。

六師紛として未だ整はず、一旦英氣折れて、

惟餘八陣圖，千古壯夔峽。

惟八陣の圖を餘し、千古夔峽を壯とす。

【字解】 〔一〕 八陣磧 四川の夔州奉節縣は、本、漢の魚復縣、八陣の圖は縣の西南七里に在り。磧は水邊の石原。晉書桓溫傳に、諸葛亮造ニ八陣圖於魚復平沙之上、疊石爲行、行相去二丈、桓溫見之謂ニ此常山蛇勢也。〔二〕 睿覺 さも似たり、彷彿と同じ。〔三〕 石蘿 種は茅を束ね位を表すこと、漢書叔孫通爲ニ總裁野外、註にいふ、立ニ竹及茅索ニ繫之と。石蘿の字は、東坡が特に其の意を借り用ふ。八陣磧の石を以て位を表する茅蘿の如きよりいふ。〔四〕 至人心悟 蜀志諸葛亮傳に、亮性長ニ於巧思、推ニ演兵法、作ニ八陣圖、咸得ニ其要。〔五〕 繼起 羣り起る、史記項羽紀に、楚蠻起之將。蠻は蜂の古字。〔六〕 賭一擲 李太白詩に、天地賭ニ一擲、未だ忘ニ戰爭。〔七〕 嶠嶮 平かでない山路を跋めて、困難を感するより、困難の義に用ふ。〔八〕 隱忍 心に堪へ忍びて外にあらはさない。史記の伍子胥傳に、隱忍就ニ功名。〔九〕 晫 ちらりと見る。

【題義】 入蜀記に、夔州東南ニ八陣磧、孔明之遺跡、碎石行列如レ引レ繩、每歲江漲、磧上水數十丈、比ノ退陣石如レ故。妻の人は諸葛公を重んじ、毎歲、人日（正月七日）を以て出でて磧上に游ぶ、之を踏破といふ。此詩は八陣磧を言ひて孔明論をなしたのである。

【詩意】 魚復縣の平沙、何ぞ茫茫たる、孔明の八陣圖の遺跡は、江上に縱横し、毎年、沙水に浸されて居る。孔明の亡くなつてから久しいので、八陣の圖を明にするものもない。一體、人の意表に出る神兵といふものは、學んで出来るものではない。昔から祕訣を傳へないからである。至人は、已に其の訣を心に悟る、後世の人は、徒に妄説する。漢の世が衰へて、蜂のやうに羣り起つたものは、盡く姦傑である。其の人人は相下らないので、禍難が久しく結んで解けない。民が四散して市に煙も立たない。

く、野に戰争が斷えないので、血が流れて川をなす。萬人一擲を賭して天下を爭ひ、未だ戰争を忘れることが出来ない。人を殺し盡すこと雪に水を沃ぐがやうである。其の戰争も、軍を作す法なく、國家百年の計を爲すことと思はない。最後に孔明が起つて羣雄を一掃しようとした。千辛萬苦、軍の節制を事とし、隱忍する事が久しく、大きな志も、遂に達することが出来なかつた。歲月は去つて暫くも留らない。天子の六軍も、整頓するに至らないため、兎角、最初の英氣も挫けて、ただ八陣の圖が遺り、千古夔州の峠を壯にして居るのみである。

【餘論】紀昀は、眉山父子持論如_レ此、收得完密、住得簡潔、と評して居るが、成敗を以て古人を論ずるは、文人の通弊である。三蘇の常に孔明を誹議するは、其の短處であり、又、其の疏なる處でもある。

諸葛鹽井

諸葛の鹽井

五行水本鹹安擇江與井。

五行水本鹹し、安んぞ擇ばん江と井と。

如何不相入。此意誰復省。

如何ぞ相入れざる、此意誰か復省みん。

人心固難足。物理偶相逞。

人心固に足り難し、物理偶相逞うす。

猶嫌取未多。井上無閒綆。

猶ほ嫌ふ取ること未だ多からざるを、井上に閒綆なし。

【字解】_{〔二〕}鹽井 東坡自註に、井有三十四、自山下至山上、其十三井常空、每夏水漲、則鹽泉遙遙遠去、常去於江水之所不_レ及。_{〔三〕}五行水本鹹 舍書の洪範に、五行水曰潤下、潤下作鹹。_{〔四〕}人心固難足 後漢書に、光武曰く、人苦不知足。

無閒綆 莊子の至樂篇に、便短者不可_レ以汲_ア深。

【題義】孔明八陣圖の下に一磧がある。東西百步、南北四十步、上に鹽泉井五口あり、冬出で夏は沒す。昔漢の羅哀といふは、成都の人で、貨殖を以て名高い。鹽井の利を擅にし、貲鉢萬に至つた。鹽井は資源である。此詩は孔明の鹽井を詠じたのである。

【詩意】五行の理からいふと、相剋つものは相勝つ。山泉は多く甘くして、海水は鹹し、鹹いものは、水が本に歸し、甘いものは、土之に勝つのである。鹽泉が迤邐とづらなつて遷り去り、常に江水の及ばざる所に去るといふが、江水と井水とに異りはない。如何ぞ相入れざる、此意を省るものはない。人心は固に満足することを知らない。萬物の理は、思ひ存分にする。取るのは多く取る。それでも取ることが未だ十分でないのか、井上には綆の休む暇もない。

白帝廟

白帝廟

朔風吹入峽。慘慘去何之。

共指蒼山路來朝白帝祠。

荒城秋草滿古樹野藤垂。

浩蕩荆江遠。淒涼蜀客悲。

朔風に吹かれて峽に入り、慘惨として去つて何くにか之く。
共に蒼山の路を指し、來り朝す白帝の祠。
荒城秋草滿ち、古樹野藤垂る。
浩蕩荆江遠く、淒涼として蜀客悲しむ。

遯回問風俗。涕泗憫興衰。

故國依然在。遺民豈復知。

一方稱警蹕。萬乘擁旌旗。

遠略初吞漢。雄心豈在夔。

崎嶇來野廟。閔默愧當時。

破甑蒸山麥。長歌唱竹枝。

荆邯真壯士。吳柱本經師。

失計雖無及。圖王固已奇。

猶餘帝王號。皎皎在門楣。

【字解】
〔一〕白帝廟 四川奉節縣(今の四川東川道)の東八里にある。公孫述、魚復縣に至る、白龍、井中より出づ、因て白帝廟と號し、自ら白帝と稱す。
〔二〕朔風 北風、夏侯湛の詩に、朔風動秋草、邊馬有歸心。また朔吹ともいふ。
〔三〕慘慘 いたみかんなしむ、詩の小雅に、憂心慘慘。
〔四〕遯回 ぶらぶらさまよふ、李白の詩に、金花折風帽、白馬小遯回。
〔五〕萬乘 天子出入の儀、蹕は行人を止め道を清めること、晉は戒め肅ましめること。古今註に、晉蹕は樂の制、出づるに晉入るに蹕、出入皆止むるといふ。
〔六〕孟襄 天子をいふ、昔、天子は兵車萬乘を出すべき畿内方千里を領するに由る。
〔七〕遠略 左傳僖公九年、齊侯不務德而勤遠略。
〔八〕閔默 吳均の詩に攢衣空惆悵。
〔九〕破甑 鏡は炊器。
〔十〕荆邯 後漢平陵の人、東方朔に平かならんとし、兵且に西に向ほんとするを見、遂に公孫述に説いて兵を發せしめ、田武をして江陵に據らしめ、延

遯回して風俗を問ひ、涕泗して興衰を憫む。
故國は依然として在るも、遺民豈復知らん。

一方に警蹕を稱し、萬乘旌旗を擁す。

遠略初漢を呑まんとす、雄心豈夔にあらんや。

崎嶇として野廟に來り、閔默して當時を愧づ。

破甑山麥を蒸し、長歌竹枝を唱ふ。

荆邯は眞に壯士、吳柱は本經師。

計を失つて及ぶ無しと雖も、王を圖るは固に已に奇なり。

猶ほ帝王の號を餘して、皎皎として門楣に在り。

【題義】白帝廟は甚だ古く、松柏は皆百年のもの。公孫述は蜀に據つて漢を承くるとなし、自ら白帝と稱し、夔子國を改めて白帝城となす。後漢の光武帝、岑彭を遣はし、討ちて之を滅す。公孫述が荆邯を用ひなかつたのは、陳餘が李左車を用ひなかつたと同じである。東坡は之を失計となして居る。

奉をして漢中に出でしむ。述、以て羣臣に問ふ。博士吳柱曰く、昔武王伐殷、遷師以待天命。未聞無左右之助、而欲出師千里之外、以廣封疆者と。荊邯曰く、東帝無尺土之柄、向所輒平、不亟乘時與之分功、而坐談武王之說、是效隨言、欲爲西伯也と。
〔二〕門楣 門上の横梁、轉じて家門の義に用ふ、高啓の詩に、男兒弧矢壯門楣。

【詩意】白帝廟は甚だ古く、松柏は皆百年のもの。公孫述は蜀に據つて漢を承くるとなし、自ら白帝と稱し、夔子國を改めて白帝城となす。後漢の光武帝、岑彭を遣はし、討ちて之を滅す。公孫述が荆邯を用ひなかつたのは、陳餘が李左車を用ひなかつたと同じである。荒れた城には秋草が満ち、古い樹には蒿葛が懸つて居る。荆江はひろびろとして遠く流れ、蜀客は物寂しくて堪へ難ねる。ぶらぶらさまよつては風俗を問ひ、古今の興衰に涙を催した。故國は依然として存するも、遺民は昔を知らない。公孫述は、最初萬乘の旗を立てて、出づるに警、入るに蹕、天子出入の儀式を具へ、漢を併呑するの遠略を抱いた。其の雄心は決して夔州に偏安するものではなかつた。さて旅程崎嶇として白帝廟に來り、古を懷いて暫し憤默し、破れた甑で山麥を蒸し、竹枝を長歌した。後漢の荊邯は、眞に壯士といふべく、博士の吳柱は、もともと經學先生である。それで時務を知らなかつたといへば言ふものの、王道を言ふのは立派で、公孫述が帝號の皎皎として家門を飾つたのも、此が爲である。

永安宮

永安宮

千古陵谷變。故宮安得存。

徘徊問者老。惟有永安門。

遊人雜楚蜀。車馬晚喧喧。

不見重樓好。誰知昔日尊。

吁嗟蜀先主。兵敗此亡魂。

只應法正死。使公去遭燔。

只應法正死。公をして去つて燔に遭はしめしなるべし。

【字解】〔一〕永安宮 東坡の自註に、今慶之永安門、即宮之遺址也。三國志に、改魚復曰永安。〔二〕耆老 老人の義、耆は六十歳、老は七十歳。〔三〕法正 云云。蜀の兵既に敗るるや、諸葛亮歎じて曰く、法孝直（法正の字）若し在らば、能く主上を制して東行せざらしめん、たとひ東行すとも、必ず傾危せざらんと。〔四〕遭燔 遭難の意。

【題義】永安宮は、諸葛亮が先主の遺詔を受けし處、今の四川奉節縣の境に在る。

【詩意】高岸は谷となり、深谷は陵となる。千古陵谷も變するのに、永安宮のみが無事といふ譯にはゆかない。徘徊して土地の耆老に尋ねると、ただ永安門が昔のままに存するのみ。遊人は楚からも蜀からも来て、車馬の響は喧し。重樓の好きを見なければ、昔の尊嚴が解らない。ああ蜀の先主は、兵が敗れてここに亡くなられた。法正が死んだので、先主は此危難に遭はれたのであらう。

【餘論】紀昀は此詩を評して、後四句、凡鄙之至、殊不似坡公手筆と言つた。

過木櫻觀

木櫻觀を過ぐ

石壁高千尺。微蹤遠欲無。

石壁高さ千尺。微蹤遠く無からんことを欲す。

飛簷如劍寺。古柏似仙都。

飛簷は劍寺の如く、古柏は仙都に似たり。

許子嘗高遜。行舟悔不迂。

許子嘗て高遜、行舟迂せざるを悔ゆ。

斬蛟聞猛烈。提劍想崎嶇。

蛟を斬りて猛烈を聞く、劍を提げて崎嶇を想ふ。

寂寞棺猶在。修崇世已愚。

寂寞として棺猶ほ在り、修崇世已に愚。

隱居人不識。化去俗爭吁。

隱居人識らず、化し去つて俗争ひ吁く。

洞府煙霞遠。人間爪髮枯。

洞府煙霞遠く、人間爪髮枯る。

飄飄乘倒景。誰復顧遺軀。

飄飄として倒景に乘じ、誰か復遺軀を顧みん。

【字解】〔一〕木櫻觀 許遜が得道の處。木櫻山は萬州武寧縣（今の四川東川道）の東南十三里にある。〔二〕飛簷 高く反り出た木、洛陽伽藍記に飛簷字。簷一に擔に作る。〔三〕劍寺 劍門山頂に一寺あり、梁山寺といふ。〔四〕仙都 方輿勝覽に、自二鄧縣東行二里、石徑築同、翠柏殆數萬株、又名平都福地」とある。許旌陽は、嘗て此處に遷世し、山中に精修すること一百三十六年、舉家飛昇と傳へて居る。〔五〕高遜 高く世をのがる、列仙傳に、許遜、字敬之、晉永嘉中爲蜀之旌陽令。從吳猛得神力、棄官

居洪州西山下。【六】斬蛟。晉の初、許邁は旌陽の令となり、異人の術を得て、江湖に周遊し、悉く蛟蜃を斬りて民害を除く。【七】爪髮枯。列子の天瑞篇に、皮膚爪髮、隨世墮落。【八】倒景。夕日、溫庭筠の詩に、鳥飛天外斜陽盡、人過橋邊倒景來。

【題註】老泉の詩敍によるに、許旌陽が得道の處を舟人が告げなかつた。既に過ぎ武寧縣に至つて其の事が知れた。縣の人の言に、許旌陽の棺槨は、猶ほ山上に在りと。輿地紀勝に許旌陽舊宅、今之白鶴寺也。

【詩意】石壁の高さは千尺、人の行くことなからんを欲するのである。高くそり出た簷は、劍寺のやうである。劍門を出て東望すれば、彷彿として見ることが出来る。古い柏のあるは、仙都のやうである。此度、迂回して此の古蹟を訪はなかつたのを殘念に思ふ。昔、許旌陽の官を棄て山に居つた時、海に大蛇があつた。真君は正一斬邪の法で之を殲したといふことである。(正一の法といふのは、道家でいふ陶隱居正一法のこと)で、之を傳へたものを正一真人といふ。さて、許子の崎嶇として劍を提げた武勇談も今は寂寞として、ただ山上の棺槨に昔を偲ぶのみである。道家修崇のことも既に驗なく、真人隱居の術も人が識らない。ただ許子の仙化を人が争つて歎いて居る。眞人の居は煙霞遠く、人間の皮膚爪髮は随つて生じ随つて落ちる。飄飄として倒景に乗じて去る眞人は、復、俗界の遺體など、少しも顧みないのである。

巫山

巫山

瞿塘迤邐盡。巫峽嶧嶢起。
連峰稍可怪。石色變蒼翠。
天工運神巧。漸欲作奇偉。
塊軋勢方深。結構意未遂。
旁觀不暇瞬。步步造幽邃。
蒼崖忽相逼。絕壁凜可憚。
仰觀八九頂。俊爽凌顥氣。
晃蕩天宇高。奔騰江水沸。
孤超兀不讓。直拔勇無畏。
攀緣見神宇。憩坐就石位。
巉巉隔江波。一一問廟吏。
俯首見斜鬟。拖霞弄修帔。
人心隨物變。遠覺含深意。

瞿塘は迤邐として盡き、巫峽は嶧嶢として起る。
連峰稍怪むべく、石色蒼翠に變す。
天工神巧を運らし、漸く奇偉を作さんと欲す。
塊軋として勢方に深く、結構意未だ遂げず。
旁觀不暇瞬くに暇あらず、步步幽邃に造る。
蒼崖忽ち相逼る、絶壁凜として憚るべし。
仰いで觀る八九頂、俊爽顥氣を凌ぐ。
晃蕩として天宇高く、奔騰江水沸く。
孤超兀として讓らず、直抜勇にして畏るなし。
攀緣神宇を見、憩坐石位に就く。
巉巉江波を隔て、一一廟吏に問ふ。
蓬に觀る神女の石、綽約誠に以あり。
首を俯して斜鬟を見、霞を拖きて修帔を弄す。
人心は物に隨ひて變じ、遠く深意を含むを覺ゆ。

野老笑我旁。少年嘗屢至。
去隨猿猱上。反以繩索試。

石筍倚孤峰。突兀殊不類。

世人喜神怪。論說驚幼稚。

楚賦亦虛傳。神女安有是。

次問掃壇竹。云此今尙爾。

翠葉紛下垂。婆娑綠鳳尾。

風來自偃仰。若爲神物使。

絕頂有三碑。詰曲古篆字。

老人那解讀。偶見不能記。

窮探到峰背。採研黃楊子。

黃楊生石上。堅瘦紋如綺。

貪心去不顧。澗谷千尋繩。

山高虎狼絕。深入坦無忌。

野老は我が旁に笑ふ、少年嘗て屢々至り、
去る猿猱に隨つて上り、反る繩索を以て試む。
石筍孤峰に倚り、突兀殊に類せず。

世人は神怪を喜び、論說幼稚を驚かす。

楚賦亦虛傳、神女安んぞ是あらん。

次に壇を掃ふ竹を問ふ、云ふ此れ今尙ほ爾りと。

翠葉は紛として下垂、婆娑たり綠鳳尾。

風來つて自ら偃仰、神物に使はるが若し。

絕頂に三碑あり、詰曲古篆字。

老人那ぞ讀むことを解せん、偶見るも記する能はず。

窮め探りて峰背に到り、採研す黃楊子。

黃楊は石上に生じ、堅瘦にして、紋、綺の如し。

貪心去つて顧みず、澗谷千尋繩る。

山高く虎狼絶え、深く入れば坦にして忌むなし。

溟藻草樹密。葱蒨雲霞膩。

石竇有洪泉。甘滑如流醴。

終朝自盥漱。冷冽清心胃。

浣衣挂樹梢。磨斧就石鼻。

徘徊雲日晚。歸意念城市。

不到今十年。衰老筋力憊。

當時伐殘木。芽孽已如臂。

忽聞老人說。終日爲歎喟。

神仙固有之。難在忘勢利。

貧賤爾何愛。棄去如脫屣。

嗟爾若無還。絕糧應不死。

嗟爾若し還るなくば、糧を絶つても應に死せざるべし。

【字解】 **巫山** 四川巫山縣の東、湖北巴東縣の西に在る。即ち巫峽で、巴山山脈特起の處。十二峽があり、峽下に神女廟がある。巫峽は西陵峽、瞿塘峽と並んで三峽と稱す。**【三】** 瞿塘 四川奉節縣の東十三里にある。一名は廣溪峽。**【四】** 遠逕 旁行遠延の義、梁簡文帝の從軍行に、遙逕觀鵠翼、參差觀雁行。**【五】** 靜縹 深く險しい貌、蜀都賦に、經三峽之靜縹。**【六】** 連峰 稍可怪。三峽七百里、兩岸の連山、略、缺くる處なし。重巒疊嶂、天を隱くし日を蔽ふ、人境にあらず。**【七】** 婦者翠 謝朓の詩に、蒼翠望

寒山。【七】块軋、際限なき貌。劉安の招隱士に、块軋、山曲曉、心淹留分洞荒忽。【八】結帶、左太冲の詩に、巖穴無結帶。
 【九】步步造幽邃、魏志の甄斐傳の註に、步步稽留。幽邃は、しつかに奥深し。【十】蒼崖、李羲山の詩に、蒼崖萬歲藤。【十一】仰
 観八九項、入蜀記に、巫山十二峰不可悉見、所見八九峰。【十二】頽氣、天邊の氣。【十三】晃蕩、光の定まらない貌。【十四】嬌媚、劉
 安の招隱士に、嬌媚後桂枝兮期淹留。【十五】嵯峨、高く峻しい貌。莊子逍遙遊に、藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子、淳朴同
 じ。【十六】矜鬢、鬢は越鬢、山の形と色とも喻ふ、虞集の詩に、窗中遠黛曉千舞。【十七】椎霞、椎は丸なり、霞は赤い雲氣、朝
 やけ、夕やけ。かすみは霞。【十八】修竹、長い荀子。釋名に、被、披也、披之肩背不不及下也。【十九】猿猱、猱は手長猿。【二十】
 石筍、尖り立てる岩石、後漢の任文公傳に、獨武擔石折、註にいふ、其石俗今爲石筍。【二十一】楚賦、宋玉の神女賦を指す。神女は
 即ち巫山の神女。【二十二】掃壇竹、永嘉記に、川江故岸、有仙石壇、有竹嫋嫋青翠、風來枝動、掃石壇、壇上無塵。荊州圖記に、
 天門角上特生一竹、倒垂拂拭謂之天幕。【二十三】婆娑、舞ふ貌、詩の陳風に、子仲之子、婆娑其下。【二十四】僪仰、ねたり起きたり
 する、詩小雅に、或僪遲僪仰。【二十五】詰曲、まがりくねる、劉禹錫の詩に、修蔓蟠詰曲。【二十六】黃楊子、クダ、坤雅に、黃楊木性
 堅毅難長。【二十七】溟涼、蕙蕡、江文通の詩に、青林結溟涼、丹蘿被蕙蕡。【二十八】石竇、洪泉、仙經に、神山五百歲一開、其中石
 體出、得而服之、壽與天相畢、金玉之精也。神仙傳に、王烈入大行山、忽見山破石裂、青泥流出如醴、烈取食之如饴。石體は
 即ち石髓乳。【二十九】石鼻、山名、宋史地理志に、陝州中夷陵郡軍事建炎中移治石鼻山。【三十】如脫屣、史記封禪書に、應平晉
 詛得如黃帝、吾觀去妻子如脫屣耳。屣はわらぐつ。

【題義】江水峽を歷、東して新崩灘を逕ぐ、其の下十餘里、大巫山あり、首尾一百六十里、之を巫峽といふのは、山に因つて名を爲したのである。巫山の峰巒は、上、霄漢に入り、山脚は、直に江中に

插さんで居る。

【詩意】同じく三峡の一であるが、瞿塘峽は、うねうねとして連なり、巫峽は深くして險しい。連崖千丈、奔流電激天を隱し日を蔽ふ、といふのが巫峽で、全く人境でない。石の色も蒼翠に變じて居り、天工は奇觀をなさうとする。併し、峽勢は、際限なく轉じ、結構も、兎角、定まらない。重巖疊嶂、怒湍流水、人をして應接に暇なからしめる。步步進んで幽邃の境に入る。すると、蒼崖が逼つて、絶壁に怖氣を生ずるであらう。仰いで觀れば、巫山十二峰、悉くは見えない。八九峰だけが見える。清英の氣は天邊を凌いで、天の光も定まらない。伏して臨むと、江水は奔騰して居る。一は卓然として遙に見えるのは神女石、柔媚にして美しい。山の形と色とは、傾ける總髻と見るべく、朝やけ夕やけは、長い緒子を拖いたやうである。人心は物によつて變じ、其の都度、物に深意を含めると思はせる。土地の人、我が旁にあつていふ、若い時分は、しばしばここに遊び、山猿に隨つては、高きに上り、歸るときには繩索を用ひて下りた。尖つて立てる巖は、石筍の如く、他の處には類がない。一體、世の人は、神怪を喜ぶ。昔、楚の襄王が宋玉といふ文學者と雲夢の浦に遊んだとき、王は宋玉をして賦を作らしめた。其の夜、王は夢に神女と遇つたといふ傳説がある。此の楚賦は、固より虛を傳へたもので、世に神女などいふもののあるべき道理はない。次に、壇を掃ふ竹の事である。之を問ふと、例の土地の人またいふ、これは今も事實である。山樹の青い葉が垂れて居り、風に隨つて起き臥する、其の度毎に壇を拂ふは、神に使はれるやうもある。山の頂に三つの碑がある。難しい古篆文字

である。私達には讀めないし、記憶も出來ない。更に探つて峰の背に出て黃楊子を探した。石上に生じ、堅緻にして、其文理はあや衣の如し。なほも見たくて進み行き、千尋の谷を縋り、高きに登ると、はや虎も狼も居らない。深きに入ると、平坦ではあつたが、草樹暗く、雲霞重なつて居る。巖穴の水は石鐘乳のやうで、手を洗ひ口漱ぐと、心胃を清める。衣を浣ひ、斧を磨いて、又石鼻山に分け入る。あちらこちらと迷ふ中に、日も暮れて歸途に就くのが例であつた。首を回せば幾年の昔今は筋力も衰へて、其の當時伐り残した木の茅穂も臂のやうな大きさになつたと、土地の人の物語を聞いて、余は歎息した。神仙はあるであらう、世の勢利を忘れなくては駄目である。貧賤は誰も愛しましいが、富貴を愛しては神仙を得られない。棄て去る履を脱するがやうでなくてはならない。我もし黄帝の如くに上天することが出来れば、妻子を棄て去る驪を脱する如しと言つた昔の天子もある。爾もし世間を出て、世間に入らないならば、仙術を得て、たとひ糧を絶つても永世であらう。

【餘論】一篇の大文、野老を以て結を作せるは、極めて完密又極めて脱洒と古人も評して居る。唐宋詩醸に、帶阜纏密、屯雲積氣、析之則句鍊字琢、合之則悠悠乎與頽氣以俱、而莫得其涯」と評して居る。

巫山廟上下數十里有烏鳶無數取食於行舟之上舟人以神之故亦不敢害

巫山廟上下數十里、烏鳶無數ありて、食を行舟の上に取る、舟人神を以ての故に、亦敢て害せず

羣飛來去噪行人。羣飛來去して行人を噪がす。

得食無憂便可馴。食を得て憂なければ便ち馴るべし。

江上飢鳥無足怪。江上の飢鳥は怪むに足るなきも、

野鷹何事亦頻頻。

野鷹何事ぞ亦頻頻。

【字解】
〔一〕羣飛 杜詩に、白雲羣飛太剣乾。
〔二〕噪行人 西京雜記に、陸賈曰、乾鶩噪而行人至。

〔三〕頻頻 揚子法言に、頻頻之黨、甚於鴈斯、亦賦夫種食而已矣とある。

鴈斯は山鷹で、頻頻たる黨比の人は、山鷹の羣徒よりも甚しい。好く稻梁を賊するのみである。

【題義】吳船錄に、凝真觀前有二馴鷹、客舟將來則迎於數里之外、舟過亦送數里、土人謂之神鷹とある。入蜀記に、神女祠中有二鳥數百送迎客舟とある。此詩は之を詠じたものである。

【詩意】巫山廟の鳥と鷹、無數に飛び去り飛び來つて、行く舟人を惱ます。併し食飽いて憂へがないと馴れる。江上の飢鳥は、其れでよいとしても、野の鷹は何事ぞ、亦頻頻として來去する。

神女廟

神女廟

大江從西來上有千仞山。大江西より来る、上に千仞の山あり。

江山自環擁恢詭富神姦。江山自ら環擁し、恢詭神姦に富む。

古今體詩 巫山廟上下數十里有烏鳶無數取食於行舟之上 神女廟

深淵鼈鼈橫巨壑蛇龍頑
旌陽斬長蛇雷雨移滄灣
蜀守降老蹇至今帶連環
縱橫若無主蕩逸侵人寰
上帝降瑤姬來處荆巫間
神仙豈在猛玉座幽且閑

深渊鼈鼈横はり、巨鼈蛇龍頑なり。
旌陽長蛇を斬り、雷雨滄潤を移す。

司守老撫を峰へ、今は至るまで處へ

墨をえりを降し、
△に至るまで連鎖を構へ

縦横若し主なくば、
蕩逸して人寰を侵さん。

じやうていだうき
二守折五上
くに
く
きた
けいふ
あひだを

上帝璫姫を降し、來りて荆巫の間に處らしむ。

神仙豈猛にあらんや、
玉座幽且つ闇。

（二月）

飄蕭風馭に惣し、節を弭して天闕に朝す。

候忽四方を巡り、道里の艱難を知らず。

他處四才を過り道里の費を知らず
こさうはふく や
するでもえんぐわんつる

古粧法服を具し、
遼殿煙鬱を羅ぬ。

百神自の奔走
、
雜沓來りて狂こ細ら。

百神自ら奔走し
蟻沓來りて班に趨る

雲興りて靈怪聚り、雲散じて鬼神還る。

まちまちや たらきよ
けうけうしうげつわん

茫茫夜潭淨く、皎皎秋月獨なり。

還つて應に玉珮を挿かし、來つて水の潺潺を聴き

卷之三

外一〇 二 恢脫 大にしてめづらしい。宋史に晦脱論怪自寓

THE JOURNAL OF CLIMATE

• • • • •

〔三〕 神臺 左傳宣公三年に、使民知神臺。〔四〕 魔龍 是は海蛇、魚の一種、龍は泥龜。〔五〕 旌陽 許巡字は敬之、旌陽の令となり、官を棄てて、道に入つたことは前に出づ。許旌陽傳に、旌陽於理章遇ニ一少年、「謂門人施太王」曰、此蜃精宜ニ巫前職、彼今化爲黃牛、我當化ニ黑牛以逐之。俄龍沙洲、一黑牛奔赴ニ黃牛而來、太王以劍揮之、中ニ其左股、因投於井。〔六〕 獨守降ニ老矣 神異記に、蜀守李冰降ニ毒龍娶氏、鎮ニ之於江上、水害遂息焉。〔七〕 萬遠 しまりなく志いまま。漢書の馮衍傳に、萬ニ逸人間之事。〔八〕 興奮 風のさびしく吹く貌。杜詩に興奮覺ニ素變とある。ここは神女のさまをいふ。〔九〕 節 旗節と熟し、ハタのこと。〔一〇〕 天闕 角星、晉書に、二十八舍東方角二星爲ニ天闕、其間天門也、其内天庭也。〔一一〕 遊殿 奥深い神殿。〔一二〕 煙鬢 髪の美しく黒き形容。〔一三〕 峠峻 秋月等、入獨記に、神女峰毎ニ八月十五夜月明時、有絲竹之音、往ニ來峯頂、上峰頂、猿皆鳴、達且方止。

【題義】 神女の事は、宋玉の賦に據ると、本、襄王を諷したものである。後世察しないで、一切兒女子を以て之を褒めしめて居る。廟中の石刻にも、瑞姫、西王母之女、稱ニ雲華夫人、助レ禹令ニ鬼神、斬レ石疏レ流、有レ功見レ紀、今封ニ妙用真人一といふことが載つて居る。瑞姫は仙術を得、嘗て江上を過ぎ、巫山に留連した時、大禹が水を理めて山下に駐る。大風卒に至つて幾んど制しきれない。姫と相值ひ、拜して助を求めた。姫は侍女に命じて禹を助け、石を斬り波を疏し、塞を決し扼を導き以て其の流に循はしめたので、禹は拜謝したと言ひ傳へて居る。又、禹嘗て之に崇懸の巔で詣でたとき、顧眄の際、化して石となり、倏然として飛騰し、散じて輕雲となり、聚つて夕雨となり、游龍となり、翔鶴となり、千態萬狀、親しむことが出来なかつたといふ傳説がある。大禹の神功は、巫山神女の助に因るといふのが此詩の骨子である。

【詩意】 大江が西から來り、千仞の山、上は雲漢に入り、山脚直に江中に挿んで居る。先づ江山から入手して治水を領起する。恢詭富神姦^二は、上を承けて下を起す。鼈鼈といひ、蛇龍といふ、皆神姦^一である。旌陽の令許遜^三が長蛟^四を斬ると、忽ち雷雨を起して、滄海を移し、やがて他處に移り去つた。全く神怪の所爲である。秦の時に、蜀の守李冰^五が蹇氏^六の毒龍^七を降伏して鎮でつなぎ置くと、それからは水害^八がなくなつた。其時の連鑑^九が今に存在して居るといふことである。蛟龍が縱横蕩逸するのを其ままにして置き、之を鎮め治める主神がないと、人寰^十を侵し來つて衆庶の妨害^{十一}をなすに至るであらう。それ故に、天帝が瑞姬^{十二}即ち神女^{十三}を降して此の荊州巫山^{十四}の間に居らしめた譯である。神女は毒龍を降服したが、本來神仙は決して猛なるものではない。柔は龍く剛を制するからである。神女の玉座^{十五}は幽にして且つ闇^{十六}であらう。又、神女も天帝に事へるから、風の車に乘り、飄蕭として旗を弭かして天庭に参朝する。風に駕ることであるから、たちまちの間に、四方を巡りて道路の艱難なるを知らない。又、神女の平生^{十七}は、奥深い神殿に坐して古粧の法服をめされ、周圍には美しい黒髪の女官^{十八}が神女の眷属として羅列し、百神は神女の命を畏みて、ここかしこと奔走し、雜沓^{十九}してそれぞれの職務の班列に就いて居る。其の百神のありさまは、雲の興つたときは、百神の靈怪^{二十}が聚つたのである。雲の散じたときは百神が還る時である。更に、神女が百神を使つて、雲雨を行つた後、閑暇^{二十一}なときの遊びは、清夜の逍遙^{二十二}である。ひろびろとして夜潭は淨かに、仰ぎ見ると、秋の月は、弓張のさまである。かかる清夜に於ける神女の嬉しみは、佩玉を搖かして水邊に來り、潺潺^{二十三}たる清音を聽いて遊ばれることであらう。

【餘論】 通篇、水の字を藏して露はさず、末句に至つて水の字を點じて詩旨^{二十四}を明にする。紀昀は、神女詩、不^レ作^ニ豔辭^{二十五}、是本領過^レ人處^{二十六}と評して居る。

過巴東縣不泊聞頗有萊公遺蹟

巴東縣を過ぎて泊せず、頗る萊公の遺蹟あるを聞く

萊公昔未遇寂寞在巴東。

聞道山中樹猶餘手種松。

江山養豪俊禮數困英雄。

執板迎官長趨塵拜下風。

當年誰刺史應未識三公。

當年誰^レ刺史、應^ニ未^レだ三公を識らざるべし。

【字解】 巴東縣 蘭州の西六十里、今湖北荊南道。**〔一〕** 萊公 宋の宰相寇準^一は平仲、嘗て官を巴東に守る。同平章事に累遷し、萊國公に封せらる。**〔二〕** 禮數^二 身分相當の待遇、左傳莊公十八年に、名位不同、禮亦異^レ數。**〔三〕** 趨^ニ塵拜^ニ下風^一 賢書に、望^レ塵而拜。左傳僖公十五年に、羣臣敢在^ニ下風^一。

とある。召伯が南國を循行して文王の政を布いた時、或は甘棠の下に舍つたが、後人が其の徳を思つて、其の樹を愛し、之を傷けるに忍びなかつたといふことである。仁宗の明道二年（皇紀一六九三年、西暦一〇三三年）十一月、寇準は謫所に死んだ。此詩の結びの處は坡公が隱然自負したもので、菜公を詠じたものでないと、古人も評して居る。

【詩意】寇準が昔、まだ志を得ないで、一地方官として巴東縣を守つて居つた時、手植の樹といふがある。公の祠前に在る二柏が其れである。江山は豪俊を養つて、人格を向上させるが、官途の待遇は英雄を一時に屈せしめ、一縣令となつて、東帶笏を執つて官長を迎へ、塵を望んで拜し、常に下風に在る。當年の刺史は誰であつたか、他日盛名高き賢相菜公を認め得なかつたのであらう。（東坡の自ら任する所が窺はれる。）

昭君村

昭君本楚人。
豔色照江水。
楚人不敢娶。
謂是漢妃子。

昭君村

昭君は本楚の人、
豔色江水を照す。
楚人は敢て娶らず、
謂ふ是れ漢妃の子と。

【字解】

【一】昭君 漢書匈奴傳に、單于自言願婿。漢氏以自親、元帝以後宮良家子王嬃字昭君。陽平草子。【二】豔色 容色美好をいふ。

【三】爲胡鬼 白樂天の昭君詩に、生爲漢宮妃、死作胡地鬼。【四】門楣 陳鵠の長恨歌傳に、當時燕隊

誰知去鄉國。
萬里爲胡鬼。
人言生女作門楣。
昭君當時憂色衰。
古來人事盡如此。
反覆縱橫安可知。

誰か知らん郷國を去つて、
万里胡鬼とならんとは。
人は言ふ女を生めば門楣となると、
昭君當時色衰ふるを憂ふ。
古來人事盡く此の如し、
反覆縱横安んぞ知るべけん。

有云、男不封侯女作妃、君看女却爲門上楣。楣は梁、門楣は門戸に光彩あるよりいふ。

【題義】昭君村といふのに二ヶ處ある。一は歸州の興山縣、方輿勝覽に、歸州東北四十里有昭君村とある。一は巫山十二峰の南神女廟の下に在る。孰れか是なるを知らないが、東坡の此詩は、巫山に在るものをして居る。王梅溪の昭君村詩に、十二巫峰下、明妃生處村、至今蠶醃女、灼面亦成痕とある。劉夢得の竹枝詞にも、昭君村中多女伴、永安宮外踏青回とある。

【詩意】昭君の村は巫山にあるから、昭君は楚の人で、其の美しい容色は、江水を照らしたのである。楚人の娶るを遠慮したのは、漢妃の子とて、畏れ多いといふのであつた。誰か知らん其の妃が、漢宮を去つて、万里の胡地に没するやうにならうとは、神ならでは知ることが出来ない。人は言ふ、男を生んでも侯に封せられない。女は却て門上の楣となると、昭君の人に羨まれた當時は、ただ容色の衰へるを憂へたものである。人事の定めないこと、率ね此の如くである。運命の反覆し縱横する作

用は、人間の測り知る所でなからう。

新灘

新灘

扁舟轉山曲。未至已先驚。
白浪橫江起。槎牙似雪城。
番番從高來。一一投澗坑。
大魚不能上。暴蠶灘下橫。
小魚散復合。淺澗如遭烹。
鷓鴣不敢下。飛過兩翅輕。

扁舟山曲に轉じ、未だ至らずして已に先づ驚く。
白浪は江を横りて起り、槎牙として雪城に似たり。
番番として高より來り、一一澗坑に投す。
大魚も上の能はず、蠶を暴して灘下に横はる。
小魚は散じて复合し、澗窪に遭ふが如し。
鷄鳴敢て下らす、飛過兩翅輕し。

白鷺誇瘦捷。挿脚還欹傾。
區區舟上人。薄技安敢呈。

白鷺瘦捷を誇り、脚を挿みて還欹傾す。
區區舟中の人、薄技安んぞ敢て呈せん。

只應灘頭廟。賴此牛酒盈。

只應に灘頭の廟、此の牛酒の盈つるに賴るべし。

【字解】
〔一〕新灘 石多く流が急で舟行の困難なるを灘といふ。入蜀記に、新灘兩岸、南曰官漕、北曰龍門、龍門水尤深急。又、魚の浮き沈みする貌をもいふ。
〔二〕鷄鳴 鳴。〔三〕薄技 司馬遼の傳、使得奏薄技出・入周衛之中。
〔四〕牛酒 司馬相如傳に、獻牛酒以交聘。

秦記に、龍門大魚集門下數千、不得上、故云、畢節龍門。〔六〕淮濱 小水の灘、司馬相如の上林賦に、臨淮注之瀆、淮濱實。又、魚の浮き沈みする貌をもいふ。
〔七〕鷄鳴 鳴。〔八〕薄技 司馬遼の傳、使得奏薄技出・入周衛之中。
〔九〕牛酒 司馬相如傳に、獻牛酒以交聘。

【題義】吳船錄に、歸州下五里至白狗灘、三十里至新灘とある。山が崩れ石が壅いで、此の灘を成し、峽中最險の處。此詩四層を以て舟人を襯起す。

【詩意】遠山の曲、長河の湄、舟は轉して流れ行く。未だ新灘に至らないのに、先づ驚いたのは白浪、江を横ぎり、槎牙たる雪城を江中に見たことである。そして如何にも勇ましく水流が谷底に落ちる。大魚も上ることが出来ないで、灘下に魚肢を曝して居る。小魚は散つては聚まり、聚つては又散る。浮き沈みして小水の聲の聞えるは、恰も物を烹るがやうである。鷄も敢て下らないで、翅輕く飛んで行く。鷄は身の瘦捷といふ點を誇り顔に、脚を挿みたり體を傾けたりして居る。舟中の人はよ、此際は我が薄技など無遠慮に呈さない。ただ灘頭の廟に牛酒を供へ、權を交へて、險しい處を離れたいものである。

【餘論】紀昀は、結二句拙、盈字亦押得牽強、と評して居る。

新灘阻風

新灘風に阻る

北風吹寒江。來自兩山口。

北風寒江を吹いて、來る兩山の口よりす。

溫紓廻雖途經信宿，猶望見之。行者歌曰：朝發黃牛，暮宿黃牛，三朝三暮，黃牛如故。黃牛廟之下是即ち無義灘で、亂石が中流を塞ぎ、之を望むに畏るべしといふことである。

【詩意】新灘を過ぎて、八十里行くと、黃牛峠である。江水南岸の石壁は高くして、路もない。上に黃牛廟がある。黃牛といへども名のみで、箱を付けた車を引かない。廟前に遊ぶ旅客は、舞の後、鼓を擊ち簫を吹き白羊を屠つて快飲する。山下の耕牛は、石多い瘠地で兩角を崖に磨き四蹄を水に溼して勞働しても、青芻半束、餓を醫するに足りない。羨ましいのは山上の黃牛である。

蝦墓培

墓背似覆孟。墓頤似偃月。

謂是月中墓。開口吐月液。

根源本甚遠。百尺蒼崖裂。

當時龍破山。此水隨龍出。

入江江水濁。猶作深碧色。

稟受苦潔清。獨與凡水隔。

豈惟煮茶好。釀酒應無敵。

墓の背は覆孟に似たり、墓の頤は偃月に似たり。

謂ふ是れ月中の墓、口を開いて月液を吐く。

根源本甚だ遠し、百尺蒼崖裂く。

當時龍山を破り、此水龍に隨つて出づ。

江に入りて江水濁り、猶ほ深碧の色を作す。

稟受苦だ潔清、獨凡水と隔つ。

豈惟茶を煮るに好きのみならん、酒を釀すも應に敵なかるべし。

蝦墓培

【字解】〔一〕蝦墓培 蝦墓一名蠅塚、培、一に砂に作る。荊州記に蝦墓在夷陵石鼻山下。歐陽公集自註にいふ、磁土人寫作二字と。〔二〕覆孟 安きに喻ふ、漢書、東方朔客驥、連三海之外、以爲帶、安於覆孟。〔三〕偃月 ひたひの骨のまま、戰國策に、犀角偃月。〔四〕月中墓 煙娥月に奔る、之を蠅塚といふ。

【題義】蝦墓培は夷陵石鼻山下に在る。黃山谷いふ、從舟中望之、頤頂口吻、甚類蝦墓、尋泉入洞中、寒泉出石骨、若鯉龍吼、水流循蝦墓背、垂鼻口間、乃入江、と。

【詩意】蝦墓の背は覆孟のやうで、見るからに安らかである。頤は偃月の如く、頤の骨かと思はれる。本是れ月中の蠅塚である。昔、后羿は長生の藥を西王母に請うたが、其妻の姮娥、盜んで之を食ひ、遂に月宮に奔り、化して蠅塚となつたといふ傳説がある。月中の墓、口を開いて月液を吐く、蝦墓培の根源は、まことに遠い。一旦龍が山を破つて、百尺の蒼崖忽ち裂ける。そこで此の水、龍に隨つて流れ出で、江に入る。江水が濁つても、深碧の色をなして居るは之が爲めである。此水の素質は潔清で、凡水と異なる。茶を煮るによいばかりではなく、酒を釀すにも極上であらう。

出峽

峽を出づ

峽に入つて嶺巖を喜び、峽を出でて平曠を愛す。

吾心淡無累、遇境卽安暢。

吾心は淡くして累なく、境に遇へば即ち安暢。

東西徑千里、勝處頗屢訪。

東西徑千里、勝處頗る屢訪ふ。

幽尋遠無厭。高絕每先上。

前詩尙遺略。不錄久忘。

憶從巫廟回。中路寒泉漲。

汲歸真可愛。翠碧光滿盞。

忽驚巫峽尾。巖腹有穿壩。

仰見天蒼蒼。石室開南向。

宣尼古廟宇。叢木作幃帳。

鐵橋橫半空。俯瞰不計丈。

古人誰架構。下有不測浪。

石竇見天囷。瓦棺悲古葬。

新灘阻風雪。村落去攜杖。

亦到龍馬溪。茅屋沽村釀。

玉虛悔不至。實爲舟人誑。

聞道石最奇。寤寐見怪狀。

幽尋遠きも厭ふなく、高絶毎に先づ上る。
前詩尙ほ遺略す、錄せんば久うして忘るるを恐る。
憶ふ巫廟より回りしとき、中路寒泉漲る。
汲み歸れば眞に愛すべし、翠碧光盞に満つ。
忽ち驚く巫峽の尾、巖腹穿壩あるに。
仰ぎ見れば天蒼蒼、石室開いて南向す。
宣尼の古廟宇、叢木幃帳を作し、
鐵橋半空に横はる、俯して瞰れば丈を計らず。
古人誰か架構する、下に不測の浪あり。
石竇に天囷を見、瓦棺古葬を悲しむ。
新灘風雪に阻てられ、村落去つて杖を攜ふ。
亦龍馬溪に到り、茅屋に村釀を沽る。

玉虛至らざるを悔い、實に舟人の爲に誑かる。
聞道らく石最も奇にして、寤寐に怪状を見る。

峽山富奇偉。得一知幾喪。
苦恨不知名。歷歷但想像。
今朝脫重險。楚水渺平蕩。
魚多客庖足。風順行意王。
追思偶成篇。聊助舟人唱。

峽山奇偉に富む、一を得て知る幾か喪ふを。
苦た恨む名を知らざるを、歷歷但想像す。
今朝重險を脱すれば、楚水渺として平蕩。
魚多くして客庖足り、風順にして行意王なり。
追思して偶篇を成し、聊か舟人の唱を助けん。

[字解] **【一】** 嶺巒 けほしく高き巒、宋玉の高唐賦に、登嶺巒而下望兮。**【二】** 平曠 陶淵明の桃花源記に、土地平曠。**【三】** 無窮 賈誼賦に德人無累兮。**【四】** 遷徙 一本通を過に作る。**【五】** 膺處 水經註に、嬉游多萃其上、信爲膺處。**【六】** 垂說文に、垂、盆也とある。盆は瓦器形似瓶。**【七】** 巫峽尾 壘州志に、巫山在大江之濱、形如巫字とある。昔、漁者歌うて曰く、巴東三峡巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳、と。**【八】** 巍峽有穿壩 王維の詩に、巖腹乍旁穿。壩は空洞。**【九】** 宣尼古廟宇 孔子の古廟、王梅溪集に、巴東之西、近江有夫子洞、亦曰聖洞。**【十】** 鐵橋 鐵の關橋。**【十一】** 天囷 星經に天囷十二星主倉廩之屬。**【十二】** 玉虛 洞の名、興山縣の南五十里、唐の天寶五年、其の洞忽ち開く。入蜀記に、玉虛洞去江岸五里許、洞門小、縫委丈、既入則可容數百人、有石成輪蓋鐵旗芝草竹笋仙人龍虎鳥獸之屬。**【十三】** 寤寐 れども覺めても、寤は覺ること、詩の周南に、寤寐求之。**【十四】** 王俗 に莊に作る、莊の意、莊子養生主に、神験王不善也。

[題義] 黃牛峽が盡くれば、則ち扇子峽、吳船錄にいふ、過此則峽中灘盡矣、三十里得南岸平地、曰く

平善塙、舟出、峽至。此、人皆相慶如更生、發、平善塙三十里至、峽州と。

【詩意】峽山は尤も奇、船が峽に入る、兩岸は悉く奇峰、其の險しく高きを喜ぶ。峽を出ると、廣廣として平遠である。心も淡く、意も暢びる。東西の徑千里、勝地は遠しとして訪ねざるはない。高絶の處も、登り見る。前詩に漏れた所があるから、又録する、備忘の爲めである。さきに、巫廟から回つたとき、途中に寒泉があつた、翠碧愛すべきである。忽ち巫峽の尾の處、巖腹に空洞があるのである。蓋かされた。仰いで見ると天は青青として居り、石室が南に向き開いて居る。それは孔夫子の古廟である。叢木が四周し、鐵製の闌檻が半空に横はつて居る。俯して瞰ると何丈あるか分らない。誰が建てたのであらう。下には不測の浪がある。巖穴に天囷を見る。天の倉廩に象つたのであらう。瓦棺のあるは古葬が行はれたものと見える。(夏以前は瓦棺、般は木棺、周には棺槨が行はれた。昔舜が崩れたとき瓦棺を以て鳴條に葬つたことが古史に載つて居る)新灘で風雪に阻まれたから、村落に往い散策した。又、龍馬溪に到ると、茅屋に村酒を沽つて居る。舟人に誑かれ、玉虛洞に行かなかつたが残念である。聞けば洞石は最も奇で、ねても覺めても、其の怪状が忘れない。概して峽山の風光は奇偉に富んで、幾んど應接に暇がない。名も記憶出来ないが、ありありと想像される。今朝重陰を出ると、楚水が廣廣と平和に流れて居る。魚が多くて料理が十分。風が順で遊意も盛んで、記憶を辿つてたまたま此篇を成し、舟中の人の諷唱を助けることとしたのである。

【餘論】紀昀曰く、出、峽詩却寫未出、峽事、一到本題、戛然意住、灘洞掩映、運意玲瓏、と。

遊三游洞

三游洞に遊ぶ

凍雨霏霏半成雪。

凍雨霏霏として半は雪となる、

遊人屢冷蒼苔滑。

遊人屢冷かにして蒼苔滑かなり。

不辭攜被巖底眠。

被を攜へて巖底に眠らんことを辭せ

洞口雲深夜無月。

洞口雲深くして夜月なし。〔されども、

稚采薇に、今我來思、雨雪霏霏。〔三〕被、被は寢衣のことである。戴復古の詩に、衲被蒙頭睡、翛然百慮寬。衲被につき合せた

夜著。陸遊の詩に、布衾紙被元相似。紙被は紙子の夜著。在窮記に、送四幅絲被一領とあるは、四幅の帛。侯鯤錄にも、古被の四幅で裁ひ、其の四邊に縫のあることが書いてある。

【字解】〔一〕三游洞、峽州の上

二十里に在る。方與勝覽に、唐白居

易、弟知退及元微之三人遊、故號三

游洞。三人が三游洞の記を作つて石

壁の上に刻んだから名けた。一説に

元次山、白居易、李白三人遊ぶと。

〔二〕霏霏、ひらひら雪降る。詩、小

【詩義】白樂天が江州の司馬から忠州の刺史に轉任したとき、弟の知退、友人の元微之と洞に遊び、各古詩二十韻を賦して石壁に書し、吾三人始めて遊ぶを以て、三游洞と名くと記した。東坡も亦、弟轍及び黃庭堅三人と會て遊んだので此詩がある。

【詩意】霧まじりの雨がひらひらと降り、半ば雪となつて飛ぶ。洞中寒氣が甚しい、遊人の履も冷たく、青青と苦むした崖は滑かで徑路も行き易からず、被を攜へ来て此の巖底に眠ることは、固より嫌ふのではないが、雨雪の時で、洞口には雲深く、月もないから宿るべきやうもない。

遊洞之日。有亭吏乞詩。既爲留三絕句於洞之。

石壁明日至峽州。吏又至。意若未足。乃復以此

詩授之。

洞に遊ぶの日、亭吏ありて詩を乞ふ。既に爲に三絶句を洞の石壁に留め、明日峽州に至る。吏又至り、意未だ足らざるが若し、乃ち復此詩を以て之に授く。

一徑繞山翠。繁紅去似蛇。

一徑山翠を繞り、繁紅去つて蛇に似たり。

忽驚溪水急。爭看洞門呀。

忽ち驚く溪水の急なるに、争うて看る洞門の呀なるを。

滑磴攀秋蔓。飛橋踏古槎。

滑磴秋蔓に攀ち、飛橋古槎を踏む。

三扉迎北吹。一穴向西斜。

三扉は北吹を迎へ、一穴は西に向つて斜なり。

歎息烟雲老。追思歲月遐。

歎息烟雲老い、追思すれば歲月遐かなり。

唐人昔未到。古俗此爲家。

唐人昔未だ到らず、古俗此に家を爲す。

洞煖無風雪。山深富鹿羨。

洞煖にして風雪なく、山深くして鹿羨に富む。

相逢衣盡草。環坐髻應髻。

相逢うて衣盡く草、環坐して髻應に髻なるべし。

竈突依巖黑。樽罍就石窪。

竈突巖に依つて黒し、樽罍石窪に就き、

洪荒無傳記。想像在羲媧。

洪荒傳記なし、想像羲媧に在り。

此事今安在。遺蹤我獨嗟。

此事今安くに在る、遺蹤我獨嗟く。

山翁勸留句。強爲寫槎牙。

山翁勧めて句を留め、強ひて爲に槎牙を寫す。

【字解】 〔一〕 三絶句。老泉・東坡・子由の詩各一。

〔二〕 峽州。十道志に、三峡口地曰峽州、楚蜀分限。今湖北宜昌縣治。

〔三〕 山翠。唐・斐迪の詩に、雲光侵履跡・山翠拂人衣。世說に、羊元所居山當戸翠壁奇秀、謂客曰、此翠屏宜晚對、爽人心目。

〔四〕 茅秆去似蛇。茅秆はめぐりまつはる。史通に、列行茅秆以相属。柳子厚の文に、斗折蛇行明滅可見。

〔五〕 呀。説文に張口貌。玉駕には大空の貌。班固の西都賦に、呀周池而成淵。

〔六〕 滑磴攀秋蔓。なめらかなる石坂。劉禹錫の詩に、塘高秋蔓軟。

〔七〕 古槎。古い杼。江總の詩に、古槎橫近澗。

〔八〕 烟雲老。枚乘の七發に、烟雲闇漠。

〔九〕 衣盡草。後漢書の黨錫傳に、解草衣以升廟相。

〔一〇〕 聲應。禮記檀弓に、魯婦人之聲而弔也、自敗於狐貞也。南宮絶之妻之姑之喪、夫子壽之聲。魯の婦人の

結び髮のままで弔ふは、壹始の戰に敗れしきかくして弔ひしより始まる。南宮絶の妻の姑の喪に、孔夫子は、之に聲の法を教へた。

〔一一〕 鹰突。かまどの煙だし、淮南子に、孔子無黔突、墨子無煩席、魯連子鷹五突、分々烟者衆矣。樽罍就石窪、勃は雲霄を盡きし

樽。顏真卿石壕聯句に、李公登飲處、因石爲窟。

〔一二〕 洪荒無傳記。漢書の劉歆傳に、信口説一面背傳記。

〔一三〕 羲媧。伏羲氏、女媧氏。

〔一四〕 槌牙。木の枝のかどたちて入りくみし貌。陸龜蒙の詩に、撚牙費腹同。

【題義】 下牢關を過ぎ、船を繋いで三游洞に登る。石磴を躊躇む二里、其の險處は、脚を著くべからず。洞の大きさは、三間屋の如し。一穴あり、人を通行せしむるも、陰黒にして畏るべし。山腹を練り、偃儀して巖下より洞前に至る。差行くべし。下は溪潭に臨む、石壁二十餘丈、又一穴の後、壁ありて居るべし。鍾乳、歲久うして地に垂る、正に穴門に當る。亭吏が詩を乞うたので、此の勝を寫したので

ある。

【詩意】山の翠をうねうねと繞れる一徑は、蛇の行くやうである。溪水の急なるに驚いて、やがて洞門の口を張つて居るを見る。蔓草に攀ちて、なめらかなる石の坂路を登り、古い松を踏んだ。三つの扉は北風を迎へ、一穴は斜に西に向つて居る。烟雲は籠めて歲月遡かなるを覺える。唐の人の來たといふ話は聞かないが、昔から住家がある。傳へいふ、洞は暖かで、風雪もなく、山は深くて鹿も牡豕も多い。村の人は、粗衣を著け、結び髪である。烟突は巖につき、酒樽は石の窟を用ひて居る。記録はないが、古い村で、伏羲氏、女媧氏の世が思はれる。今は遺跡に昔を偲ぶばかり、土地の人が詩を所望したから、爲に此の入り組んだことを記したのである。

寄題清溪寺

清溪寺に寄せ題す

口舌安足恃韓非死說難。
自知不可用鬼谷乃真姦。
遣書今未亡小數不足觀。
秦儀固新學見利不知患。
嗟時無桓文使彼二子顛。

口舌安んぞ恃むに足らん、韓非は說難に死せり。
自ら用ふべからざるを知る、鬼谷は乃ち真姦なり。
遣書今未だ亡びず、小數觀るに足らず。
秦儀は固より新學、利を見て患を知らず。
嗟時に桓文なく、彼の二子をして顛せしむ。

死敗無足怪夫子固使然。
君看巧更窮不若愚自安。
遺宮若有神領首然吾言。
死敗怪むに足るなし、夫子固より然らしむ。
君看よ巧更に窮るは、愚にして自ら安んするに若かざるを。
遺宮若し神あらば、首を領して吾言を然りとせん。

【字解】
〔一〕清溪寺 東坡自註に、在陝州、鬼谷子之故居。鬼谷先生傳に、楚有清溪、下深千仞、其水靈異。

〔二〕口舌安足恃 漢書董仲舒傳に、上怒馬、數曰、齊康以舌得官、乃妄言沮吾軍。〔三〕死說難 史記に、韓非者、韓之公子也、作孤憤、五蠹、内外篇、說林、說難十餘萬言。然韓非知說之難、爲說難、書甚具，終死於秦、不能自脫。〔四〕鬼谷 鬼谷先生傳に、上怒馬、數曰、齊康以舌得官、乃妄言沮吾軍。〔五〕遣書今未亡 劉向七略に、鬼谷子の書あり。隋書志に、鬼谷子三卷を載す。〔六〕小數不足觀 柳宗元曰く、漢時無鬼谷子、鬼谷子後出、學者宜其不道。〔七〕秦儀固新學 文心雕龍に、新學之說、則逐奇而先正。〔八〕桓文 齊の桓公、晉の文公。〔九〕巧更窮 文心雕龍に、轉丸勝其巧辭、飛辯伏其精術。丸を轉すは極めて容易。鉗はクビカキ。〔十〕頷 説文に、低頭也。

【題義】清溪は陝州遠安縣の南六十里にあつて、源を清遠山下より發すといふことである。郭璞遊仙の詩に、清溪千仞餘、中有二道士、借問是何人、云是鬼谷子。寄題といふは、其の地に至らないで題詠する意である。

【詩意】口舌は恃むに足らない、韓非子も遊説の難しいことを説いて、遊説に死んだ。鬼谷先生の自ら用ふべからざるを知りつつ人に授けるは、眞の姦である。鬼谷子の書は今に傳はつて居るが、要するに小道で、観るに足らない。之に師事した蘇秦も張儀も、固より新學で、ただ利を見て、患を知らぬ詠する意である。

い。ああ時に齊桓の如き晉文の如き霸者は居らないから、張の二子をして顛せしめた。二子の死敗は、怪しむに足らない。自ら招いたのである。して見ると、巧をますます窮めるのは、愚を守つて自ら安んするに若かない。鬼谷の遺宮にしてもし神靈があれば、首を領して吾が言を然りとするであらう。

【餘論】紀昀いふ、鬼谷乃眞姦、意好而語未工。

留題峽州甘泉寺

峽州の甘泉寺に留題す

輕舟橫江來弔古悲純孝。
透迤尋遠路婉變見遺貌。
清泉不可挹涸盡空石窖。
古人飄何之惟有風竹鬧。
行行覩村落戶戶懸網罩。
民風坦和平開戶夜無鈔。
叢林富筍茹平野絕虎豹。
嗟哉此樂鄉母乃姜子教。
民風坦にして和平、戸を開くも夜鈔なし。
叢林筍茹に富み、平野虎豹を絶つ。
行行村落を覩ぶ、戸戸網罩を懸く。

【字解】
〔一〕甘泉寺 姜詩の故居と傳ふるも、信じ難し。姜詩は廣漢（今の四川遂寧縣の東北）の人である。母に事へて至孝。

【題義】東坡自註にいふ、甘泉寺、姜詩故居、と。歐陽修が詩の自註に、甘泉寺在臨江一山上、與二縣麻相對、寺有清泉一泓、俗傳爲姜詩泉、亦有姜詩祠云云、と。姜詩は廣漢の人であるから、姜詩の泉が此にある筈はない。入蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至孝婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不以爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に泝つて汲む。後、風に值ひ、水を得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞を市ひ、鄰母をして其の姑に遣らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鮓を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが出来たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。

【詩意】 輕舟江を渡つて遠路を厭はないで甘泉寺に來り、姜詩夫妻の古へを弔うて、其の純孝を悲しむ。年若くて美しかつた孝子が昔の容貌を偲ぶ。清泉は挹むことが出来なく、石窖には水もない。姜詩夫妻は何處へ之きしか。ただ風や竹のさわがしい音がするのみ。行き行いて村落を見舞ふと、戸毎に捕魚の網や籠が懸つて居る。風俗は平和で、戸を開かないでも盜難がない。叢林には筍が多く、野原には虎豹の跡を絶つて居る。ああ此の楽しい郷、これは純孝妻子夫妻の感化でもあらう。

夷陵縣歐陽永叔至喜堂

夷陵縣歐陽永叔の至喜堂

夷陵雖小邑自古控荆吳。

夷陵は小邑と雖も、古より荆吳を控ふ。

形勝今無用英雄久已無。

形勝今用ゐるなく、英雄久しく已に無し。

誰知有文伯遠謫自王都。

誰か知らん文伯あるを、遠謫王都よりす。

人去年年改堂傾歲歲扶。

人去つて年年改り、堂傾いて歲歲扶く。

追思猶咎呂感歎亦憐朱。

追思猶ほ呂を咎め、感歎亦朱を憐む。

舊種孤楠老新霜一橘枯。

舊種孤楠老い、新霜一橘枯る。

清篇留峽洞醉墨寫邦圖。

清篇峽洞に留め、醉墨邦圖を寫す。

故老問行客長官今白鬚。

故老行客に問ふ、長官今は白鬚。

著書多念慮許國減歡娛。
寄語公知否還須數倒壺。書を著はして念慮多く、國に許して歡娛を減す。
語を寄す公知るや否や、還須く數倒壺を倒すべし。

【字解】 **〔一〕** 夷陵縣 史記白起傳に據るに、白起攻楚拔郢、明年拔郢、燒夷陵、楚王亡去、秦以郢爲南郡。歐陽修至喜堂記に、夷陵者、楚之西境、昔春秋書荆、以狄之、而詩人亦曰「蠻荆」。峽州にも至喜亭あり、歐公亦之が記を爲る。 **〔二〕** 形勝 地勢のすぐれたるところ、史記高祖記に秦形勝之國、南史劉善明傳に、國之形勝。 **〔三〕** 文伯 梁肅は、常州刺史獨孤及の狀に達言發辭、若山嶽之峻極、江海之波濤、故天下謂之文伯。 **〔四〕** 遠謫 歐陽修の傳に據るに、入朝爲翰閣校勘、范仲淹以言事貶，在廷多論救司諫高若訥、獨以爲當黜、修貽書責之、謂其不知復人間有羞恥事、若訥上其書、坐貶夷陵令。 **〔五〕** 告呂 吕は呂夷簡を指す、史に稱す、呂夷簡爲相成郭后之譽、遂孔道輔、范仲淹於外、時論少之、歐陽之貶、由仲淹也。 **〔六〕** 憐朱 東坡自註に、時朱太守爲公築此堂。宋史に、景祐二年（皇紀一六九五年、西暦一〇三五年）朱慶基以郎中出守峽州。 **〔七〕** 舊種孤楠老至喜亭新に北軒を開き、手から楠木を植うる詩に、爲憐碧砌宜佳樹、手刪苔選綠叢。 **〔八〕** 一橘枯 歐陽修夷陵縣至喜堂記に、有橘茶筍四時之味。又、戲答元珍詩に、綠蓑紅橘最宜秋。 **〔九〕** 清篇留峽洞云云 三聯潤に歐公の詩があり、夷陵圖後、歐公の題詩がある。行客、東坡自らいふ。 **〔十〕** 許國 翁書陸玩傳に、以身許國。

【題義】 宋仁宗の景祐三年に、歐陽修が貶謫されて夷陵に來つた。峽州の太守朱慶基は、歐公と親しかつたので縣舍に來り、其の廳事の東を擇らんと作つたのが此至喜堂である。歐公の言に、凡爲吏者、莫不始來而不樂、既至而後喜也、作至喜堂記藏其壁と。之に共鳴したのが此詩である。

【詩意】 峽州は小州、夷陵は下縣であるが、大江に濱して、南は楚、東は吳を控へ、古から地勢のすぐれた土地である。併し其の形勝は今に用なく、英雄も久しく出ない。歐陽公のやうな文伯が遠く王

都から此地に調せられやうとは誰も思はなかつたであらう。公去つて年年改まり公の堂が傾いて、歳扶ける。公を思つては、時の宰相呂夷簡を咎め、公を慕つては、峽州の太守朱慶基が公の爲に作られた至喜堂に及ぶ。舊植ゑた楠木も老い、當時の橋も新霜に枯れた。三游洞に、歐公の詩があり、夷陵圖後にも、公の筆蹟があり、土地の老人等は余に歐公の事を問つたから、余は答へた、昔の長官は今は白髪となり、頻に書を著はして千載の憂を述べ、身を以て國に許して安逸を貪らないと。さて更めて遠く話を寄す、公知るや否や、また、しばしば酒壺を倒されることもありませう。

蘇東坡詩集 卷二

古今體詩 三十九首

息壤詩

息壤詩

【訓讀】淮南子曰、鯀涊洪水、盜帝之息壤。帝使祝融殺之於羽淵。今荊州南門外有狀若屋宇，陷入地中，而猶見其脊者，旁有石云不可犯。畚鍤所及輒復如故。又頗以致雷雨。歲大旱，屢發有應。予感之，乃爲作詩。其辭曰。

淮南子曰、鯀涊洪水，盜帝之息壤。帝使祝融殺之於羽淵。今荊州南門の外に、状屋宇の若く、地中に陷入して猶ほ其の脊を見するものあり。旁に石あり、云ふ。犯すべからず、と。畚鍤の及びし所輒ち復故の如くす。又、頗る雷雨を致すを以て、歲大に旱すれば、屢々發いて應あり。予之に感じ、乃ち爲に詩を作る。其の辭に曰く、

【字解】〔一〕淮南子、書名。前漢の淮南王劉安撰し、二十一卷ある。〔二〕息壤、湖北江陵縣の南にあり。即ち山海經の鯀涊帝之息壤、以涊洪水之處也。〔三〕祝融、火の神、左傳昭公二十九年に、火正曰祝融。〔四〕羽淵、羽山の上に二泉あり、會して羽

譯となる。即ち羽潤。左傳に、其神化爲黃熊、入於羽潤とあるもの。羽山は山東鄧城縣の東北に在る。【】畚鍤、畚は土を盛る事、鍤はスキ、晉書に、畚鍤相尋、干戈不息。

帝息此壤以藩幽臺。

有神司之隨取而培。

帝敕下民無敢或開。

惟帝不言以雷以雨。

惟民知之幸帝之怒。

帝茫不知誰敢以告。

帝怒不常下土是震。

使民前知是役於民。

無是墳者誰取誰干。

惟其的之是以射之。

【字解】幸ニ帝之怒 惡はもと想に作る、一説に想字似當作怒、今之に從ふ。

【題義】錦繡萬花谷といふ書（宋孝宗時代の著）に、江陵南門外、甕門内東垣下有小瓦堂、室一所、高三尺許、此息壤也、禹鑄石造龍之宮室置穴中、以塞水脈と見えて居る。洪水が天に滔り、鰐は

帝此の壤に息し、以て幽臺を藩にする。

神あり之を司り、隨つて取りて培ふ。

帝下民に敕し、敢て或は開くことならしむ。

惟れ帝言はず、以て雷し以て雨ふらす。

惟れ民之を知り、帝の怒らんことを幸ふ。

帝茫として知らず、誰か敢て以て告ぐる。

帝の怒は常ならず、下土是れ震はし、

帝をして前知せしむ、是れ民を役す。

是の墳なくば、誰か取り誰か干さん。

惟其れ之を的にす、是を以て之を射る。

【詩意】天帝が此の壤に息ひて、地中の臺を藩とした。神が之を司り、之に培うた。天帝が下民に仰せがあつて、之を開かないやうにしたが、天帝は物言はない、雷を鳴らし雨を降らして其の意を表はされる。民は之を善いこととし、旱の時など、特に天帝の大に怒られるやうにと幸つてしきりにお祈をする。併し天帝の怒りは、何日何時發するか少しも分らない。其の都度下土を震はし民を前知せしめる。是は畢竟、民を役することになる。ああこの墳がなければ、之を取るものもないし、之を干すものもない譯である。的があればこそ之を射るものも生ずるのである。

荊州 十首

荊州 十首

游人出三峽。楚地盡平川。
游人三峽を出づれば、楚地盡く平川。

北客隨南賈。吳檣間蜀船。
北客南賈に隨ひ、吳檣蜀船を間ふ。

江侵平野斷。風捲白沙旋。
江は平野を侵して斷え、風は白沙を捲いて旋る。

欲問興亡意。重城自古堅。(三) 興亡の意を問はん欲すれば、重城古より堅し。

【字解】 〔一〕 荆州 太平寰宇記に、荊州江陵郡屬山南東道楚郢都、秦爲南郡、即今州也とある。宋は江陵府となし、元は中興路と改め、明は荊州府となす。清、之に由り湖北省に屬す。民國の江陵縣は、即ち舊府治である。〔二〕 三峽 巫峽・瞿塘峽・西陵峽であることは前にも述べた。併し、一定しない。太平寰宇記には、西峽・巫峽・歸峽。陝程記には、明月・廣溪・仙山。或は瞿塘・灔澦・巫山を三峽とし、或は州境の明月峽・黃牛峽・西陵峽を三峽とする。〔三〕 重城 左傳哀公七年に、民保於城、城保於德。唐書に、大河以北無堅城。

【題義】 宋、仁宗の嘉祐五年（皇紀一七二〇年、西暦一〇六〇年）正月に、東坡は弟子由と父老泉に侍して荊州から大梁に遊んだ。荊州十首は、其時の作である。第七首に、殘臘多風雪の句がある所を見ると、十首は、一時の作ではない。第一首は、總起である。

【詩意】 遊人が三峽を出ると、險阻既に遠く、楚の地は、盡く平川である。人も物も四方から輻湊し、北客は南買に隨ひ、吳檣に蜀船が間つて居る。江は平野を断ち、風は白沙を捲きあげる。昔禹が始めて城を作り、強者は攻め、弱者は守り、敵者は戰ふとか。興亡の意はと問はば、城を堅くするが第一と答へやう。重城は古より堅いのである。

南方舊戰國。慘澹意猶存。

南方舊戰國、慘澹意猶存す。

慷慨因劉表。淒涼爲屈原。

慷慨は劉表に因り、淒涼は屈原の爲なり。

廢城猶帶井。古姓聚成村。
亦解觀形勝。昇平不敢論。

廢城猶は井を帶び、古姓聚りて村を成す。
亦解く形勝を觀、昇平敢て論せず。

【字解】 〔一〕 慘澹 心を痛め動かす、杜詩に慘澹苦士志。〔二〕 慷慨 いきどほりなげく、後漢書、齊武王續傳に性剛毅慷慨。

〔三〕 劉表 字は景升、後漢高平の人、曹操の袁紹と官渡に相持するや、紹、助を表に求む、表之を許して未だ授はず。紹敗れ、操、自ら將として表を征す、未だ至らざるに、表は疽が背に發して死す。〔四〕 淒涼 さむしくいたむ、李白の詩に、覽古情淒涼。寂寥の意にも用ふ、杜甫の詩に、江海日淒涼。〔五〕 屈原 屈平字は原、楚の同姓、江南に遷され、天を援き聖を引き、以て自ら明にせしも、終に省られず。清白を以て久しく濁世に居るに忍びず、遂に汨羅に投じて死す。〔六〕 帶井 易に改々邑不改井。古姓成村、村は聚落。太平寰宇記に、武昌郡六姓、吳・伍・程・史・龍・馬。武陵郡三姓、卞・伍・馮。〔七〕 解 能の義に用ゐること、詩に多い。唐詩に解放胡聲延塞馬、能騎代馬、聽秋田などとある。平仄の便にて能と用ゐるが多いが、本義は能よりも重い。

【詩意】 首を回せば、南方の古國、慘として心を痛ましめる。劉表が袁紹の乞を許して、援を與へない。紹が曹操に敗られ、表も亦、曹操に征せられ、其の軍の到らない内に、表は疽が背に發して死んだ。劉表の古土を訪ふと、慷慨を禁ずることが出來ない。屈原の清白を以てしては、連も濁世に容れられない。淒涼の念が自ら起るのである。廢城には昔ながらの井戸が存し、古來の人々が今に聚落をなして居る。靜に天下の形勢を觀て、敢て輕しく昇平を論じない。（また高常侍が、豈邊を安んずるの策なからんや、諸將は已に恩を承くとの意である。）

【餘論】 紀昀は此詩を評して、結は即ち高常侍が豈無安邊策、諸將已承恩の意であると言つた。高適の薦中作に、策馬自沙漠、長驅登塞垣、邊城何蕭條、白日黃雲昏、一到征戰處、每愁胡馬翻、豈無

安邊書、諸將已承恩、惆悵孫吳事、歸來獨閑門。とある。諸將が邊を防ぐを知らないから、策ありと雖も、陳すべきなし。天下僭賞と言はないで、主將承恩といふ、人をして言外に之を思はしめる。

楚地闊無邊。蒼茫萬頃連。
耕牛未嘗汗。投種去如捐。
農事誰當勸。民愚亦可憐。
平生事遊惰。那得怨凶年。

楚の地は闊うして無邊、蒼茫として萬頃連る。
耕牛未だ嘗て汗せず、種を投じ去てて捐つるが如し。
農事誰か當に勸むべき、民の愚亦憐むべし。
平生遊惰を事とす、那ぞ凶年を怨むを得む。

【字解】〔一〕楚地。元和郡縣志に、春秋以來、楚國之都、謂之郢都、西接巴巫、東連雲夢。〔二〕無邊。廣くして限りなし、郭景純の江賦に、察之無象、尋之無邊萬頃連。前漢刑法志に、提封萬井。同、食貨志に、地方百里、提封九萬頃、提封は知行の地。〔三〕耕牛。事物紀原に、漢武帝以趙過爲搜粟都尉、教民耕植、三犁共一牛、一人將之。〔四〕農事。誰當勸。左傳昭公十七年に、九扈爲九農正。註にいふ、以九扈爲九農之號、各隨其宜、以教民事と。〔五〕平生事遊惰。太平寰宇記によるに、楚人多剽悍、唐至德之後、流僧爭食者甚衆、五方雜居、風俗大變、最尙廢業、耗民莫甚於此。

【詩意】楚の地は、西は巴巫に接し、東は雲夢に連り、蒼茫として涯を知らない。耕作に骨も折らなければ播種の事も務めない。民の愚は寧ろ憐むべく、ただ日に遊惰を事として居る。これでは生活の安定を得る筈はないから、凶年を咎める譯にもゆくまい。

【餘論】紀昀は此詩を三四太拙、後四句亦太直、十首中如月之累と評して居る。

朱檻城東角。高王此望沙。
江山非一國。烽火畏三巴。
戰骨淪秋草。危樓倚斷霞。
百年豪傑盡。擾擾見魚蝦。

朱檻城の東角、高王此に沙を望む。
江山一國にあらず、烽火三巴を畏る。
戰骨秋草に淪み、危樓斷霞に倚る。
百年豪傑盡き、擾擾として魚蝦を見る。

【字解】〔一〕望沙。荊州志に、城東南有望沙樓、後梁時、高季興、建以望沙津、陳堯咨知荊州、更名仲宣樓。五代史に、南平世家高季興於後梁開平二年爲荆南節度使、末帝時封渤海王。後唐莊宗同光二年封南平王、子從誨嗣封父爵。高從誨が督使陶穀を望沙樓に宴せし、とも五代史に見ゆ。〔二〕江山非一國。五代史に、南漢與閩蜀皆稱帝、從誨所向稱臣。故に公の詩に、江山非一國の語あり。〔三〕三巴。常璩の華陽國志に、劉璋改永寧爲巴郡、以固陵爲巴東、徙龐義爲巴西太守、是爲三巴。〔四〕戰骨論。秋草、江淹の恨賦に、試望平原、蔓草繁骨、拱木斂魂。張籍の詩に、年年戰骨多秋草。〔五〕危樓。高い樓、岑樓、雲樓、皆同じ、陰鬱の詩に、接路上危樓。〔六〕百年豪傑盡。續通鑑長編に、乾德元年、高繼冲奉表來歸、自先生作詩時、上溯至高季興封渤海王、蓋百三十餘年矣。〔七〕擾擾。紛擾の意、國語に、唯有諸侯、故擾擾焉。

【詩意】杜子美の詩に、滂沱朱檻溼とあるが、其の朱塗の欄干は城東の角にある望沙樓である。高從誨は、晉の使である陶穀を此の樓に宴したことは歴史に名高い。當時、南漢も閩も蜀も皆、僭號して帝と稱した。從誨は、向ふ所の臣と稱したので、この江山は、晉にも屬し、南漢にも閩にも又蜀にも屬してゐたというてもよからう。警報をする烽火は、巴郡・巴東・巴西の來寇を畏れるからである。戰場に曝した骨は、秋草に没し、高樓は空しく断霞に聳えて居る。當年の豪傑一時に僭號したものも、

今は紛々亂離の跡を遺したまで、魚蝦の水中にあるに異らない。

【餘論】 査初白曰く、此詩因ニ南平而致ニ慨於五季也。季興初爲ニ荆南節度、所ノ領止江陵・歸峽三城、地狹而兵弱、難與ニ諸國爭衡、父子祖孫、與ニ五代相終始。是時楊李擅吳、王氏保閩、劉氏稱張于南粵、王孟跳梁于蜀中、莫不三帝制自爲、志圖ニ兼并、獨高氏所向稱臣、未幾而強弱大小、同歸ニ澌滅、百年以來、戰骨已銷、孤城猶在、千秋形勝之區、惟危樓倚斷霞耳、一時豪傑自命者、細瑣云塵、無足比數、魚蝦擾擾一語、說得五代君臣及僭號諸國、可憐可憫、可鄙可羞、と。解して得て明快である。

沙頭烟漠漠來往厭喧卑。

沙頭烟漠漠來往喧卑を厭ふ。

野市分聲鬧官船過渡遲。

野市聲闊を分ち、官船過渡遲し。

遊人多問卜。偷叟盡攜龜。

遊人多く卜に問ふ、偷叟盡く龜を攜ふ。

日暮江天靜無人唱楚辭。

日暮れて江天靜に、人の楚辭を唱ふるなし。

【字解】 〔一〕沙頭、沙市ともいふ、今の湖北江陵縣南十五里に在る。荊州志には、沙頭市在江陵縣東北十五里。元徵之の江陵玩月の詩に、闌照沙頭市。〔二〕厭喧卑、鮑明遠の舞鶴賦に、去帝鄉之岑寂、歸大賓之喧卑。〔三〕偷叟、田舎もの、晉書左思の傳に、陸機與弟雲書曰、此間有偷父、欲作三都賦。偷叟は即ち偷父の意。吳人は中州人を偷といふ。〔四〕攜龜、楚人の尚巫を讀つたのである。龜は龜の龜、史記に三王不同龜、四夷各異ト、然各以決吉凶。精少孫補史記に、南方老人用龜支臥足。

【題義】 沙頭市の所見を寫したものである。紀昀は譏ニ古風之不作也と評して居る。

【詩意】 湖北の沙頭市、煙は市を籠めて漠漠、來往の人で雜沓厭ふべきである。市場は塵（塵といふ塵の屬）の羣つたやうに喧しいのに、官船の渡も遅い。ここに遊ぶ行客は、多くト者に身の上を占つてもらひ、田舎のものは盡く龜を所持して居る、日が暮れて江天の静かる頃になつても、また古の屈原・宋玉などの楚辭を唱へるやうな氣高いものはない俗地である。

太守王夫子山東老俊髦。

太守王夫子は、山東の老俊髦。

壯年聞猛烈白首見英豪。

壯年猛烈を聞き、白首英豪を見る。

食雁君應厭驅車我正勞。

雁を食うて君應くべし、車を驅つて我正に勞す。

中書有安石慎勿賦離騷。

中書安石あり、慎んで離騷を賦すること勿れ。

【字解】 〔一〕王夫子、東坡全集に、上ニ荊州王兵部書、與ニ王刑部書がある。二人は皆、荊州の守であり、又姓を同うして居るが、其の名字が傳はらない。〔二〕俊髦、髦は毛中の長毛、故に才德の衆に秀でたるに喻ふ。爾雅の註に、士中之後、鬚ニ毛中之髦。〔三〕食雁君應厭、後漢の王符傳に、皇甫規解官辟ニ安定、鄉人有以貨得雁門太守者亦去職還家、書レ刺謗規、規レ不迎、既入而問、卿前在郡食雁美乎。〔四〕中書有安石、云々時相を指す。安石の如きあれば、王夫子は、屈原のやうに放逐されて離騷を作るなどのことはなからう。晉の謝安傳に、安石爲尙書僕射、領吏部、加後將軍及中書令。〔五〕離騷、屈原の辭賦。史記屈原傳に、憂愁幽思而作離騷、離騷者、猶離憂也。離は遠ふといふ意。

【詩意】 荆州の王夫子は、山東の老俊傑で、壯年の時は、猛烈で聞え、白首になつても英豪として知られる。昔、皇甫規が官を辭して郷に歸つた時、同じく郷人が、これは金の力で雁門の太守となつたものがあつた。名刺を通じて規に會つた。規は君は郡に在つて雁を食つて美かつたかと尋ねたさうである。此故事により、雁を食うて君は應に厭くべし、車を驅つて我は正に勞するといふのが王夫子の志であらう。幸ひ、今は善い宰相が居られるから、君は出でて仕ふるべく、屈原のやうに不平の文句を言つてはならない。

【餘論】 紀昀は此詩を夾此一首法生動、從杜公游何氏山林詩、萬里戎王子一首上得法と評して居る。杜の陪鄭廣文遊何將軍山林十首中的一首は、萬里戎王子、何年別月支異花開絕域、滋蔓匝清池、漢使徒空到、神農竟不知、露翻兼兩打、開拆日離披、である。

殘臘多風雪。荆人重歲時。

殘臘風雲多、荆人は歲時を重んす。

客心何草草。里巷自嬉嬉。

客心は何ぞ草草、里巷自ら嬉嬉。

爆竹驚鄰鬼。驅儻聚小兒。

爆竹鄰鬼を驚かし、驅儻小兒を聚む。

故人應念我。相望各天涯。

故人應に我を念ふべし、相望む各天涯。

【字解】 一、殘臘、窮腊といふに同じ。冬至の後、第三の戌の日に、百神を合せ祭るを臘祭といふ。臘祭は年末に行ふから、臘月は臘月十二月の異名となる。二、重歲時、荆楚歲時記に、歲暮家家具看蔽、留宿歲飯、至新年十二日、棄之街衢、以爲去故

納新。これは汎く楚人の時節を重んずるといふ。三、草草、心を勞する貌。詩の小雅に、驕人好好、勞人草草。杜詩に、聞君過萬里、取別何草草。四、嬉嬉、欣び笑ふ聲。皮日休の詩に、幾日嬉嬉活。五、爆竹、驅儻、荆楚歲時記に、正月一日、鶴鳴而起、先於庭前爆竹、以避山臊惡鬼。東方朔の神異經によるに、西方深山中に人あり、其の長尺餘、一足、性人を畏れず。之を犯せば人をして寒熱せしむ。名けて山臊といふ。竹を以て火中に著け、爆竹聲あれば、山臊驚懼す。鬼は金姑の聲を惡む、閑人は破竹の聲を謂ひて金姑の聲となす。驅儻は呂氏春秋の註に、歲前一日、擊鼓驅疫、謂之逐除。

【詩意】 歲が暮れて、風雪も多いので、外から來た人は心を勞してせわしないが、歲時を重んずる此里では嬉嬉として喜んで居る。山臊や惡鬼を驚かす爆竹の音や、陰曆十二月の八日に、村人が太鼓を擊ち、金剛力士を裝うて逐疫することも、賑やかである。遠く離れて居る吾が友も、我が彼を思ふやうに、彼も亦、我を念うて居られるであらう。各天の一方に相望んで居る。

【餘論】 楚の人は歲時の風俗を重んす。爆竹も驅儻も、昔ながらに行はれて居る。時節の移り行く毎に、故人は應に我を念ふであらうといふのが此詩である。紀昀は此詩を一結不脱自己一方不是泛陳風土と評して居る。

江水深成窟。潛魚大似犀。
江木深うして窟を成し、潛魚大にして犀に似たり。

赤鱗如琥珀。老枕勝玻瓈。

赤鱗琥珀の如く、老枕玻瓈に勝れり。

上客舉雕俎。佳人搖翠筩。

上客は雕俎に擧げ、佳人は翠筩を搖す。

登庖更作器。何以免屠割。庖に登せ更に器に作る、何を以て屠割を免れん。

【字解】 〔一〕赤鱗如琥珀。本草に、青魚生江湖間、多以作酢、所謂五侯鲭也。其頭中枕骨蒸令氣通，乾狀如琥珀。爾雅に、魚枕謂之丁。註にいふ、枕在魚頭骨中、形似篆書丁字。江淹の別賦に、舞淵魚之赤鱗。〔二〕老枕勝玻瓈。劉禹錫の詩に、老枕知勝雨。溫庭筠の詩に、玻瓈枕上開天雞。〔三〕翠籠。籠は玉篇に叙観。〔四〕屠割。割も屠る意、或は剝に作る。

【題義】 詩の周頤に、猗與漆沮、潛有多魚とある。漆水、沮水は川の名、潛は魚を取る仕掛けである。潛に魚が多い。郭璞の江賦に、或鹿船象鼻、或虎狀龍顏、鱗甲璀璨、煥爛錦斑とある。鹿のひたひ、象の鼻、虎の狀、龍の顔、鱗甲が間雜し、照り輝いて、錦の如く斑といふ意である。夫れで庖に登せられ、器に作らる。多材は累を爲すの感を寓せたのが此詩である。

【詩意】 江水は深く孔穴をなし、其の潛に居る魚は肥えて大き犀のやうである。其の鱗は赤くて琥珀の如く、其の頭骨中の枕は、玻瓈にも勝つて居る。それで上客は之を雕めた俎に擧げ、佳人は之を翠色の釵にする。料理され、器物に作らる。何れにしても屠られる。材多ければ身を累はす類であらう。

故人持贈我。三嗅若爲珍。故人我に持贈す、三たび嗅ぐ若爲なる珍ぞ。

【字解】 〔一〕北雁。韓退之の詩に、嗷嗷鳴雁嗚且飛、窮秋南去春北歸。〔二〕依依。離れるに忍びない意。楚辭の九思に、志懲兮依依。〔三〕折翼。澳の息夫躬が絕命詞に、冤頸折翼痛得往兮。〔四〕沾巾。張衡の四愁の詩に、側身北望涕霑巾。〔五〕高飛。九域志に、韓遵妻何氏美、宋康王欲之、何氏歌曰、南山有鳥、北山張羅、鳥自高飛、羅當奈何。〔六〕持贈。持ち行きてもくる、陶弘景の詩に、不堪持贈君。

【詩意】 南に去り北に歸る雁がねは、依依として旅人のやうである。縦横に相違うては翼を折る。思へば感することの多くて爲に巾を沾す。平日誰か之を折く、羅ありて之を張れども、鳥は高く飛びて馴れない。吾が友は我に此の雁を贈り来る。いかなる珍ぞ、やがて膳に上るのである。

【餘論】 此の詩に見るも、荆の俗は好みて雁を食ふものの如く、第六首の食雁君應厭の句と合せて觀るべきであらう。紀昀は、此の詩を意格特高と評して居る。

柳門京國道驅馬及春陽。

柳門は京國の道、馬を驅りて春陽に及ぶ。

野火燒枯草。東風動綠芒。

野火枯草を焼き、東風綠芒を動かす。

北行連許鄧。南去極衡湘。

北行許鄧に連り、南去衡湘を極む。

楚境橫天下。懷王信弱王。

楚境は天下に横はるに、懷王は信に弱王。

【字解】〔一〕柳門 荆州の修門、宋玉の招魂篇に、魂兮歸來入修門。王逸の註にいふ、鄖城門と。荊州記に、鄖南門二門、一名龍門、一名修門。唐の吳融留獻荆南成相公詩に、行行柳門路。荊州別に柳門あるものと見ゆ。〔二〕野火燒枯草 白樂天が春草の詩に、野火燒不盡、春風吹又生。〔三〕連許鄧 許州は、清の時、直隸州として河南省に屬せしが、民國之を改めて許昌縣となす。鄧州は民國になつてから、縣と改め、河南汝陽道に屬す。〔四〕極衡湘 范仲淹の岳陽樓記に、北通巫峽、南極瀟湘。衡州、清の時は湖南省に屬せしが、民國之を廢す。今の衡陽縣は其の舊治。湘州、州治は湘に臨む、即ち今の湖南長沙縣。〔五〕弱王 史記に、趙王自上食、禮甚卑、高祖箕踞晉、貢高。趙午乃怒曰、吾王辱王也。註にいふ、辱、弱也と。

【詩意】楚城の南門を出で、大道を歩し、馬を驅つて春の野に及ぶ。野火は枯れ草を焼き、春風は綠の草を靡かせて居る。北行すると、行く先は許州、鄧州。許州は、河南道に屬し、西南、汝州に至る一百八十里、鄧州は、山南東道に屬し、南、襄州に至る一百八十里、北、汝州に至る四百九十里。又南に去つて衡州湘州を極める。思へば楚王の領土は天下に横はつて大きいのに、懷王は威を振ふことが出来なかつたのは、信に弱王であると言はなければならない。

【餘論】此詩の結句は、史記の貫高・趙午乃怒曰、吾王辱王也の語に本いて居る。紀昀は、結句寫り負之意、此猶少年初出、意氣方盛之時也、黃州以後、無復此種議論矣と評して居る。

渚宮

渚宮

渚宮寂寞依古郢。
楚地茫茫非故基。

渚宮は寂寞として古郢に依る、
楚地は茫茫として故基にあらず。

【字解】〔一〕渚宮 春秋楚の別

宮、今湖北江陵縣城内西北隅に在る。左傳に、楚子西沿漢泝江將入郢、王在渚宮下見之。孔穎達

〔二〕王臺閣已幽莽。
何況遠間縱橫時。
楚王獵罷擊靈鼓。
猛士操舟張水嬉。
釣魚不復數魚鼈。
大鼎千石烹蛟螭。
當時郢人架宮殿。
意思絕妙般與倕。
飛樓百尺照湖水。
臨風揚揚意自得。
長使宋玉作楚辭。
秦兵西來取鐘鑼。
故宮禾黍秋離離。

王臺閣已に幽莽、
何ぞ況んや遠く縱横の時を問はん。
楚王獵罷んで靈鼓を擊ち、
猛士舟を操りて水嬉を張る。
釣魚復魚鼈を數へず、
大鼎千石蛟螭を烹る。
當時郢人宮殿を架し、
意思絶妙般と倕と。
飛樓百尺湖水を照らす、
上には燕趙の千蛾眉あり。
風に臨んで揚揚として意自得す、
長へに宋玉をして楚辭を作らしむ。
秦の兵西より來つて鐘鑼を取り、
故宮禾黍秋離離。

の疏にいふ、渚宮當鄖都之南、蓋楚成王所建。太平寰宇記に襄王所建とあるは誤。〔二〕茫茫 沈約の詩に、九服茫茫。〔三〕二王臺閣 湘東王と高氏、渚宮舊事に、湘東王釋於子城中、穿池山、長數百丈云云。太平寰宇記に、謂之湘東苑。名亭、亦名渚宮。〔四〕幽莽 蔡林伐山に、莽は則幽の地、莽は草莽の地、其の兩幽を治めず、其の草莽を芟らず云云。莊子の則陽に、爲政焉勿

幽莽。〔五〕縱橫時 六國時代の楚相如子虛の賦に、楚亦有平原廣澤、游獵之地、燒樂若此者乎、楚王之獵何與寡人云云。又、擊靈鼓一起烽燧。〔七〕水嬉 張良の七略に、乘鳬舟分爲水嬉。〔八〕大鼎千石 司馬相如の上林賦に、鐘千石之

千年壯觀不可復。
今之存者蓋已卑。
池空野迥樓閣小。
惟有深竹藏狐狸。
臺中絳帳誰復見。
臺下野水浮清漪。
綠窗朱戶春晝閉。
想見深屋彈朱絲。

腐儒亦解愛聲色。
何用白首談孔姬。
沙泉半涸草堂在。
破牕無紙風颶颶。
陳公蹤蹟最未遠。
七瑞寥落今何之。

千年壯觀復すべからず。
今の存するもの蓋し已に卑し。
池空しく野迥かに樓閣小なり。
惟深竹の狐狸を藏するあり。
臺中の絳帳は誰か復見ん。
臺下の野水清漪を浮ぶ。
綠窗朱戶春晝も閉づ。
想ひ見る深屋朱絲を彈せしを。
腐儒も亦解く聲色を愛す。
何ぞ用ひん白首孔姬を談するを。
沙泉半は涸れて草堂あり。
破牕紙なく風颶颶。
陳公の蹤蹟は最も未だ遠からず。
七瑞寥落今何くに之く。

楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺。風に、彼委離離、彼稷之苗とある。周の大夫が行役して故の宗廟宮室を過ぐれば盡く禾黍となる。乃ち此詩を作る。【九】 深竹藏狐
狸。元禪の連昌宮詞に、連昌宮中滿宮竹。又、夜夜狐狸上臘屋。【一〇】 絳帳。赤いとばり、後漢書、馬融傳に、常坐高堂、施絳帳、前授生徒、後列女樂。荊州記に、府城西南有馬融絲帳臺、與諸宮不遙。名勝志に、江陵城西鼓角樓、即馬融教授弟子處。【一一】 緑窗朱戶。唐崔顥の詩に、綠窗明月在。梁簡文帝の詩に、玲瓏朱戶開。【一二】 孔姬。孔子と周公。【十三】 風颶。風の颶と吹く貌。【十四】 陳公蹤蹟。宋史に據るに、宋の真宗、天禧中陳堯咨以右正言知制誥出守荆南。【十五】 七瑞寥落。南史に據るに、梁元帝、諱驛字世誠、小字七瑞、武帝第七子也。十三年封湘東王。寥落は靜にして空し。謝脁の詩に、魄星正寥落。

楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺。風に、彼委離離、彼稷之苗とある。周の大夫が行役して故の宗廟宮室を過ぐれば盡く禾黍となる。乃ち此詩を作る。【九】 深竹藏狐
狸。元禪の連昌宮詞に、連昌宮中滿宮竹。又、夜夜狐狸上臘屋。【一〇】 絳帳。赤いとばり、後漢書、馬融傳に、常坐高堂、施絳帳、前授生徒、後列女樂。荊州記に、府城西南有馬融絲帳臺、與諸宮不遙。名勝志に、江陵城西鼓角樓、即馬融教授弟子處。【一一】 緑窗朱戶。唐崔顥の詩に、綠窗明月在。梁簡文帝の詩に、玲瓏朱戶開。【一二】 孔姬。孔子と周公。【十三】 風颶。風の颶と吹く貌。【十四】 陳公蹤蹟。宋史に據るに、宋の真宗、天禧中陳堯咨以右正言知制誥出守荆南。【十五】 七瑞寥落。南史に據るに、梁元帝、諱驛字世誠、小字七瑞、武帝第七子也。十三年封湘東王。寥落は靜にして空し。謝脁の詩に、魄星正寥落。

百年人事知幾變。
直恐荒廢成空陂。
誰能爲我訪遺蹟。
草間應有湘東碑。

百年人事知る幾か變する。
直恐る荒廢空陂と成るを。
誰か能く我が爲に遺蹟を訪はん、
草間應に湘東の碑あるべし。

【題義】子由の同じく諸宮を賦した詩に、楚塞多秋木、荆王有故宮。又いふ、湘東晉宗子、高氏楚元戎、鑿沼長千尺、開レ亭費萬工。と。湘東王驛は、子城中に池山を穿構し、上に通波閣がある。水に跨つて之を爲る。南に芙蓉堂、東に禊飲堂、西に鄉射堂、堂に竹壠（射場）を置く。東南に連理堂、堂北に映月亭、修竹堂、臨水齋がある。齋の前は高山、山に石洞があつて苑中に潛行する。山上に陽雲樓、北に臨風亭、明月樓がある。竹林があり、花房がある。花草が繁くなつても竹林彌盛と傳へて居る。諸宮の勝概が想像される。

【詩意】名高い楚王の別宮も、今は寂寥として古の郢の地に存して居る。楚地は荒茫として、昔の楚ではない。湘東王釋と高氏との臺閣は今は修理もせず芟勦しない。また六國時代の合縱連横などの話を問はず。憶ふ昔、楚王の遊獵に、水嬉に、靈鼓を擊ち鳧舟に乗り、王者の威勢を恣まつにしたのである。當時、郢人の宮殿を建築する、巧を極めたもので、墨子に見ゆる公輸般や、舜典に載つて居る共工垂も斯くやと思はれる。高樓は湖水に臨み、樓上には燕や趙の美人を多數に侍らせ、意氣揚揚として此世をば我が世と自得し、屈原の弟子として名高い宋玉をして高唐の賦や九辨などの楚辭を作らしめたのである。榮枯盛衰は人事の常で、秦の兵が西から來つて、楚の宮殿を掠めた。史記の秦始皇本紀に據ると、秦王は諸侯を破る毎に、其の宮室に微つて咸陽の都に土木を起し、戰爭で得た所の諸侯の美人や鐘鼓をば之に充たしたさうである。楚の宗廟宮室は、盡く禾黍の荒野となつた。昔の壯觀は復望まれない。今の故宮は、地卑く、池空しく、野ち廻かに樓閣も小である。ただ竹叢に狐狸の潜めるのみ。臺中の絳帳など今は見ることも出來ず、臺下の野水に清らかな漣を浮べて居る。綠の窗、朱塗の戸、春來れど晝も開かない。昔は深屋盛に音樂を奏で、後の世にも馬融などの學者は、高堂に坐して絳帳を施し、前には生徒に授け、後では女樂を列ねたといふ話がある。聲色を愛する學者に孔子と周公との道を談する要もなからう。さて、沙泉が半ば涸れて草堂のみあり、破窓も紙なく、風の颶颶たるを覺える。陳堯咨は、嘗て荆南に太守となつて來たが、其の跡は此處からは遠くない。梁の元帝の小字を七瑞と言つたが、湘東王に封せられたことは、歴史に名高いが、今は其の跡も空し

い。百年の人事は幾たびか變するものであるから、此の故宮も、更に荒廢して空陂となるかも知れない。もし故宮の遺蹟を尋ねるといふことになると、湘東の碑が唯一の材料となるであらう。

荆門惠泉

荆門の惠泉

泉源從高來走下隨石脈。
紛紛白沫亂隱隱蒼崖坼。
縈回成曲沼清澈見肝膈。
澆瀉爲長溪奔駛蕩蛙蟬。
初開不容椀漸去已如帛。
傳聞此山中神物嬾遭謫。
不能致雷雨澆吐寒碧。
遂令山前人千古灌稻麥。

泉源高きより來り、走り下りて石脈に隨ふ。
紛紛として白沫亂れ、隱隱として蒼崖坼く。
縈回して曲沼を成し、清澈肝膈を見る。
澆瀉長溪を爲し、奔駛して蛙蟬を蕩す。
初開いて椀を容れず、漸く去つて已に帛の如し。
傳へ聞く此の山中、神物嬾くして謫に遭ひ、
雷雨を致すこと能はず、澆吐寒碧を吐き、
遂に山前の人をして、千古稻麥に灌がしむ。

【字解】
 〔一〕 荆門 漢の舊縣、荊襄州の要津。清、直隸州となし、湖北に屬し、民、縣に改め、湖北襄陽道に屬す。荊門の西に
 落・惠の二泉がある。二泉は荊門山より發す、東坡自註にいふ、荊門山在宜都、大江之南、與虎山對、と。宜都は縣名、虎山は虎牙
 山。
 〔二〕 石脈 温庭筠の詩に、孔賀澆潤通石脈。〔三〕 隘隙 司馬相如の上林賦に、沈沈隘隙。沈沈は深き貌。隘隙は狹なる貌。

【折】
折、折り、われさける。【五】
桑向、まとひめぐる、王勃の滕王閣序に、窮ニ島嶼之桑向。【六】
清澈見ニ肝膽、清く澄む、澈
は澄の意。屬はむねのうち。【七】
沫濁、小水が大水に入るを沫といふ。孟東野の秋雨聯句に、沫濁殊未終。【八】
奔駿蕩ニ蛙蠅、玉驚に駆、疾也。馬が疾く走ること。蟻も駆。【九】
疲情ニ行雨、天罰當死、輒道力可レ脱、乃化ニ小蛇、延緣入ニ袖中、夜風號霆掣、山岳爲搖、而師危坐不レ傾、遂レ且蛇飛去。【十】
灑灑月が水に映じて光る。何遜の望ニ新月ニ詩に、的的與ニ沙靜、灑灑逐波輕。

【題義】
李德裕、詩を惠泉の上に題して、茲泉由ニ太潔、終不レ蓄ニ纖鱗、到底清何益、涵ニ虛只自貧、と。
今に至るまで碑版が存して居る。碑版は碑誌の類である。荆門山の二泉北を蒙といひ、南を惠といふ。
蒙泉は常に寒く、惠泉は常に温、此詩は南泉を詠じたのである。

【詩意】
湧き出る泉に色色ある。濫泉は正出し、沃泉は縣出し、汎泉は側出する。荆門山の惠泉は、
高きより走り下つて、濺濺として石脈に通じ、水玉を飛ばし、崖を坼き破り、まとひめぐりて曲沼と
なる。清い流れが長い谷川をつくつて奔駿する。蛙も蟻も流されてしまふ。其の泉源は、鷺を濫ぶべ
く、江津に至るに及んでは、舟を舫べ、風を避けなければ涉れない。聞けば山中に棲める神龍が行雨
を情つたので、天罰を得、雷雨を起すことが出来なくなつた。そこで惠泉が月に映じて寒碧を吐き、
山前の住民をして千古稻麥に灌がしめることが出来たのである。

次韻答荊門張都官維見和惠泉詩

次韻して荊門の張都官維が惠泉の詩に和せられしに答ふ

楚人少井飲地氣常不洩。
蓄之爲惠泉、全若有所折。
泉源本無情、豈問濁與澈。
貪愚彼二水、終古恥莫雪。
只應所處然、遂使語異別。
泉傍地平衍、泉上山嶺峴。
君子慎所居、此義安可闕。
古人貴言贈、敢用況高節。
不爲冬霜乾、肯畏夏日烈。
泠泠但不已、海遠要當徹。

楚人井飲を少く、地氣常に洩れず。
之を蓄ふるを惠泉となす、全として折つ所あるが若し。
泉源は本情なし、豈濁と澈とを問はんや。
貪愚彼の二木、終古恥雪ぐなし。
只應に處る所然るべし、遂に異別を語らしむ。
泉傍は地平衍、泉上は山嶺峴。
君子は居る所を慎む、此義安んぞ闕くべけんや。
古人は言贈を貴ぶ、敢て高節を況ふるを用ひんや。
冬霜の爲に乾かず、肯て夏日の烈を畏れんや。
泠泠但已まされば、海遠きも要當に徹すべし。

【字解】
【一】
張維、續通鑑長編に據るに、熙寧十年正月に、前原州臨邑令張維除名送ニ廣州副管の事がある。【二】
地氣、陰
氣ないふ、禮記に、孟冬之月、天氣上騰、地氣下降。【三】
坐、聚るなり、竝ぶなり。前漢書の溝洫志に、河水溢溢。【四】
食愚彼二
水、食泉は、廣州南海縣石門口に在り、即ち吳隱之の南んで詩を試した處。荊州記に、橫溪水甚深、冬夏不乾、俗謂之食泉。柳宗元
愚溪序に、灌水之陽有溪焉、東流入於瀟水、余以愚觸罪謫瀟水上、愛是溪故更之爲愚溪。【五】
平衍、地が下く平か。【六】
山の高い貌、張平子の西京賦に、託ニ喬基於山岡、直墮覽以高居。韓は通じて覽に作る。【七】
貴言贈、史記孔子世家に、適見老子辭去、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言、吾不能富貴、竊ニ仁人之號、送子以言。王勃の滕王閣

序に、臨別贈言。【乙】況高節、況は比况の意、史記魯仲連傳に、好持高節。【丙】冷泠、水の清き聲、陸士衡招隱の詩に、山溜何泠泠。

【題義】昔、南北朝の時代、范柏年が南朝宋の明帝に見えたとき、帝は言、廣州の貪泉に及び、卿の州にも亦此泉があるかと問はれた。柏年は答へていふ、梁州には、惟文川、武鄉、廉泉、讓水あるのみと。帝曰く、卿の宅は何處、曰く臣の居る所は、廉讓の間と。貪泉の二字は此詩を離れない。

【詩意】楚人は井水に乏しい、地氣が水を生じないからである。それで飲み水の湧き出るは、まこととに惠泉である。併し、泉が溢れて後には清めるもあり、濁れるもありて、さまざまに分れる。泉の源は、本情がないから、濁と澈とを問はない。ただ貪泉の名を得、愚泉の名を得ば、終に恥を雪ぐの日はないであらう。境遇の然らしめるに由る。泉の傍は、土地が低く平かである。泉の上は、山が高くて登れない。すべて君子は居處を慎しむ。此事を忘れてはならない。古人は言贈を重んじ、別に臨むときはも送る辭がある。必しも高節を言ふ譯ではないが、冬霜の爲に殊更に乾くことをしない。夏日の烈しいをも別に畏れも惡みもしない。ただ水の清い聲して、進みて已まなければ、海遠きも、遂には之に放るであらう。

潤陽早發

潤陽早發

富貴本无定世人自榮枯。

富貴本定るなし、世人自ら榮枯。

囂囂好名心嗟我豈獨無。
不能便退縮但使進少徐。
我行念西國已分田園蕪。
南來竟何事碌碌隨商車。
自進苟無補乃是嬾且愚。
人生重意氣出處夫豈徒。
永懷江陽叟種蘿春滿湖。

囂囂名を好む心嗟我豈獨無からんや。
便ち退縮する能はず、但進む少しく徐ならしむ。
我が行西國を念ふ、已に分とす田園の蕪するを。
南來竟に何事ぞ、碌碌として商車に隨ふ。
自ら進んで苟も補ひなければ、乃ち是れ嬾にして且つ愚。
人生意氣を重んず、出處夫れ豈徒ならんや。

【字解】【乙】潤陽、今之蘆縣（湖北襄陽道に屬す）潤陽縣。利河は土人、潤口といひ、縣を距る、止六十清里。【丙】自榮枯、班固の答賓戲に、朝爲榮華、夕爲顚頽。【丁】荳蕡、かまびすしき意、莊子に、天下何其荳蕡也。【戊】田園蕪、陶潛歸去辭に、田園將不歸。【己】商車、漢武帝紀、元光六年（皇紀五十三年、西暦紀元前一二九年）冬、初算商車。註にいふ、始稅商賈車船、合出算。【庚】江陽、眉州を指す、名勝志に、晉曾置江陽郡於眉州。【辛】蘿、蘿の根、荷は芙蕖、其の根は蘿、其の莖は蕘、其の華は菡萏、其の實は蓮である。

あつてはならない。永く故山の先輩を懷うて已まないが、今日此頃は、蓮根を種ゑて、湖に満ちて居るであらう。

【餘論】此詩は、感懷を述べたもので、涙陽を言つたのではない。紀昀いふ、途中感懷適在涙陽、遂以涙陽一命篇、不爲涙陽作也。故不及山川地理と。樂城集涙陽早發の詩に、春氣入楚澤、原上草猶枯、北風吹栗林、梅蕊颯已無、我行亦何事、驅馬無疾徐、楚人信稀少、田畝任棲蕪、空有道路人、擾擾不留車、悲傷彼何賴、歎息此亦愚、我今何爲爾、豈亦愚者徒、行行楚山曉、霜露滿陂湖。

夜行觀星

夜行星を觀る

天高夜氣嚴。列星森就位。
大星光相射。小星闊如沸。
天人不相干。嗟彼本何事。
世俗強指摘。一一立名字。
南箕與北斗。乃是家人器。
天亦豈有之。無乃遂自謂。

天高夜氣嚴に、列星森として位に就く。
大星は光相射る、小星は闊として沸くが如し。
天人は相干さず、嗟彼は本何事。
世俗強ひて指摘し、一一名字を立つ。
南箕と北斗と、乃ち是れ家人の器。
天亦豈之あらんや、乃ち遂に自ら謂ふなからんや。
追觀知何如、遠想偶有似。
追觀知る何如、遠想偶似たるあり。

茫茫不可曉。使我長歎喟。

茫茫として曉るべからず、我をして長く歎喟せしむ。

【字解】〔一〕列星森就位。列星は列宿に同じ、宿は星宿の意。董仲舒の春秋繁露に、天不則列星亂其行。〔二〕指摘。摘、一に通に作る、列子賀帝篇に、無傷痛指摘。〔三〕南箕與北斗。詩に維南有箕、不可以簸揚、維北有斗、不可以挹酒漿。〔四〕家人器。漢書律林傳に、韓固曰、此家人言耳。〔五〕自謂。箕斗の類、皆、形の似たるよりして之ないふ、星象の本に、此名があるのでない。〔六〕追観。追は近の意。

【題義】星を觀ての感想を述べたもの、晉書に、凡五星盈縮失位、其精降於地爲人、歲星降爲貴臣云々。人間の吉凶は、天象に隨るものとして居るが、茫茫曉ることが出來ないといふにある。〔詩意〕天は澄みわたつて高く見え、夜氣も嚴に、列星は、其の位に就いて居る。大星は光が強く、小星は沸くやうである。天人はもと相干さないのを、世人が強ひて名字を付ける。詩に南箕といひ、北斗といふも、一家の私言であつて、星象の本義ではない。近く觀察せば果して如何、思ひ半に過ぐるであらう。ただ遠く想像して偶々類似のところを見るのみである。宇宙の事は茫茫として曉ることが出來ないから、我をして長歎せしめるのである。

漢水

漢水

捨棹忽逾月。沙塵困遠行。
襄陽逢漢水。偶似蜀江清。

棹を捨てて忽ち月を逾え、沙塵遠行を困しむ。
襄陽漢水に逢ふ、偶蜀江の清きに似たり。

蜀江固浩蕩，中有蛟與鯨。

蜀江は固より浩蕩、中に蛟と鯨とあり。

漢水亦云廣，欲涉安敢輕。

漢水も亦廣といふ、涉らんと欲するも安んぞ敢て輕しく

文王化南國，遊女儼如卿。

文王南國を化す、遊女儼として卿の如し。

洲中浣紗子，環珮鏘鏘鳴。

洲中の浣紗子、環珮鏘鏘として鳴る。

古風隨世變，寒水空泠泠。

古風は世に隨つて變じ、寒水は空しく泠泠。

過之不敢慢，佇立整冠纓。

之を過ぎて敢て慢せず、佇立して冠纓を整ふ。

【字解】

【一】漢水 二源あり、出_三聚昌秦州之嶓冢_一至_二四川_一由_二重慶江津縣_一入江、これ西漢水。出_三漢中府沔縣之嶓冢_一至_二漢陽府_一入_二江者、これ東漢水。

【二】襄陽 太平寰宇記に、山南東道襄州本楚邑、漢水帶_三其西、襄山亘_二其南、爲_一楚之北津、建安十三年始置_三襄陽郡_一以_二地在_一襄山之陽_一爲_二名。

【三】遊女儼如卿 詩、固風周南に、南有_三蕎本_一不可_二休息、漢有_三游女_一不可_二求思。村の

時、淫風が天下に偏く、たゞ江漢の域、先づ文王の教化を受けたのである。

【四】浣紗溪 荆州府夷陵州の西北に在る。秋冬の月、水色淨麗、若_三浣_一紗然。

（略）

史記に、環珮玉聲璆然。麝麝は金石の聲、詩に八聲麝麝。

【五】佇立 久しく立つ、詩、郊風に、瞻望不及、佇立以泣。

【題義】

東漢水は、漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽六府の境を貫流して江に入る大川である。

陝西の嶓冢山に發し、初の名は漾水、東南して沔水となり、沮水を受け、東流して襄水を受け、始て漢水となる。

東南して白河を經、又、東して湖北に入り、渚水を受け、均水を受け、又、東南して、宜城・鍾祥・京山を經て、潛江に至る。東南漢陽より大江に入る。

【詩意】

舟を捨ててから月餘、長い行程は、絶えず沙塵に困められた。襄陽で漢水に逢うたが、蜀江、

の清きに似て居る。蜀江は固より浩蕩で、蛟鯨も潜む。漢水も一名廣といひ、廣廣として居る、軽輕しくは涉らない。昔、周の文王の教化が江漢の域に行はれて、淫風の世にも禮を犯すことを思はなかつたことは、周南漢廣の詩に歌はれて居る。遊女も儼として居り、洲中の浣紗子が佩びた玉も麝麝と音がする氣高い所がある。古風は世と變じ、寒水も今は空しく泠泠たるのみ、佇し之を過ぎて敢て慢らない。たたずみて冠纓を整へた。

襄陽古樂府 三首

樂府は、前漢武帝の時、之を立て、文人を集めて詩賦歌謡を作らしめたのに始まる。哀帝の時に至つて罷んだが、後世、其の調に倣つて作る詩を樂府といふ。樂府は魏の頃より其の傳を失つた。文人の擬作するもの、多く題と左ふのは、但、聲調の譜を取つて、詞義の合ふのを必としないからである。紀昀いふ、樂府音節失傳、不過_レ摹_ニ其字句。

野鷹來

野鷹來

野鷹來萬山下。
野鷹來、萬山の下に。
荒山無食鷹苦飢。
荒山食なくして鷹飢に苦しむ。

【字解】

【一】野鷹來 沔水の南に層臺あり、景升臺といふ。荊州の

收、劉表が襄陽を治めたとき築いたもの。景升は劉表の字である。表は

飛來爲爾繫綵絲。
北原有兔老且白。
年年養子秋食菽。
我欲擊之不可得。
年深兔老鷹力弱。
野鷹來。

飛び來らば爾の爲に綵絲を繫がん。
北原に兎あり老いて且つ白し。
年年子を養つて秋は菽を食ふ。
我之を擊たんと欲するも得べからず。
年深く兎老いて鷹の力は弱し。
野鷹來れ、

城東有臺高崔巍。
臺中公子著皮袖。
東望萬里心悠哉。
心悠哉鷹何在。
嗟爾公子歸無勞。
使鷹可呼亦凡曹。
天陰月黑狐夜嗥。

城東に臺あり高うして崔巍。
臺中の公子皮袖を著け、
東望万里、心悠なるかな。
心悠なるかな、鷹何くにか在る。
嗟爾公子歸れ勞する無かれ。
鷹をして呼ぶべからしめば亦凡曹な
天陰り月黒く狐夜嗥ゆ。

襄陽記に劉表墓在城東。又、東二十里有呼鷹臺。【一】崔巍。山が高くしてけはし、楚辭に、高山崔巍兮。一本に、巍を嵬に作る。

【字解】〔一〕 蔡散 ものさびし
意司馬相如の上林子賦の賦に、
千里金城兩稚子 漢書張良傳に、金

【詩意】心悠哉、思ふ心が長くして書きない意。詩の周南に、悠哉悠哉、輶轡反側。【二】嗥。說文に咆也とある。猛獸がほえること。
【題義】劉表は呼鷹臺に登つて、野鷹來の曲を歌ふ。其の聲韻は魏の孟達が上堵吟に似ると言はれて居る。孟達は初、劉璋に事へたが、璋、達をして兵を將めて劉備を迎へしめたので、因て江陵に屯した。劉備は達を宜都の太守としたが、後、關羽を救はなかつたから、罪されることを懼れ、衆を率みて魏に降る。散騎常侍を拜し、新城の太守を領した。諸葛亮、魏を伐ち、達を誘はうとし、數書を以て招いたのを魏人に疑はれ、遂に反いてやがて敗滅した。

【詩意】昔、鄭交甫が江妃二女に遇つたといふ傳説のある萬山、其の萬山の下に、野の鷹がやつて來た。食物も得いで餓に苦しむ。鷹はいふ、飛び來つて結局、爾の爲に羈がれるのみであると。又、北の原に兎がある、着いて白い。抱朴子の言によると、年を経た兎らしい。年年子を育て秋菽を食ふ。私は之を撃たうとしても撃てない。兎は古い鷹の力は弱い。城東臺あり東望萬里、鷹を呼ぶ、鷹は何處に居る。心悠なるかな。ああ臺中の公子、爾歸り去れ、もし鷹を呼び、呼んで来るやうでは凡草である。天が陰り月も黒く、狐の咆える聲も聞えるから早く歸られよ。

上堵吟

上堵吟

臺上有客吟秋風。
悲聲蕭散飄入空。

臺上有客あり秋風に吟す、
悲聲蕭散飄つて空に入る。

臺邊遊女來竊聽。
欲學聲同意不同。

君悲竟何事。

千里金城兩稚子。

白馬爲塞鳳爲關。

山川無人空且閒。

我悲亦何苦。

河水冬更深。

鯿魚冷難捕。

悠悠江上聽歌人。

不知我意徒悲辛。

悠悠江上聽歌人。

不知我意徒悲辛。

襄陽樂

襄陽樂

使君未來襄陽愁。

使君未來襄陽愁。

提戈入市襄裝。

提戈入市襄裝。

自從裝南渡河。

自從裝南渡河。

襄陽無事春遊多。

襄陽無事春遊多。

古今體詩 襄陽古樂府三首・上堵吟・襄陽樂

一一三

【字解】 〔一〕 使君 天子の使者
の尊稱なれど、漢の世、稱太守曰
府君、刺史曰使君。〔二〕 襄陽
匈奴の毛縫服を著る、漢司馬遷の傳
に、旃裘之君長咸震怖、襄陽は謂號類
齒には長に作る。〔三〕 襄陽無事云
云 宋書の劉道產傳に、自謂襄陽

め、劉封を遣はし沔水より達と會して上庸を攻めしむ。太守申耽が郡を擧げて降つたので、耽を上庸の太守となした。又、耽の弟儀も西城の太守となつて漢中の地を定めた。上庸・西城は、皆今の荊州の地である。章武元年（皇紀八八年）孟達は、魏に降る。新城の太守となり、白馬塞に登つて歎じたのが上堵の吟である。魏は房陵、上庸・西城の三郡を以て新城となした。

【詩意】 孟達は新城の太守となつて、白馬塞上秋風に吟じたが、其の悲しき音は、物寂しく空に響いた。塞邊の遊女が傭に之を學んだが、聲は同じでも、歌ふ所以は異なる。孟達の悲んだ所は、何事ぞ、それは、劉封や申耽は白馬山を城塞となし、鳳林を開門となして、金城千里に據つたが、遂に其の守を失つて、山川に人無うして空しく閒になつたからである。孟達は更に何をか苦しむ。江水は冬更深く、鯿魚も冷かで捕へ難いからである。悠悠たる江上に歌を聽く人、我が眞意を解しないで徒に悲辛して居る。

【題註】 塚陽縣に堵水あり、傍に白馬塞がある。孟達は新城の守となつて之に登り嘆じていふ、劉封、申耽は、金城千里に據つても之を失つたと、遂に上堵の吟をなしたが、其の音韻が哀切で、人心をして惻しめる。今に尚ほ此の聲を傳へて居る。蜀の劉備は、孟達を遣はし房陵を攻めて之を下さしに產す。

鯿魚冷かにして捕へ難し。
悠悠たる江上歌を聽く人。

我意を知らずして徒に悲辛す。

臺邊の遊女來つて病に聽き、
學ばんと欲して聲同じきも意同じか
君の悲は竟に何事ぞ、
千里の金城兩稚子。
白馬を塞と爲し鳳を開と爲す、
山川人無うして空しく且つ聞なり。
我悲は亦何をか苦しむ、
河水冬更に深く、
鯿魚冷かにして捕へ難し。

城千里天府之國。孟達、新城の守となり、白馬塞に登り嘆じて曰く、劉封、申耽、金城千里に據りて、更に之を失ふと、遂に上堵吟をなす。〔三〕 襄陽記に、鳳林開在峴山衡州。〔四〕 謂 古は之を勸といふ。襄陽に產す。

襄陽春遊樂何許。

襄陽の春遊は何れの許にか樂しむ、

峴山之陽漢江浦。

峴山の陽漢江の浦。

使君朱旆來翻翻。

使君の朱旆來りて翻翻、

人道使君似羊杜。

人は道ふ使君は羊杜に似たりと。

道邊逢人問洛陽。

道邊人に逢うて洛陽を問ふに、

中原苦戰春田荒。

中原は戰に苦しんで春田荒ると。

北人聞道襄陽樂。

北人襄陽の樂を道ふを聞かば、

目送征鴻應斷腸。

征鴻を目送して應に斷腸すべし。

【題義】劉道產は、襄陽の太守となつて、善く職に臨み、政績が著はれ、蠻夷の前後に化を受けなかつたものも、皆、歸順し、百姓が業を樂しむ。此に由り襄陽樂歌がある。襄陽樂歌があるやうになつたのは、實に道產から始まつた。

春游は、峴山の南漢江の浦。使君の赤い旗も、翻つて居る。人はいふ、劉使君は昔の羊祜や杜預であると、羊祜も杜預も、此の襄陽を鎮めて德政があつた。翻つて都の洛陽の事を人に問ふと、今は戰場に苦しんで、春田も荒廢したといふことである。もし我が襄陽樂の歌を聞いたなら、定めし征く雁を目送して、腸を斬つの念があるであらう。

峴山

峴山

遠客來自南游塵昏峴首。

遠客南より來り、游塵峴首に昏し。

過關無百步曠蕩吞楚藪。

關を過ぐれば百歩なし、曠蕩として楚藪を呑む。

登高忽惆悵千載意有偶。

高に登り忽ち惆悵、千載意偶するあり。

所憂誰復知嗟我生苦後。

憂ふる所誰か復知らん、嗟我生きて後を苦しむ。

團團山上檜歲歲閱榆柳。

團團たる山上の檜、歲歲榆柳を閱す。

大才固已殊安得同永久。

大才固より已に殊なり、安んぞ同じく永久なるを得む。

可憐山前客倏忽星過雷。

憐むべし山前の客、倏忽として星は雷を過ぐ。

賢愚未及分來者當自剖。

賢愚未だ分つに及ばず、來者當に自ら剖るべし。

【字解】〔一〕峴山 襄陽府城の南に在る。襄陽記に、紫蓋山、萬山、峴山、謂之三峴。〔二〕峴首 宋の時に、紫蓋山を改め

境接凶寇、威懷兼舉。〔三〕朱旆 許渾の詩に、朱旆聯闊曉樹中。〔四〕羊杜 羊祜と杜預。皆、襄陽を鎮めて、德政があつた。晉書に、羊祜字叔子、泰山南城人。杜預字元凱、京兆杜陵人。〔六〕目送征鴻 晉書に、羊祜字送歸鴻難。〔七〕斷腸 基しく心を痛める。魏文帝の詩に、念君客遊思斷腸。

て中観となし、観山を以て観首とした。【三】楚臺 楚國の臺の意、東坡の遊武昌寒溪西山寺詩にも、離離見吳宮、莽莽真楚臺。

【四】惆悵 かなしみうらむ、楚辭の九辨に、惆悵而自悲。【五】闌閣山上檜 名勝志に、晉柏在観山下、相傳羊叔子手植、有碑題曰晋柏闌閣、韓退之が靈池廟の碑に、桂樹闌閣兮白石青苔。【六】倏忽 疾速にして捕捉すべからざる形容。【七】星過雷 詩に三星在雲。註にいふ、如心星之光耀見於魚笱之中、其去須臾不可久也と。

【題義】晉書羊祜の傳に、祜樂山水、毎風景必造観上、嘗慨然歎息、顧謂從事中郎鄒湛等曰、自有宇宙、便有此山、由來賢達勝士登此遠望、如我與卿者多矣、皆湮滅無聞、使三人悲傷、如百歲後有知、魂魄猶應登此也、湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳、至若湛輩、乃當如公言耳、及祜卒、襄陽百姓、於峴山祜平生遊息之所、建碑立廟、歲時饗祭焉、望其碑者、莫不流涕、とある。峴山碑を墮淚碑といふのは、此の故事による。

【詩意】遠く南から來て見ると峴山は游塵に蔽はれて彷彿、闊を過ぎると、百歩もない。ひろびろと楚國の淵藪を呑んで居る。山の高きを窮めて遠くを望むと、忽ち惆悵する、千里眺望の感は、昔も今も此の後も異なるであらう。我が心中に憂へる所は、人は知らない。私は後を憂へる。皆人は團圓たる山上の檜を眺め、年年榆柳の青青たるを閲するであらうが、我が憂とする所は憂へない。人には人に才が異なる、同じく永久なることが出来ない。憐むべし山前の客、登臨の快も、よく幾時ぞ、忽ち日月は過ぎて行く、心星の光が一寸魚梁の中に見はれたやうなもので、瞬く間に消えて行く。賢も不肖も今は別はないが、他日自ら分れることであらう。(賢愚の句は、暗に羊祜傳中の鄒湛等と峴山に登つて慨歎した語を用ひて居る。)

【餘論】紀昀は此詩の結二句を評して、十字深警といつた。

萬山

萬山

西行度連山、北出臨漢水。

西行して連山を度り、北出して漢水に臨む。

漢水蹙成潭、旋轉山之趾。

漢水は蹙りて潭を成し、山の趾に旋轉す。

禪房久已壞、古甃含清泚。

禪房は久しく已に壞れ、古甃清泚を含む。

下有仲宣欄、綆刻深容指。

下に仲宣の欄あり、綆刻は深くして指を容る。

回頭望西北、隱龜背起。

頭を回して西北を望めば、隱隱として龜背起る。

傳云古隆中、萬樹桑柘美。

傳へいふ古の隆中と、萬樹桑柘美なり。

月炯轉山曲、山上見洲尾。

月炯かにして山曲に轉ず、山上洲尾を見る。

綠水帶平沙、盤盤如抱珥。

綠水平沙を帶び、盤盤として抱珥の如し。

山川近且秀、不到嬾成恥。

之を問ふも安んじ能く詳かにせん、地に畫して簪筆を費す。

【字解】【一】萬山 湖北襄陽縣の西北に在ることは前にも述べた。元和郡縣志に、萬山一名漢皋山、在襄陽縣西十一里。太平聖

字記に、萬山北隔沔水。【二】潭 潭ないふ、孟浩然が萬山潭の詩自註にいふ、沈碑潭と。【三】旋轉山之趾 易林に、行於山趾。

【古覽】古い敷き瓦。陳陶の詩に、蛟龍蟠古覽。【仲宣欄】欄は井欄。襄陽志に、萬山東有王粲井。即仲宣篤。杜子美の詩に、應同王粲宅、曾井觀山前。【陸離魚背起】離離は微にして明かでない貌。王昌齡が詩に、青山隱隱孤舟微。說文に、進似魚背。

【七】隆中。輿地志に、隆中山在襄陽府城北下、即諸葛亮隱居、有三顧門。【盤鑿】曲折する貌。李白の蜀道難に、青泥何盤鑿。於帝前乘來爲山谷指畫形勢。蜀志許慈傳に、指掌畫地、舉手可采。晉書は、かんざしと報。晉は連冠於髮。箇は馬策。

【題義】萬山は一名、漢阜山。鄭交甫が玉女に見えた處であることは、前にも述べた通りである。此の詩は、東坡、萬山に游んで賦したのではない、弟の話を聞いて作つたのである。東坡の自註に、時獨不游、問轍而作とある。

【詩意】西に行いて連山を踰ゑ、北に出て漢水に至つた。此の邊の漢水は淵をなして山の麓を旋つて居る。山の寺は荒れ果てて、古い敷き瓦のみが清い色を帶びて居る。寺の下に、名高い王仲宣の井欄がある。井戸繩が深く食ひ込んで指が容る。西北に龜の背のやうな處が諸葛孔明の寓居した隆中である。澤山の桑が美しく茂つて居る。月は明に山の曲に移る。山上から洲の端が見られる。緑の水が白い沙を帶び、曲折してまはり廻る。日の傍の氣のやうに見える。かかる秀山長川、行いて見ないのは懶けものといふ恥を招く。其の地を踏まなければ其の情を盡くすことが出来ない。地に晉や轍を畫して、徒に説明の勞を費させるのみである。

【題義】隆中

隆中

諸葛來西國。千年愛未衰。
今朝游故里。蜀客不勝悲。

誰言襄陽野。生此萬乘師。

山中有遺貌。矯矯龍之姿。

龍蟠山水秀。龍去淵潭移。

空餘蜿蜒蹟。使我寒涕垂。

空しく餘す蜿蜒の蹟、我をして寒涕を垂れしむ。

【字解】【一】隆中。漢書春秋に、諸葛亮家於南陽之鄧縣，在襄陽城西二十里、號曰隆中。太平寰宇記に、襄陽縣有諸葛宅。三顧草廬は即ち此宅。一説にいふ、孔明躬耕南陽、乃襄陽之南陽城也。【二】生此萬乘師。揚雄の解嘲に、孟軻雖遠棄、猶爲萬乘師。【三】矯矯。介子推の傳に、有龍矯矯。矯矯は壯なる貌。【四】蜿蜒。龍蛇などのうねり行く貌、蛇行蜿蜒不羈。上版。

【題義】隆中に諸葛の故宅がある。荊州記に、宅西有山臨水、孔明嘗登之、鼓琴爲梁父吟、因名此山爲樂山」とある。

【詩意】諸葛孔明は、躬耕畠に耕し、好んで梁父の吟をなす。時に劉備は新野（今の新野縣、河南汝陽道に屬す。）に屯したが、徐庶は劉備に見えて曰く、諸葛孔明者、臥龍也、將軍豈願見之乎、と。又曰く、此人可就見、不可屈致。孔明は劉備の三顧に逢ひて、南陽の草廬を出でたのである。爾來、孔明は、景仰の人となつて、愛が未だ衰へない。今朝余は其の故里に游んで、古を懷うて感慨に

壠へない。襄陽の此の田舎に、帝王の師を出さうとは思はなかつた。山中にある孔明の遺貌は、矯矯たる龍姿、龍あれば山水秀で、龍去れば淵も移る。龍婉蜒の遺蹟を訪うて、涕涆を禁することが出来ない。

【餘論】紀昀は此詩を評して起四句全入律、意亦猶人而寫來脫酒、と。

竹葉酒

竹葉酒

楚人汲漢水釀酒古宜城。

楚人漢水を汲み、酒を釀す古宜城。

春風吹酒熟猶似漢江清。

春風酒を吹いて熟し、猶ほ漢江の清きに似たり。

耆舊人何在邱墳應已平。

耆舊人何にか在る、邱墳應に已に平なるべし。

惟餘竹葉在留此千古情。

惟餘して竹葉在り、此の千古の情を留む。

【字解】〔一〕竹葉酒の異名、尺牘雙魚の註に、釀酒、竹葉を以て其中に雜ふ、極めて清潔なり、故に酒を謂つて竹葉となす。酒器に、着格之地、釀酒以竹葉爲於中、經清潔。〔二〕宜城、楚の鄧陵。太平寰宇記に、宜城、襄陽屬縣、在府南九十五里。宜城縣、名勝志に、宜城有金沙泉，在縣東二里、其泉逕酒甘美、世稱宜城醤、又名竹葉春。〔三〕春風吹酒熟。梁元帝の詩に、宜城酒今朝熟。〔四〕耆舊、襄陽に耆舊傳あり。〔五〕邱墳、江淹の恨賦に、琴瑟滅兮邱墳平。〔六〕竹葉在、杜子美の詩に、三杯竹葉清。張華の輕薄篇に、着格竹葉清、宜城九醜。

【題義】昭明太子の將酒篇に、洛陽輕薄子、長安游俠兒、宜城溢渠椀、中山浮羽卮とある。宜城は、

本楚の鄧都、天寶元年に、宜城縣に改めた。故城は今之縣南に在る。其の地から美酒を出し、俗に其の宜城美酒を竹葉春と名ける。古詩にも、竹葉清香好、何妨飲數杯、とある。

【詩意】襄陽に美酒がある。漢水を用ひて宜城で釀したものであるから、世に宜城醤といふ。竹葉を中に雜へて、漢江の清きに似て居る所から竹葉春といふ。さて此の襄陽の地には、多くの古老があつて耆舊傳に載つて居る。而も其の人人は今、何處にある。墳土も已に平かとなつたであらう。惟竹葉の在るありて、千古風流の情を留めて居る。

【餘論】紀昀は此詩を頗有風調、然是空腔、若以此種爲超妙、則終身在築臼中と評して居る。築臼は鳥の栖、穴中に在るを巢といひ、樹上にあるを巢といふ。栖が臼の形に似たるより築臼といふ。在築臼中は現成格式に囚はれた意である。故に蹈常襲故を落築臼といふ。

鰻魚

鰻魚

曉日照江水遊魚似玉瓶。

曉日江水を照し、遊魚玉瓶に似たり。

誰言解縮項。

誰か言ふ解く項を縮むと。

貪餌縮項每遭烹。

餌を貪りて項を縮め毎に烹らるるに遭ふ。

杜老當年意臨流憶孟生。

杜老當年の意、流に臨みて孟生を憶ふ。

吾今又悲子。輶筋涕縱橫。

吾今又子を悲しみ、筋を輶めて涕縱横。

【字解】 〔一〕 鉢 古は動といひ、體廣くして局、頭も尾も皆、尖小、鱗は細い。淡水に產する。郊居賦に、赤鯉青筋、細鱗縮項と見ゆ。〔二〕 缩項 宋の張敬見、刺史となり、六櫓船を作り、齊の高帝に獻じて曰く、奉_レ橈頭鉢項鉢一千八百頭と。一本には食鉢項の鉢項の二字無し。勝れりと爲す。〔三〕 杜老當年云云 杜子美の詩に、復憶襄陽孟浩然、清詩句句藍堪傳、紙今著舊新語、長橈頭縮項鉢。孟浩然の詩に、鳥泊襄陽雁、魚藏縮項鉢。筋は箸、竹筋、匕筋の筋。

【題義】 襄陽志に、漢江出_レ鱸魚、土人以_レ槎斷_レ水、艤多依_レ槎、因號_ニ槎頭編_一とある。孟浩然の詩に、試垂_ニ竹竿_一釣、果得_ニ查頭編、編魚_ニ詠じて點綴_ニ警切なるを覺ゆ。

【詩意】 朝日が水を照して、遊魚がありありと數へられる。編魚を縮項編と人は言ふが、項を縮めないで、餌を貪り、果ては烹て食はれる。昔、晉の翟莊は、弋釣を事としたが、長するに及び、獵の方は廢めた。其の譯を聞くと、獵は我よりし、釣は物よりして、未だ頗かに盡さない。故に先づ其の甚だしいものを節するのである。且つ餌を貪つたり、釣を呑んだりするのは我でないと言つた。翟莊は、晩年亦、釣をも棄てた。又、杜子美は、詩友孟浩然を憶うて已まなかつたが、吾は今、又、汝編魚を悲しみて、之を食ふに忍びない。筋を輶めて涕を流した。

食雉

雉を食ふ

雄雉曳修尾驚飛向日斜。

雄雉修尾を曳き、驚飛日に向つて斜なり。

空中紛格鬪綵羽落如花。

空中紛として格闘し、綵羽落つること花の如し。

喧呼勇不顧投網誰復嗟。

喧呼勇みて顧みず、網に投じて誰か復嗟かん。

百錢得一雙新味時所佳。

百錢一雙を得、新味時に佳とする所。

烹煎雜雞鷺爪距漫槎牙。

烹煎して雞鷺を雜ふ、爪距漫に槎牙。

誰知化爲蜃海上落飛鴟。

誰か知らん化して蜃となるを、海上に飛鴟落つ。

【字解】 〔一〕 修尾 長い尾、體會の孔雀賦に、裁_ニ修尾之翫翫。翫翫は長い貌。〔二〕 紛格鬪 葦華の禽經に、雉介鳥也、善搏鬪。易林に、眇鶴無距與鶴格鬪。〔三〕 投網 詩に雉離_ニ于羅。〔四〕 烹煎 烹煮といふに同じ、陸游の詩に、自携_ニ茶籜就烹煎。〔五〕 雜雞鷺 左傳襄公二十八年に、公膳日雙雞、棄人鷺更_レ之以_レ鷺。〔六〕 化爲蜃 月令に孟冬雉入_ニ大水_ニ爲蜃。鄭註にいふ、大水、淮也と。搜神記に、千歳之雉入_ニ海爲蜃。〔七〕 海上落_ニ飛鴟 坎鴟に、蜃形如_レ蛇而大、噓_レ氣成_ニ樓臺_ニ如_レ在_ニ烟霧中_ニ高鳥倦_レ飛就之、以_ニ息氣_ニ輶吸_レ之而下、俗謂_ニ之蜃樓。

【題義】 雉に數種ある、青質五色なるを鶴雉といひ、長尾にして走つて鳴くを鶴雉といひ、黃色にして自ら呼ぶを鳴雉といひ、山雞にして小冠なるを驚雉といひ、五色が備つて章を成すを蜃といふ。此の詩の雉は鶴雉である。長尾にして善く走り、其の肉は甚だ美い。

【詩意】 雉の健なるものは鶴で尾の長さは六尺と、昔の書物に載つて居るが、其の鶴雉は、驚き飛んで空中で格闘を始める。羽が落ちても顧みない。果ては網に羅つて烹て食はる。千年の雉、海に入つて蜃となるといふ傳説があるが、其の蜃は、また能く氣を吐いて樓臺を爲す。海中に、春夏の間、依

約として島嶼常に此氣がある。そして高鳥が飛び倦んで之に就くと、忽ち吸はれてしまふといふ傳説もある。

頴大夫廟

人情難強回天性可微感。

世人爭曲直苦語費搖撼。

大夫言何柔暴主意自慘。

荒祠傍孤冢古隧有殘坎。

千年惟茅蕉世亦貴其膽。

不解此微言脫衣徒勇敢。

此の微言を解せずして、衣を脱して徒に勇敢。

【字解】
〔一〕頴大夫 東坡の自註に、頴考叔也、廟在汝州頴橋。汝州は今臨汝縣。太平寰宇記に、頴大夫廟在許州許昌縣、隋

大業九年、重建汝州云云。
〔二〕苦語 苦言に同じ、劉孝緯文に、苦言極旨。
〔三〕搖撼 うごかす、宋史に、多起邪說以搖撼

在位。
〔四〕古隧 江總の詩に、缺碑橫古隧。
〔五〕殘坎 坎は壠穴。
〔六〕茅蕉 秦の始皇帝は太后を乘に遇し、令を下して曰

く、敢諫者死と。諫めて死するもの二十七人、齊の客茅蕉衣を解いて井幹の上に立つて諫む。始皇帝を釋して迎へて太后を歸し、母子

たること初の如し。
〔七〕微言 諫言を用ひて、微しく意に中てる、列子説符に、人可與微言乎。

【題義】昔、頴考叔といふは、頴谷といふ土地の代官であつたが、鄭の莊公の悔心あるを聞いて、は

るばる都に上つて諫諫し、公の心を感化した。左傳隱公元年には、鄭莊公寔姜氏於城頴而誓之曰、不レ及ニ黄泉無ニ相見也、既而悔レ之、頴考叔爲ニ頴谷封人、聞レ之有レ獻於公、公賜ニ之食、食舍レ肉、公問之、對曰、小人有レ母、皆嘗ニ小人之食矣、未レ嘗ニ君之羹、請以遺レ之、公曰爾有レ母遺、繄我獨無、因語ニ之故、且告ニ之悔、對曰、君何患焉、若嗣レ地及レ泉、隧而相見、其誰曰レ不然、公從レ之、遂爲ニ母子如レ初、とある。

【詩意】人は感情に支配される。感情の盛んであるときは、強ひて回すことは出来ない。微言すれば、諫が入る。世の人は諫めると言へば、言葉を厲しく曲直を争ふ。頴考叔の莊公を諫める言は、如何にも柔和しい。流石の莊公も自ら慘みて、孝心を起した。其の頴考叔の墓も今は荒れ果て、莊公母子の誓を立てたといふ古い隧道も、今は残坎のみ。秦の始皇帝を直諫して、衣を解いて井幹の上に立つたといふ茅蕉の事は、千年の久しき今日でも人に貴はれて居るが、茅蕉は此の微言といふことを解しないで、徒に勇敢であつた。

【餘論】紀昀は此詩を評して、純用諫臣從諫之意、而語特明透、と言つて居る。

新渠詩并敍

新渠の詩
并に敍

庚子正月、予過唐州太守趙侯始復三陂疏召渠招懷遠人散耕於唐。予方爲旅人、不得親執壺漿簞食以與侯勸逆四方來者、獨爲新渠詩

五章以告於道路致侯之意其詞曰。

【訓讀】庚子正月，予唐州を過ぐ、太守趙侯始て三陂を復し、召渠を疏し、遠人を招懷して唐に散耕せしむ。予方に旅人となり、親ら壺漿箪食を執りて以て侯と四方の來者を勸逆することを得ず、獨り新渠詩五章を爲りて以て道路に告げ、侯の意を致す。其の詞に曰く、

【字解】〔一〕庚子 宋、仁宗の嘉祐五年（皇紀一七二〇年、西暦一〇六〇年）。〔二〕唐州 十道志に、唐州淮安郡、秦爲南陽郡と見ゆ。春秋、唐侯之國、唐質于唐州、明降爲縣、明清、皆屬河南南陽府、民國改爲北源縣。太平寰宇記に、武德五年、分置唐州。〔三〕太守趙侯 宋の趙尚真、字は濟之、安仁の子。仁宗の時、知唐州。唐州は沃壤であつたが、五代の亂で、土瘠民瘠。尚真是開記を接見し、漢の召信臣が陂渠の故述を得、三陂一渠を疏し、田に溉ぐ萬餘頃。〔四〕三陂 水經註に、東荊州有馬仁陂、湖陽陂、唐子陂。〔五〕召渠 召信臣の渠、輿地記に、漢召信臣爲南陽守、興水利、露宿深耕、民呼爲召父、有召堰，在今唐縣界内。〔六〕壺漿箪食 孟子、梁惠王篇に、簞食蒼縛、以迎王師。食は飯、簞は飯を入れる竹製の器。漿は米汁で作つた飲料、箪は瓶。

新渠之水其來舒舒。

溢流於野至於通衢。

渠成如神民始不知。

問誰爲之邦君趙侯。

新渠之田在渠左右。

新渠の水、其の來る舒舒。

溢流於野に溢れ、通衢に至る。

渠成る神の如く、民始め知らず。

問ふ誰か之を爲る、邦君趙侯。

新渠の田、渠の左右に在り。

渠來奕奕如赴如湊。
如雲斯積如屋斯溜。

嗟唐之人始識杭稌。

新渠之民自淮及潭。

挈其婦姑或走而顙。

王命趙侯宥我新民。

無與王事以訖七年。

侯謂新民爾既來止。

其歸爾邑告爾鄰里。

良田千萬爾擇爾取。

爾耕爾食遂爲爾有。

築室於唐孔碩且堅。

生爲唐民飽粥與餧。

死葬於唐祭有鷄豚。

爾耕爾食遂爲爾有。

築室於唐孔碩且堅。

生爲唐民飽粥與餧。

死葬於唐祭有鷄豚。

天子有命我惟爾安 天子命あり、我爾の安きを惟ふ。

【字解】 〔一〕 舒舒 ゆるやかな貌、韓退之の詩に、淮之水舒舒。〔二〕 通衢 四方に通するちまた、漢書東方朔傳に、矯之於四通之衢。〔三〕 美美 盛なる貌、詩の魯頌に新廟美矣、詩の大雅に美矣樂山。〔四〕 程程 程は梗、徐はもじこめ。同じく東坡の詩に、但願鈞矢熟、年年樂秋成。〔五〕 譚 潭州、元和郡縣志に、江南道有潭州。〔六〕 乾 乾七年、趙尚寬は、仁宗の至和元年（皇紀一七一四年、西暦一〇五四年）を以て、唐州に知となり、嘉祐五年に至る、故に時に七年といふ。乾はなほる、卒と同じ。〔七〕 孔 古文では甚に同じ、詩に、兄弟孔懷。後世は讀文でなければ用ひない。〔八〕 弟弟 繼、左傳昭公七年の註に、籠寒、朝周。權弓の疏に厚曰継、希曰弟。

【題義】 趙尚寬が唐州の知事となるや、圖記を按視して召信臣が故迹を得、卒を發して三大陂と一大渠とを復し、田に溉ぐこと萬餘頃。又、民をして自ら支渠を爲り、轉相浸灌せしむ。四方の民が雲集すると、尚寬は復、請うて荒田を民の口數に應じて授け、民に官餉を貸して耕牛を買はしむ。三年に及ぶ頃、廢田が盡く膏腴となつた。其の結果、獨り流民が自ら歸するばかりでなく、淮湖の民、至るもの萬餘戸といふことである。此詩は之を詠じたもので、一章と二章とは唐の民に告げるもの。三章と四章とは、流民に告げるもの、そして第五章は全章を總結して居る。

【詩意】 (第一章は) 新渠の水は、ゆるやかに流れ來つて、四方に通じ、灌溉の用をする。これ誰の力、邦君趙司寬の力である。(第二章は) 新に渠が出來て、水が赴くが如く湊ぐが如くに來る。お蔭で、唐の人は梗や、糯の味を知る。(第三章は) 淮州より潭州に至る多くの民が七年の久しき趙侯の善政を蒙つたことを言ふ。(第四章は) 自作自給を勧め、流民となるを免れしむ。(第五章は) 子來の民は唐州に

家を造る、大きくて堅い。生きて唐州の民となり、死して唐州に葬らる。(それは王様の餘澤であることを言ひて全章を總結したのである。)

雙鳬觀

王喬古仙子時出觀人寰

王喬は古の仙子、時に出でて人寰を觀る。

常爲漢郎吏厭世去無還。

常て漢の郎吏となり、世を厭ひて去つて還るなし。

雙鳬偶爲戲聊以驚世頑。

雙鳬偶戲をなすは、聊か以て世頑を驚かす。

不然神仙迹羅網安能攀。

然らずんば神仙の迹、網に羅つて安んぞ能く攀せん。

紛紛塵埃中銅印紺青綸。

紛紛たる塵埃の中、銅印は青綸を紺ふ。

安知無隱者竊笑彼愚奸。

安んぞ知らん隠るるなきもの、竊に彼の愚奸を笑ふことを。

【字解】 〔一〕 雙鳬觀 東坡自註にいふ、在葉縣と。元和郡縣志に、汝州葉縣、後漢書謂之小長安、開元三年、於縣置仙州、以漢時王喬於此得仙也。〔二〕 王喬 後漢王喬傳に、顧宗世爲葉令。〔三〕 人寰 人の世、寰は界。白居易の長恨歌に、問頭下望人寰處。〔四〕 爲漢郎吏 王喬は顧宗の世、尚書郎となり、出でて葉令となる。〔五〕 銅印紺青綸 紺は青綸の綾、前漢書百官公卿表に、凡吏秩比六百尺以上、皆銅印璽綾。〔六〕 竊笑 戰國策に、臣竊笑之。

【題義】 後漢の王喬は、葉令となつたが、神仙の術がある。漢の法に、畿内の長史は、節朔に朝することになつて居る。喬は毎月朔旦に、常に縣から來朝する。帝は其の來ることが數々で、車騎を見ざ

るを怪しみ、密に太史をして之を伺はしめた所、將に至らんとするとき、雙鳧が南から来る。是に於て鳧の至るを候ひ、羅を擧げて之を張つて、但、二つの鳥を得た。それは嘗て賜うた所の尙書履であるといふことである。此詩は此の故事に就いて詠じたものである。

【詩意】 古仙人王喬は、天上にあるべきを、時に人界に出で、尙書郎となり、葉縣の令となる。仙人は人界を厭うたから、去つて還らない筈であるのに、雙鳧となつて朔旦に朝するのは、如何なる譯か、それは世の分別のない頑なものを警醒する爲めであらう。なせといふに、既に神仙の術を得たものが、網に罷つて飛行の出来ないといふ道理はないからである。もし又、紛糾たる塵埃の中下つて、銅印を帶び、青絲綬をまとへることに心のあるならば、安んぞ知らん、隠れない人間界のものは、心窃に彼の愚であり姦であることを笑ふであらう。

許州西湖

許州の西湖

西湖小雨晴濛濛春渠長。
來從古城角夜半轉新響。
使君欲春游浚沼役千掌。
紛紛具畚鍤閼若蟻運壤。
夭桃弄春色生意寒猶快。

西湖小雨晴れ、濛濛として春渠長し。
來る古城の角よりし、夜半新響を轉す。
使君春游を欲し、沼を浚うて千掌を役す。
紛紛として畚鍤を具へ、閼すること蟻の壤を運ぶが若し。
夭桃春色を弄す、生意寒うして猶は快む。

惟有落殘梅標格苦矜爽。
游人全已集挈榼三且兩。
醉客臥道旁扶起尙偃仰。
池臺信宏麗貴與民同賞。
但恐城市歡不知田野愴。
潁川七不登野氣長蒼莽。
誰知萬里客湖上獨長想。

惟落殘の梅あり、標格苦だ矜爽。
游人全として已に集る、挈榼三且つ兩。
醉客道旁に臥す、扶け起すも尙ほ偃仰。
池臺信に宏麗、貴きは民と同じく賞す。
但恐る城市歡びて、田野の愴むを知らざるを。
潁川は七たび登らず、野氣長へに蒼莽。
誰か知らん万里の客、湖上獨長く想ふ。

【字解】 **〔一〕** 許州 春秋時代の許國、漢の颍陰縣、清の時は河南省に屬し、民國となつて許昌縣と改めた。一統志に、河南西湖、一在許州、一在鄖陵。**〔二〕** 翦榼 水波のたゞよひ動く貌、何遜の詩に、的的異レ沙靜、灑灑逐レ波輕。**〔三〕** 春渠 劉孝緯の詩に、橫殿臨春渠。**〔四〕** 使君欲春游 使君は刺史をいふ、前に出づ。宋の呂公、此州の太守となつたとき、黄河を起して此の西湖に導き、村夫が之を浚治すと傳ふ。**〔五〕** 畚鍤 土を運ぶもつこ、土を掘る鋤。晉の東晉が廣農議に、雲雨生於畚鍤。蟻運壤、皆子に、福朋曰、蟻壤寸而有水云云。**〔六〕** 天桃 詩の周南桃夭篇に、桃之夭夭、灼灼其華。**〔七〕** 快 廣韻に、快、悵也と見ゆ。情が滿足しないこと、漢書蕭何の傳に、寒ニ其快快心。**〔八〕** 標格 高い品格、杜甫の詩に、早年見標格。**〔九〕** 全已集 全は聚る意、唐書の儒學傳に、全ニ集京師。**〔十〕** 翦榼 榍は酒器、劉伶の酒德頌に、止則操レ卮執レ榼、動則挈レ榼提レ壺、惟酒是務、焉知ニ其餘。**〔十一〕** 宏麗 顏真卿の清河頌序に、宮宇宏麗。**〔十二〕** 不登 登は成なり、漢書文帝紀に、詔曰、歲一不登、民有ニ飢色。**〔十三〕** 蒼莽 郊外の野色をあわせとしたるをいふ、莊子逍遙遊に、適ニ莽蒼者、三餐而反、腹猶果然。

【題義】許曲の西湖は、其の始は唐の曲環が鎮を作した時、土を取つて城を築き、水を導きて瀧へたものである。宋の莒公が太守となつて、黄河を起し、村夫をして之を浚治せしめ大きくなつたものださうで、鑿開魚鳥忘情地、展盡江湖極目天といふ詩が、其の時の光景である。此詩の結びの處は、杜甫の觀打魚の詩から化し來つたもので、忽歸莊論妙、非迂詞と古人も評して居る。

【詩意】許州の西湖の眺は格別で、小雨が晴れると、古城の一角から瀧瀧として波を逐うて渠水が流れ、夜半に新響を傳へる。太守莒公は風流を好み、春游のために、村夫千人をして沼を浚はした。土を運ぶ畚や、土を掘る鋤が縱横して、恰も蟻の壠を運ぶ闇ぎであつた。桃李の春が來たが、生意は寒氣の爲に十分ではなかつた。ただ落残りの梅が、氣高い姿を呈して居る。それで春を探る遊人は塈をして聚る。一瓢の春酒兩三人、時に醉客の道の傍に臥すを見る。扶け起しても、起きたり倒れたりする。池臺の建築は廣くて美しい。太守の民と賞翫を同じうする所は、欣ばしいが、ただ恐れることは城中の人だけが歡樂を得て、田野の憎める實情を知らないことである。事實、頴川は七年の不作である。野氣は蒼莽である。誰か知らん万里の客、湖上に立ちて感懷に堪へないことを。

阮籍嘯臺

阮籍の嘯臺

阮生古狂達。遁世默無言。
猶餘胸中氣。長嘯獨軒軒。

阮生は古の狂達。世を遁れ默して言なし。
猶ほ餘す胸中の氣、長嘯獨軒軒。

高情遺萬物。不與世俗論。

高情萬物を遺れ。世俗の論に與らず。

登臨偶自寫。激越蕩乾坤。
登臨偶自ら寫し、激越乾坤を蕩かす。

醒爲嘯所發。飲爲醉所昏。
醒むれば嘯の發する所となり、飲めば醉の昏する所となる。

誰能與之較。亂世足自存。
誰か能く之と較せん、亂世自ら存するに足る。

【字解】〔一〕嘯臺 太平寰宇記に、阮籍臺在尉氏縣東南二十步。尉氏縣は、春秋時代の鄧邑、今は河南開封道に屬す。〔二〕狂

辯 世說に、貢羊、古之遺狂。〔三〕猶餘胸中氣 阮籍は濟世の志があつたが、魏晉の際、天下多事で、名士の全きを得るもののが少いのを見、世事に與らず酣飲を當とした。〔四〕軒軒 舞ふ貌、淮南子に、見一士軒軒方迎風而舞。〔五〕高情 謝靈運の詩に、高情屬天雲。〔六〕激越 音聲がげしく、清くあがる、班固の西都賦に、聲激越、營屬天。

【詩意】阮籍字は嗣宗、古の達觀した狂生である。世を遁れて、物を言はないが、併し全く世を顧みないのでない。胸中の氣は、依然として存し、世を濟ふの志が見える。其の長嘯軒軒、高情萬物を遺れるのは、時事が日に非であるから、禍を避けるが爲めであらう。嘯臺に登つて發する激越の

音は、天地を動かすべく、醒めては長嘯し、醉ひては昏昏として眠むる。これが亂世に在つて自ら存する所以である。

大雪獨留尉氏有客入驛呼與飲至醉詰旦客

南去竟不知其誰

大雪、獨尉氏に留る、客あり驛に入る、呼んで與に飲み、醉に至る、詰旦、客
南に去る、竟に其の誰なるかを知らず
古驛無人雪滿庭。 古驛人無くして雪庭に満つ、
有客冒雪來自北。 客あり雪を冒して來る北よりす。
紛紛笠上已盈寸。 紛紛として笠上已に寸に盈つ、
下馬登堂面蒼黑。 馬を下り堂に登りて面は蒼黒。
苦寒有酒不能飲。 苦寒酒あれども飲むこと能はず、
見之何必問相識。 之を見る何ぞ必ずしも相識を問はん。
我酌徐徐不滿觥。 我酌む徐徐觥に満たず、
看客倒盡不留澀。 客を看るに倒盡して澀を留めず。

【字解】 **〔一〕** 尉氏 縣の名。もと鄭國之東鄙、鄭の大夫尉氏の邑であつた所から邑の名となつた。太平寰宇記に、晉時南阮所居。九域志に、在開封南九十里。**〔二〕** 古驛 漢書の註に、傳若今之驛。古は車を以てするを傳車といふ。其の後、又、車に騎を置く、之を驛騎といふ。
〔三〕 笠 蓋笠、莎草の皮で爲つた笠、詩に、被都人士、蓋笠纏拂とある。
〔四〕 不留澀 東坡、又、飲酒但

千門晝閉行路絕。

千門晝閉ちて行路絶え、

相與笑語不知夕。

相與に笑語して夕を知らず。

醉中不復問姓名。

醉中復姓名を問はず、

上馬忽去橫短策。

馬に上り忽ち去りて短策を横ふ。

【題義】 東坡が大雪に逢つて、尉氏縣に逗留し、客と對飲したことと賦したのである。尉氏縣は、春秋時代に鄉邑であつたことは、前にも述べたが、漢の時に縣となり、明清には、河南開封府に屬し、今は河南開封道に屬して居る。

【詩意】 尉氏縣の古驛は、大雪の爲に、往來の人も絶えた。此時、雪を冒して北方から來た客がある。笠の上に積つた雪は一寸餘、面色は疲れて青黒い。寒さがあまり強いため、最初は酒も飲めなかつた。雪中の遇合、必ずしも曾て相識ると否とを問はない。兩人對酌、我は酌む徐徐、酒觥に満たないのに、彼は既に瓶を倒した。酒量は到底彼に及ばない。雪の爲に千門閉ぢ、行人絶ゆ。兩人して笑語、日の暮れるも知らなく、醉うて互に姓名も名乗らなかつたが、彼は馬に上つて立ち去つた。

黃河

黃河

活活何人見混茫。

流れる聲、詩の衝風に、河水洋洋、

活活何人見混茫を見る、

北流活活。一本に浩浩とある。〔三〕

崑崙氣脈本來黃。

濁流若解汚清濟。

驚浪應須動太行。

帝假一源神禹蹟。

世流三患梗堯鄉。

靈槎果有仙家事。

試問青天路短長。

試みに青天に路の短長を問はん。

胥山、一名五行山。

【穴】神禹蹟 大禹が治水の功績をいふ。

【七】三患 莊子天地篇に、乘彼白雲、至于子堯鄉、三患莫至、身當無疾。三患は、病、老、死ないふ。死生を一にする、故に三患が至らない。

【八】靈槎 博物志に、昔人有泛槎至天河得石歸。

示靈君平曰、是織女支機石也。

【詩意】 黃河の水は活活と流れて居るが、其の混茫を窮めたものはない。水源は崑崙山から出て、水色は黄である。濁河は終に清濟を汚すことが出来ないが、もし汚すことが出来れば、驚浪は應に太行山を動かすことが出来やう。堯の時に九年の洪水があつた。上帝は黄河の一源を假して大禹をして治水の功をなさしめ、世、病、老、死の三患を除いて堯の郷を梗いた。又、張騫は河源を窮めたが、昔の人に槎を泛べて天河に至り支機石を得て歸つたといふものがある。靈槎果して上天が出來れば、試みに問はん、青天に至る路の短長を。それは迷も叶はないであらう。

朱亥墓

朱亥の墓

昔日朱公子、雄豪不可追。
今來遊故國、大家屈稱兒。
平日輕公相、千金棄若遺。
梁人不好事、名姓寄當時。
魯史盜齊豹、求名誰復知。
憤無怨世俗、猶不遭仲尼。

古今體詩 朱亥墓

崑崙氣脈本來は黄なり。

濁流若し清濟を汚すを解せば、

驚浪は應に須らく太行を動かすべし。

帝一源を假して禹の蹟を神にし、

世ト三患を流して堯の郷を梗ぐ。

靈槎果して仙家の事あらば、

試みに青天に路の短長を問はん。

太行、恒山至子碭石。山海經に、太

無疾。三患は、病、老、死ないふ。死生を一にする、故に三患が至らない。

濟、杜甫の詩に、濁河終不汚清

之域百里一小曲、千里一大曲、九曲

以達于子海」とある。張騫は大夏に使

して何源を窮む。恐んぞ所謂崑崙を

親んやと本傳にある。

【三】汚清

濟、【五】太行 山の名、禹貢に、

南朱仙侯。どちらが正しいか分らない。【二】魯史 孔子の筆削した春秋をいふ。【三】 盡齊豹 春秋昭公二十年に、秋、盜殺齊侯之兄繁。此の盜とあるは齊豹のこと。齊豹は不義のことを爲し、亂を起して之を殺せし故に盜とした。

【題義】 朱亥は、戰國魏の大梁の人。勇俠にして屠肆に隠る。侯羸は之を魏の公子無忌（信陵君）に薦めた。秦の昭王が趙を攻める、無忌は之を救はうとしたが、兵力を要するので、朱亥をして四十斤の鐵椎を袖にし、將軍晉鄙を擊殺して、其の軍を奪ひ、遂に秦の兵を退けて趙を存した。其の朱亥の墓を訪うて懷を述べたのである。

【詩意】 朱亥は賢者であつたが、世の人には知られないで屠間に隠れたのである。雄豪は常人の及ぶ所ではない。今、其の遺跡を訪ねると、屠兒原といつて、大家が兒と稱されて居る。朱亥は平生、富貴を輕んずる。梁人も元來事を好まない。従つて名姓も、昔のままにして居る。一體、春秋の筆法によると、心術を責めるから、齊豹の不義を筆誅して盜とした。人は其の名姓を知ることが出来ない。朱亥の報じた所は私恩、負いた所は大義。然るに司馬遷は、晉鄙の死節を美めないで、朱亥の豪俠を多とするは、其の當を得ない。もし春秋の義を以て之を責めるならば、盜殺ニ晉鄙としなければならない。幸にして孔子に遭はなかつたから盜名を免れた。して見ると、世俗の呼んで屠兒とするのは、辱しめたことにはならないであらう。

次韻水官詩

水官の詩に次韻す

淨因大覺璉師以閻立本畫水官遣編禮公公既報之以詩謂某汝亦作某頓首再拜次韻仍錄一詩爲一卷獻之。

【訓讀】 淨因大覺璉師、閻立本の畫ける水官を以て編禮公に遣る、公既に之に報するに詩を以てし、某に謂ふ、汝も亦作れと、某頓首再拜して韻に次す、仍て二詩を錄して一卷となし之を獻す。

【字解】 一 水官 水神をいふ、蘇洵の詩に、水官騎蒼龍、龍行欲上天。【二】淨因院 宋の仁宗の皇祐中、崇建。明州の懷璉禪師、詔に應じて之に住し、號を大覺禪師と賜はつた。【三】閻立本 唐朝名畫家に、立本位居宰相與兄立德齊名。【四】編禮公 蘇洵をいふ。宋史蘇洵傳に、嘉祐間除祕書校書郎、會太常修纂禮書、乃以爲潤州文安王譯與項城令姚闢同修爲太常因革禮一百卷（太常は官名、宗廟禮儀を掌る）續通鑑長編に、嘉祐六年七月、蘇洵同編纂禮書。又、八年三月に、禮院編纂蘇洵貽書釋琦言山陵事を載す。故に東坡の詩に編禮公と稱す。

高人豈學畫。用筆乃其天。
譬如善游人。一一能操船。

閻子本縫掖。疇昔慕雲淵。

丹青偶爲戲。染指初嘗龍。
愛之不自己。筆勢如風翻。

傳聞貞觀中。左衽解椎鬟。

高人は豈畫を學ばんや、筆を用ゐるは乃ち其の天なり。
譬へば善く游ぐ人の、一一能く船を操るが如し。
閻子は本縫掖、疇昔慕雲淵を慕ふ。
丹青は偶々戲を爲すなり、指を染め初めて龍を嘗む。
之を愛して自ら已まず、筆勢は風の翻るが如し。

南夷羞白雉。佛國貢青蓮。
詔令擬王會。別殿寫戎蠻。
熊冠金絡額。豹袖擁旛旗。
傳入應門內。俯伏脫劍峯。
天姿儼龍鳳。雜沓朝鵬鷗。
神功與絕迹。後世兩莫扳。
自從李氏亡。羣盜竊山川。
長安三日火。至寶隨飛烟。
尙有脫身者。漂流出東關。
三官豈容獨。得此今已編。
吁嗟至神物。會合當有年。
京城諸權貴。欲取百計難。
贈以玉如意。豈能動高禪。
惟應一篇詩。皎若畫在前。

南夷は白雉を羞め、佛國は青蓮を貢す。
詔して王會に擬せしむ、別殿戎蠻を寫す。
熊冠金もて額を絡ひ、豹袖旛旗を擁し。
傳へて應門内に入る、俯伏して劍峯を脱す。
天姿儼として龍鳳、雜沓して鵬鷗を朝せしむ。
神功與に迹を絶ち、後世兩ながら扳くなし。
李氏の亡びより、羣盜山川を竊み、
長安三日火あり、至寶は飛烟に隨ふ。
尙ほ身を脱せしものあり、漂流して東關を出づ。
三官は豈獨を容れんや、此を得て今已に編す。
吁嗟至神の物は、會合當に年あるべし。
京城の諸權貴、取らんと欲して百計難し。
贈るに玉如意を以てするも、豈能く高禪を動かさんや。
惟應に一篇の詩、皎として畫の前に在るが若し。

【字解】 〔一〕 菩提云云。莊子の達生篇に、頤闊問仲尼曰、吾嘗濟乎觸深之淵、津人操舟若神、吾問焉曰、操舟可學邪、曰可、善游者數能、若乃夫沒人、則未嘗見舟、而便操之也。〔二〕 着被。儒者の服、禮記儒行篇に、孔子對袁公曰、丘少居魯、衣逢掖之衣、長居宋、冠章甫之冠。〔三〕 葬雲淵。江淹の別賦に、雖謂雲之靈妙、嚴榮之筆精。王子淵・楊子雲・嚴安・徐陵をいふ。一説に、漢書、終軍字子雲、王更字子淵、二人合傳、故に東坡之を竝稱す、楊子雲にあらずと。〔四〕 丹青偶爲戲。唐の太宗、侍臣と舟を春苑池に泛ぶ。異鳥の波に浴するを見て、上之を悦ぶ。坐者に詔して詩を賦せしめ、立本を召して畫かしむ。傳呼して畫師といふ。立本此時已に主爵郎中たり、歸つて其子を戒めて曰く、吾は少にして書を読み、今、獨、畫を以て名あり。駕役等と等うせらる。汝曹、慎んで習ふこと勿れと。〔五〕 染指初嘗電。左傳宣公四年に、楚人獻染於鄭襄公子公之食指動、以示子家曰、必醫異味及宰夫解電食大夫、召子公而弗與也、子公怒、染指於鼎、電之而出。〔六〕 左衽。論語憲問篇に、被髮左衽。夷狄の俗。〔七〕 植鬢。髮は結髪、唐書南贊驥傳に、東謝髮俗、椎髻韜以爲重於後。〔八〕 握王會。貞觀三年に、東壁の謝元深入朝す、中書侍郎顏師古奏す、昔周武王、治致太平、遠國歸其政、乃集其事爲王會篇、可圖寫貽後以彰恩德之德」と、之に從ひ、尙書閻立本に命じて之を畫かしむ。〔九〕 熊冠金絡額。舊唐書の東謝髮傳に、貞觀三年、元深入朝、冠烏鵲皮冠、以金銀絡額、身披毛被。〔十〕 塵塵。釋名に、塵、幡也。周禮に、通帛爲塵。塵門、天子の正門。〔十一〕 俯伏脫劍峯。史記蘇秦傳に、俯伏侍取食。前漢司馬遷傳の註に、奪、奪弓也。〔十二〕 龍鳳。唐書太宗本紀に、龍鳳之姿、天日之表。〔十三〕 神功與絕迹。任昉の神功無紀。司馬相如の封禪文に、殊尤絕迹。〔十四〕 莫扳。扳は攀と同じ。〔十五〕 長安。漢書の地理志に、長安縣、高帝五年置。〔十六〕 三官。道家奉する所の神、天官、地官、水官。〔十七〕 玉如意。胡瓈別傳に、吳時林淵掘地、得白玉如意。

【題義】 蘇老泉が大覺禪師に報じた詩といふのは、水官騎蒼龍、龍行欲上天、手攀時且住、浩若乘風船、不知幾何長、足尾猶在淵、下有二從臣、左右乘魚龍、冕鑠相顧視、風舉衣袂翩、女子侍臣側、白頰垂雙鬟、手執雉尾扇、容如未開蓮、從者八九人、非鬼非戎蠻、出水未成列、先登揚旛旗、長刀擁旁牌、白羽注強券、雖服甲冑、狀貌猶鯨鷗、水獸不得從、仰面以手扳、空虛走

雷霆。雨電晦。九川、風師黑虎囊、面目昏。塵烟、翼從三神人、萬里朝。天關、我從。大覺師、得。此詭怪編、畫者古閻子、於。今三百年、見者誰不愛、予者誠已難、在。我猶在。子、此理寧非禪、報之以。好詞、何必畫在。前、而。有。此詩。與。東坡。之。詩。併。觀。題。義。明。之。事。出。來。

【詩意】閻立本は、位宰相に居る、豈、矻矻として繪畫を學ばうぞ、丹青の巧みであるのは、其の天才である。善く游ぐ人の水に親しむやうなものである。閻子は、もと儒生で、其の昔は終軍や王襄の文才を慕うたものである。丹青は、餘戯に過ぎない。一たび指を染めて廢められなく、筆勢は風の翻へるやうである。昔、唐の貞觀年間に、左衆の夷が椎囊を解いて來朝し、又、南夷は白雉を、佛國は青蓮を各々貢獻した。詔して周の武王の時の故事に倣ひ、王會圖を作らしめたのである。そこで、別殿には戎蠻を寫す。烏熊の皮冠、金銀で額を絡うた。豹袖で旗を擁し、王宮正門内に入る。弓劍を脱して俯伏する。天姿は儼として龍鳳の衣をめされ、鵬鳥蛇鱗の象ある服を著けた卿大夫は難否して朝覲する。神功は比すべきなく、後世の及ぶ所でない。圖は之を寫したものである。唐朝が亡びて五代亂離の世となつて、羣盜が山川を竊む。此時に長安の火災で、至寶も焼けたが、此の圖は三官即ち天神、地神、水神の力で、歸すべき所に歸する。京城の諸權貴は、之を入れやうとしても、それは難かしい。玉如意のやうな貴重の品を贈つても、大覺禪師の心を動かすことは出来ない。たゞに一篇の詩、皎として畫の前に至るが如し。これを贈物とする。

終

